

閉會ハ右述フルカ如キ效果ヲ生スト雖モ之ニ例外ヲナスハ議院法第二十五條ノ場合ナリ即チ各議院ハ政府ノ要求ニ依リ又ハ政府ノ同意ヲ得テ議會閉會ノ間委員ヲ設ケテ議案ノ審査ヲ繼續セシムルコトヲ得ルモノトス故ニ此場合ニ於テハ閉會中ナルニモ拘ハラズ委員會ハ其行動ヲ繼續シ得ヘク又前會ニ於テ議決ニ至ラザリシ議案ノ後會ニ繼續スルコトヲ妨ケサルナリ

(註一) 會期ノ延長ハ天皇ノ自由ナリト雖モ之ヲ無限ニ延長シ憲法第四十一條ノ「毎年之ヲ召集ス」ト謂フ規定ニ抵觸スルコトヲ許サス只其規定ニ抵觸セサル範圍内ニテ延長スルコトヲ得天皇若シ一年以上延長シ開會ヲシテ一年以上繼續セシムルトキハ一年以上召集ヲ爲スコト能ハスシテ毎年之ヲ召集スト謂フ規定ト抵觸スルコトナリ

(註二) 會期ノ計算ニ付テ二説アリ召集當日ヨリ起算スヘキモノナリト主張スル説ト開會當日ヨリ起算スヘキモノナリト主張スル説トアリ余ハ議會ノ會期ハ議會成立シ議會力議會トシテ本來ノ行動ヲ爲シ得ヘキトキナラサルヘカラス故ニ開會當日ヨリ起算スル説ヲ妥當ナリト信ス(同説清水博士憲法篇九六六頁)

第五 停會及休會

停會トハ一時議會ノ議事ヲ停止スルヲ謂フ而シテ停會ハ兩院同時ニ之ヲ行フモノトス(憲法第四十四條)均シク天皇ノ大權ニ屬ス(憲法第七條)然レ共停會ノ目的ニ付テハ憲法其他ノ法律ニ明文ナキカ故ニ法文上之ヲ論定スル能ハス從テ

法理ノ上ヨリ其目的如何ヲ求メサルヘカラス然ラハ法理上其目的ハ何レニアリヤト云フニ余ハ議會力不當若クハ不法ナル議決ヲ爲サントスル場合ニ議會ニ向ツテ反省ヲ求ムルカ爲ニ行フモノト信ス故ニ停會ニ依リテ議會ノ反省ヲ求ムルモ尙其議決正當ニ出テサル虞レアルトキハ議會ノ解散次テ至ルモノトス故ニ停會ハ解散ノ側ヨリ之ヲ觀ルトキハ其前提ナリト謂フコトヲ得ヘシ政府ハ前述ノ如ク議院ノ態度ニ付テ反省ヲ促シ又ハ交渉ヲ重ヌルカ如キ事情ノ生シタル場合ニハ勅旨ヲ請ヒ十五日以内ニ於テ議院ノ停會ヲ命スルコトヲ得ルモノトス而シテ停會ハ單ニ議事ヲ停止スルニ過キサルヲ以テ其期限經過シタル後ハ議會ノ議事ハ繼續セララルナリ

(註) 議會ニ於テ或議決(例ヘハ彈劾の上奏ノ決議)ヲ爲スト政府ヨリ停會ノ勅命書ヲ呈出スルトノ間ニハ往々ニシテ間髪ヲ容レサルコトアリ一步期ニ後ルルトキハ交渉ノ暇ナクシテ直チニ解散ヲ行フノ已ムヲ得サルニ至ルヲ以テ實際ノ手續ヨリ言ヘハ政府ハ開會ノ初メニ當リ議院法第三十三條ニ依リ十五日以内ニ於テ停會ヲ命スルノ勅命書ヲ作りテ其御裁可ヲ請ヒ停會ノ日數年月日トハ白字ニシテ之ヲ内閣ニ備ヘ置キ必要ト見レハ直チニ呈出スルノ用意ヲナセリ

茲ニ停會ト同名ニシテ之ト區別スヘキハ衆議院解散ノ場合ニ於ケル貴族院停

會ノ場合ナリ(憲法第四十四條第二項)此場合ニ於ケル貴族院ノ停會ハ閉會ト同
一ノ效力ヲ有ス從テ衆議院ノ解散ニ因リテ停會ヲ命セラレタル貴族院ハ次ノ
議會ニ於テ停會前ノ議事ヲ繼續スルコトヲ得サルモノトス

(註一) 停會中ノ期間ハ會期中ニ屬スヘキモノナリヤ否ヤニ付キ議論アルモ余ハ停會中ノ期間モ會期中ニ算入スヘキモ
ノト思考ス何トナレハ會期中トハ開會ヨリ閉會マテノ期間ヲ謂フモノニシテ停會ハ會期中ノ出來事ナレハ停會中
ノ期間ハ勿論會期ニ算入スヘキモノナレハナリ

(註二) 停會ノ期間ハ議院法第三十三條ニ依リ日數ヲ十五日以下トシ其回數ニ付テハ何等ノ制限ナシ茲ニ於テ疑ヒノ生
スルハ十五日ノ期間ハ一回ノ停會ノ最長期ナリヤ一會期間ノ停會ヲ通シタル日數ノ制限ナリヤト謂フ問題ナリ
或論者ハ一會期間中通計十五日ヲ超ユヘカラスト主張ス而シテ其理由ハ一回ノ停會ヲ十五日以内トシ回數ヲ制限
セサレハ會期ヲ盡ク停會ノ爲ニ消費スルカ如キコトナシトセス十五日ノ制限ヲ設ケタル理由ヲ解スルコトヲ得サ
ルニ至ルヘシト(清水博士憲法篇九七八頁)然レ共余ハ此說ニ反對ニシテ十五日ハ一回ノ最長期間ナリト信ス丁抹
憲法第二十一條ノ如キ「國王ハ期間ヲ定メ停會ヲ命スルコトヲ得但シ議會ノ同意ナクシテ一會期中二回以上若ク
ハ二ヶ月以上停會スルコトヲ得ス」獨逸憲法第二十六條ノ如キ「帝國議會ノ同意アルニアラサレハ同會期中ニ再ヒ
停會ヲ命シ又ハ三十日ヲ超過スル停會ヲ命スルコトヲ得ス」又普國憲法第五十二條自耳義憲法第七十二條佛國公
權ノ關係ヲ規定セル憲法第二條ノ如ク「國王ハ兩院ヲ停會スルコトヲ得停會ハ各院ノ承諾アルニアラサレハ三十
日ヲ超過スルコトヲ得ス又一會期中二回以上ノ停會ヲ命スルコトヲ得ス」ト規定セル國ニ於テハ其制限ヲ超ユル
コトヲ得サルハ勿論ナル也我國ノ如ク之ニ對シ何等ノ制限ヲ付セサル以上數回ノ停會ニヨリ通算十五日ヲ超ユル

モ別ニ規定違反ニアラス現ニ第五回帝國議會ニ於テハ第一回ノ停會日數十日間第二回停會日數十四日間合計二十
四日間ノ停會ヲ行ヒ第三十回帝國議會ニ於テハ第一回ノ停會日數十日間第二回停會五日間第三回停會三日間通計
二十三日間ノ停會ヲ行ヒタル實例アリ故ニ余ハ十五日ノ期間ハ一回ノ最長期間ナリト信ス

(註三) 停會權ハ何人ニアルカニ付テハ二說アリ一ハ天皇ニ專屬スルモノナリト謂フ說ト他ハ政府ニモ停會權アリト謂
フ說トアリ余ハ天皇專屬說ニ贊成スルモノナリ其理由ハ憲法第七條ノ明示スル所ニシテ何等疑問ノ余地ナシ然ル
ニ或論者ハ此說ニ反對シテ曰ク停會權ハ天皇ノ大權ニ專屬スルモノニアラスシテ政府モ亦停會ヲ命スル權利アリ
ト主張ス其理由ハ議院法第三十三條ニ「政府ハ何時タリトモ十五日以内ニ於テ議院ノ停會ヲ命スルコトヲ得」トア
ルヲ以テナリト主張ス然レ共是餘リニ法文ニ拘泥シタル曲解ナリ議院法ノ效力ハ憲法ノ下ニアルモノナレハ議院
法ヲ以テ憲法ヲ動カスコト能ハサルハ云フマテモナシ從テ議院法第三十三條ノ政府ナル文字ハ天皇ト同義ニ解釋
スルノ外ナシ故ニ余ハ此說ニ反對ス

(註四) 井上博士ハ本問ニ關シ特ニ異說ヲ主張セラル停會ハ天皇若クハ政府之ヲ命スルモノナリ但シ我議院法ハ其第三
十三條ニ於テ「政府ハ何時タリトモ十五日以内ニ於テ議院ノ停會ヲ命スルコトヲ得」ト規定シ憲法ハ其第七條ニ於
テ「天皇ハ帝國議會ヲ召集シ其開會、閉會、停會及衆議院ノ解散ヲ命ス」ト一般ニ規定スルカ故ニ政府カ停會ヲ命
スル場合ニハ一回ノ期限十五日以内ニ於テセサルヘカラス一回ノ期間十五日以内ニ於テスルトキハ會期ノ許ス限
リ何回命スルモ不可ナシ天皇カ停會ヲ命スル場合ニハ斯カル制限ナキヲ以テ會期ノ許ス限リ何回命スルモ不可ナシ
又一回期限十五日以上ニ互ルモ又可ナリ察スルニ議院法起草者ハ天皇ト政府トヲ區別セス議院法第三十三條ノ政
府カ停會ヲ命スルト謂フコトハ即チ天皇ノ命スル場合ナリト考ヘ停會ヲ命シ得ヘキ期限ニ對シ一般ニ一回十五日
ト謂フ制限ヲ付シタル考ヘナルヘシト雖モ我國法上天皇ト政府トハ之ヲ區別シテ規定シ同一ニ認メサルヲ以テナ

リト主張セラル然レ共此説ノ誤レルハ註三ニ述ヘタルカ如シ

(註五) 停會ノ效果ハ本會議ノミニ及フモノナルカ又ハ委員會ニモ及フモノナルカニ付テハ學說一定セズ、マイヤー氏ハ委員會ニモ及フト主張シラバンド氏ハ本會議ノミニテ委員會ニハ其效果ヲ及ボサスト主張ス又一八九〇年ノ獨逸帝國議會ニ於テハ停會中ト雖モ委員會ヲ閉クハ妨ケナシト決議シタルコトアレトモ此決議ニハ反對者多シ停會ノ效果ハ本會議ノミナラス委員會ニモ及フモノナリトスルヲ妥當トス

論者或ハ停會ノ目的ハ本會議ノ討議ニ關シ其不法不當ナル決議ニ陷ランコトヲ豫防セントスルカ爲ニ出ツルモノナルヲ以テ委員會其モノニ關係スルコトナキニヨリ委員會ニハ停會ノ效力ノ及フヘキモノニアラスト論スルモ先ニ述ヘタル如ク停會ハ議會ノ行動ヲ中止セシムル效果ヲ生スルモノナルニヨリ委員會ノ議事モ亦議會ノ行動ト目スヘキモノナレハ停會ニ因リテ本會議ノミナラス委員會モ亦其行動ヲ中止スヘキモノナリト信ス

休會モ亦一時議會ノ議事ヲ停止スルモノナレトモ休會ト停會トハ之ヲ區別スルヲ要ス即チ(一)停會ハ勅命ニ由リテ議事ヲ停止スルニ反シ休會ハ議院自ラ議事ヲ停止スルモノナリ(二)休會ノ場合ニ於テハ委員會ノ會議ヲ許スト雖モ停會ノ場合ニハ如何ナル會議ヲモ爲スコト能ハス(三)休會ハ兩院個々別々ニスルコトヲ得レトモ停會ハ兩院必ス同時ニセサルヘカラス

(註) 停會ト閉會ノ差異

議會ノ行動ヲ止ムル點ニ於テハ停會モ閉會モ相類スト雖モ其兩者ノ間ニハ左ノ區別存スルモノナリ

一 其目的ヲ異ニス 閉會ハ會期ノ終了ニ因リテ其議會ヲ止ムルコトナリト雖モ停會ハ議會ノ行動當ヲ得サル場

合ニ於テ之ヲ反省セシメントスルカ爲ニナスモノナリ

二 效果ニ於テ差異アリ 議會ハ閉會ニ因リテ其成立ヲ失ヒ更ニ議會ノ行動ヲ始ムルトキハ召集開會ノ手續ヲ採ラサルヲ得スト雖モ停會ノ場合ニハ會期中ニ之ヲ行フモノナルカ故ニ停會ノ期限過クレハ更ニ停會前ノ議事ヲ繼續スルコトヲ得ルナリ

三 閉會ノ場合ニハ不繼續ノ原則ニ依リテ議案ハ總テ消滅スルモ停會ノ場合ニハ斯ノ如キ結果ヲ生セサルナリ

第六 解散

解散ハ專ラ衆議院ニ對シテ之ヲ行フ立憲君主國ニ於テハ殆ント例外ナク君主ノ議院解散權ヲ認ム均シク天皇ノ大權ニ屬ス貴族院ニ對シテハ解散ナシ衆議院ノ解散ト同時ニ貴族院ハ停會セララルモノトス(我國ノ貴族院ハ終身議員ヲ以テ其大部分ヲ占ムルヲ以テ解散ヲ行フトモ其組織ヲ根本的ニ變更スルコト能ハス是貴族院ニ解散ナキ重大理由ナリ)解散ハ法律上ハ衆議院議員ノ資格ニ對スル處分ニシテ即チ其任期ヲ短縮スルモノニ外ナラサレトモ政治上ヨリ觀レハ議會ノ行動不法若クハ不當ニシテ停會ヲ以テスルモ其反省ヲ期スヘキ見込ナキ場合ニ於テ解散ヲ命シテ議會ノ分子ヲ淘汰スルニアリ即チ議會カ其行動ノ範圍ヲ超越セントスル場合ニ之ヲ抑制スル趣旨ニ於テ新ナル議院ヲ成立

セシメ以テ議會本來ノ職務ヲ正當ニ盡サシメントスルニアリ佛國ノコンスタ
ン氏カ議會ノ解散權ハ君主抑制權ナリト稱シタルハ之カ爲ナリ故ニ解散ハ政
治上重大ナル事件ニ屬シ政府力之ヲ奏請スルニ當リテハ固ヨリ其責ニ任スヘ
キナリ而シテ衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ勅命ヲ以テ新ニ選舉ヲ行ハシ
メ解散ノ日ヨリ五ヶ月以内ニ新選議員ヲ召集スヘキモノトス

(註一) 議會解散ノ目的ニ關シテハ學者間議論アリ

解散ハ議會ト政府ト衝突シタル場合ニ於テ之ヲ調和スル爲ニ行フモノト論スル者アリ(シユルツエー氏獨逸國法
第一卷)或ハ又解散トハ政府ノ意見ト議會ノ意見ト相衝突シタルトキ其曲直ノ判定ヲ國民ニ爲サシムルカ爲行
フモノニシテ新選議會ノ意見カ前議會ト同一ナルトキハ國務大臣ヲ免スヘキモノト説ク者アリ(リヨソネ氏普國
國法第五版第一卷)我國ノ學者中又「解散ノ主タル目的ハ議會ノ意見カ政府ノ意見ト相反スル場合ニ於テ輿論ノ判
斷ニ訴フルカ爲ナリ」ト論スル者アリ(美濃部博士憲法講話)

然レ共是等ノ諸説ハ何レモ當ヲ得タルモノニアラスト信ス何トナレハ政府ト議會トノ間ニ何等ノ衝突ナク能ク調
和ノ實舉ルト雖モ若シ此兩者共ニ合シテ不法ノ行動ヲ爲スニ於テハ君主ハ其大權ヲ以テ一方ニ於テハ國務大
臣ヲ免シ一方ニ於テハ議會ノ解散ヲ命シ以テ其不當不法ニ陷ルコトヲ防止スルノ必要アルヲ以テナリ

(註二) 解散ト閉會ノ差異

解散ト閉會トノ間ニハ左ノ異ナリタル點存ス

一 閉會ハ會期ノ終ルトキニ之ヲ命スルモノナルモ解散ハ會期ノ終了ヲ待タズシテ之ヲ命スルモノナリ

- 二 閉會ハ會議ノ終了ニ因リテ之ヲ命スルノ外他ノ目的ナキモ解散ヲ命スルハ解散ヲ命セラレタル議院ノ組織ヲ
一變シ以テ適當ニ職務ヲ盡シ且國民ノ意思ヲ宜ク見ルニ足ルヘキ議員ヲ作ラントスルカ爲ナリ
- 三 閉會ノ場合ニハ議員ノ資格ニ關係ナキモ解散ノ場合ニハ解散セラレタル議員ノ任期ヲ短縮スルモノナリ
- 四 解散セラレタル場合ハ其時ヨリ五ヶ月以内ニ新ニ議員ヲ召集スルノ必要アリト雖モ閉會ニハ斯ノ如キ效果ヲ
生セサルモノナリ

(註三) 議會閉會中ニ於テ衆議院ノ解散ヲ行フコトヲ得ルカ

清水博士(憲法篇一〇〇〇頁)ハ解散ハ衆議院ナル合議體ニ對スルモノナリト解セラルル結果閉會中ニ解散ヲ命ス
ルコトヲ得スト主張セラルルモ余ハ衆議院閉會中ト雖モ其解散ヲ行ヒ得ルモノト信ス解散ハ任期中ニ於テ議員ノ
資格ヲ消滅セシムルモノニシテ閉會中ト雖モ之ヲ實行シ得サルノ理由ナシ現ニ外國ニ於テモ閉會中ニ之ヲ命シタ
ル例ニ乏シカラス例ヘハ普魯西一八六三年ノ議會ノ如シ然レ共衆議院解散セラレテ總選舉ヲ爲シタル場合ニ於テ
ハ未タ一回ノ召集タモ爲サスシテ解散ヲ行フコトヲ得ス何トナレハ我憲法第四十五條ニ解散セラレタルトキハ新
ニ議員ヲ選舉シテ五ヶ月以内ニ召集スヘシト規定シアルヲ以テ選舉ヲ爲セシノミニテ召集ヲ爲サスニ解散セハ此
規定ニ反スルコトニ歸着スルヲ以テナリ(同前副島博士日本帝國憲法論二六〇頁)

(註四) 解散後ニ召集スル議會ノ性質ニ付キ學者間議論アリ即チ解散後ノ議會ハ臨時會ナリト主張スル者ト之ト反對ニ

通常會ナリト主張スル者トアリ然レ共余ハ兩説共贊意ヲ表スルコトヲ得ス何トナレハ我國憲法第四十三條ニ依レ
ハ臨時緊急ノ必要アル場合ニ限リ臨時會ヲ召集スルヲ得トアリ然ルニ解散後ノ議會ハ憲法第四十五條ニ依リ解散
ノ日ヨリ五ヶ月以内ニ必ス召集セサルヘカラサルカ故ニ臨時緊急ノ必要アル場合タルト否トヲ問ハサルナリ從テ
解散後ノ議會ハ必スシモ臨時會ナリト斷定スルヲ得ス之ト同時ニ又解散後ノ議會ヲ必スシモ通常會ナリト謂フコ

トヲ得スト信ス何トナレハ臨時會ニシテ偶々解散セラレ共未決ノ議事アルカ爲更ニ開會シタル場合ニ於テハ其議會ハ之ヲ通常會ト稱スルコトヲ得ス何トナレハ臨時緊急ノ必要ニ接シテ開會シタルモノナレハナリ故ニ解散後ノ議會ヲ目シテ單ニ通常會ナリト論斷スルハ當ヲ得タル議論ニアラスト信ス

故ニ余ハ解散後ノ議會ハ憲法第四十五條ニ依リテ認メラレタル一種ノ特別會ナリト主張ス(同說井上密博士日本帝國憲法講義一四八頁)

(註五) 會期ヲ三ヶ月トスルハ通常會ノ場合ノミトスルヤ若クハ解散後ノ召集ニ係ル開會ニモ適用スヘキモノナリヤ否

ヤ

開會ニ通常會ト臨時會ト解散後ノ召集會トアリテ臨時會ハ別ニ勅令ヲ以テ其會期ヲ定ムルノ制アリト雖モ獨リ解散後ニ於ケル開會ニ付テハ何等ノ明文存セサルニヨリ茲ニ三種ノ見解ヲ生ス

第一ニ解散後ノ開會期モ三ヶ月ト爲スヘシト謂フ者アリ

第二ニ解散ハ多ク開會ノ中途ニ於テ起ルモノナレハ其前ノ開會日數ヲ三ヶ月ヨリ控除シ殘ル日數ヲ以テ解散後ノ召集ニ係ル議會ノ開會期ト爲スヘシト主張スル者アリ

第三ニ解散後ノ開會期ニ付テハ憲法ニ明文ヲ缺クカ故ニ君主ニ於テ自由ニ之ヲ定ムルノ權アリ即チ勅命ヲ以テ特定シテ可ナリト主張スル者アリ

思フニ第一ノ見解ハ不當ナリト信ス何トナレハ解散後ノ開會ハ必スシモ通常會ナリト謂フヲ得サレハナリ第二ノ見解モ亦不當ナリ何トナレハ解散ニ因リ前ノ開會ハ全ク終止セラレタルモノナルカ故ニ新ニ召集スル議會ヲ以テ前ノ會期ニ繼續スモノト看做スコトヲ得サレハナリ故ニ余ハ第三ノ見解ヲ以テ正當ナリトス現ニ明治二十五年ニ於テ政府ノ採用シタル所ナリ

第四節 議院ノ議事手續

第一款 議案

第一 發案

議案トハ法律案、豫算案、其他兩院ノ協贊ヲ要スルモノハ勿論貴族院令ノ改正案ノ如キ一院ノ許可ヲ要スルモノモ亦議案タルモノトス議案ノ中兩議院ニ發案權ノ屬スルモノハ法律案ニシテ是憲法第三十八條ニ明言スル所ナルモ其他ノモノニ付テハ之ヲ議院ニ許ササルノ結果總テ政府ヨリ發案スヘキモノト解釋スヘキナリ議院ニ於ケル發案ノ手續ハ發案ノ前ニ議案ノ發議ヲ要スルモノニテ其議案ヲ發議スルニハ二十人以上ノ贊成者アルヲ必要トスルナリ而シテ此發議セラレタル議案カ其院ニ於テ可決シ他院ニ移サレタルトキ始メテ議院ノ發案ト爲ルモノナリ(議院法第二十九條)

第二 議案ノ撤回

政府ハ其提出シタル議案ヲ何時タリトモ修正シ又ハ撤回スルコトヲ得ルモ(議

院法第三十條各議院ヨリ提出シタル議案ニ付テハ何等ノ明文ナキニ依リ之ヲ修正又ハ撤回シ得サルモノト解釋スヘキナリ

(註) 一院ニ於テ議決シ他院ニ廻付セラレタル後ニ於テモ政府ハ修正又ハ撤回シ得ヘキヤ否ヤニ付テハ學者間議論アリト雖モ一院ニ於テ既ニ議決シ他院ニ廻付セラレタル以上ハ最早政府ノ提出案ハ形ヲ變シタルモノニシテ之カ撤回修正ヲ爲スカ如キハ其議決ヲ無意義ナラシムルノ結果ヲ生スヘク撤回修正ノ趣旨ヲ超越スルモノト謂ハサルヘカラス加フルニ議院法第三十條ノ規定ヲ觀ルモ政府ハ提出シタル議案ヲ云々トアリ而カモ提出ハ議會ノ一院ニ對シ爲サルモノナレハ他院ニ廻付後ニ於ケル撤回修正ハ同條ノ認メサル所ト解セサルヘカラス故ニ余ハ之ヲ消極ニ解ス

第二款 議事日程及讀會

第一 議事日程

各院ノ議長ハ議事日程ヲ定メ議院ニ報告スヘシ(議院法第二十六條第一項)而シテ日程ノ順序ヲ定ムルニハ政府提出ノ議案ヲ先ニシ次ニ議院ヨリ提出シタル議案ヲ記載スヘキモノニシテ他ノ緊急事件ノ爲日程ヲ變更スルノ動議アリタルトキ又ハ議長自ラ緊急事件ナリト認ムルモノアルトキハ討論ヲ用キス議院

ノ決議ヲ以テ之ヲ變更スルコトヲ得ルナリ尙議事日程ニ記載スルコトヲ要セサルモノハ左ノ如シ

- 一 勅語ニ對スル奉答
- 二 天機伺
- 三 慶賀
- 四 弔慰
- 五 請暇
- 六 辭職
- 七 辭任及補缺
- 八 委員ノ退席
- 九 協議委員ノ選定其他決議ヲ要セサル事項

第二 讀會

讀會ノ制度ニハ二讀會三讀會ノ二アリ二讀會制度ハ佛蘭西白耳義和蘭西班牙葡萄牙ノ採用スル所ニシテ其他ノ國ハ總テ三讀會ノ制度ヲ採ル我國モ亦多數

ノ例ニ倣ヒ法律案ノ議事ハ三讀會制ヲ採ル(議院法第二十七條)然レ共政府ノ要求又ハ議員十人以上ノ要求ニ依リ議院ニ於テ出席議員三分ノ二以上ノ多數ヲ以テ可決シタル場合ニ限リ其順序ヲ省略スルコトヲ得ルモノトス

第三款 委員會

委員會トハ或特定ノ事項ヲ審査セシムル爲特定ノ人ヨリ組織セラルル本會議ノ豫備機關ニシテ之ヲ設置スルノ目的ハ要スルニ

- 一 議案ヲ鄭重慎重ニ調査セシムルコト
- 二 少人數ノ者ヲシテ下調ヲ爲サシメ以テ議決ノ經過ヲ敏活ナラシムルコト
- ノ二ニ外ナラサルナリ

第一 種類

- (一) 全院委員會 是議員ノ全數ヲ以テ委員ト爲スモノニシテ特ニ委員會ト爲スノ必要ヲ認ムルコトナキ如キモ左ノ利益アリ(一)本會議ニ於テハ議事規則ニ拘束セラレ自由ニ討議スルコト能ハサルモ委員會ハ正式ノ議事規則ニ依

ラスシテ自由ニ討議スルコトヲ得ルノ便宜アリ(二)議長ニ休憩時間ヲ與ヘ全院委員長ヲシテ之ニ代ラシムルノ便宜アリ

- (二) 常任委員會 每會期ノ初メ之ヲ無記名ニテ選任スルモノニテ一會期中在任スルモノナリ是後段ノ特別委員ト異ナル點ナリ此常任委員ハ貴族院ニアリテハ資格審査委員、豫算委員、決算委員、懲罰委員、請願委員ノ五者ニシテ衆議院ニテハ豫算委員、決算委員、懲罰委員、請願委員ノ四者ナリ

- (三) 特別委員會 一事件ヲ審査スル爲ニ特ニ設クル委員ナリ是亦無記名連記ニテ選舉セラルルモノナレトモ多クハ議長ノ指名ニ依リ定メラルルナリ蓋シ總テノ議案ニ對シ必ス委員ヲ設クルノ必要ナシト雖モ議院法第二十八條ニ「政府ヨリ提出シタル議案ハ委員ノ審査ヲ經スシテ之ヲ議決スルコトヲ得ス但シ緊急ノ場合ニ於テ政府ノ要求ニ由ルモノハ此限ニ在ラス」ト定メラレタルニ依リ政府提出ノ議案ハ必ス委員ノ議ニ付スヘク又貴族院提出ノ議案モ衆議院ニテハ委員ニ付託スルヲ通則ト爲ス是特判委員ノ缺クヘカラサル所以ナリ

- (ロ) 三分ノ二以上ノ出席ヲ以テ定足數トナスモノ (諸威)
- (ハ) 三分ノ一以上ノ出席ヲ以テ定足數トナスモノ (日本)
- (ニ) 少數定足主義ヲ採用セルモノ (英) (上院三名以上 下院四十名以上)

第五款 動議

動議トハ議案ヲ發議スル場合ノ外總テ議題ヲ提出スルヲ謂フ動議ハ原則トシテ一人以上ノ賛成アレハ足ル然レ共左ノ場合ハ特定ノ數ヲ要ス

- (一) 豫算案修正及上奏建議ハ三十人以上
- (二) 豫算案以外ノ修正、討論終結、懲罰、討論ニ入ルハ二十人以上
- (三) 讀會省略、全員委員會開會ハ十人以上

而シテ動議ノ種類ハ上奏建議、懲罰、緊急事件議案修正、全員委員會、再議、討論ノ際起ル動議ノ七トス

第六款 決議 (採決)

若シ總議員ノ意思一致セサレハ議會ノ決議トナラストセハ結局決議ヲ見ル能ハサルニ至ルヘシ故ニ何レノ國ニテモ多數決ニ依リテ決議スルコトトセリ我國ニテハ憲法改正ノ議事ニ付テハ三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルコトヲ要ストシ通常ノ議事ニ付テハ過半數ノ同意ヲ以テ足ルモノトシ可否同數ナルトキハ議長之ヲ決スルモノトセリ從テ議長ハ議長トシテノ資格ニ於テ表決權ヲ有スルモ其爲ニ議員タル資格ニ於テ當然有スル決議權ヲ失フモノニアラス故ニ議長ハ場合ニヨリ二票ノ決議權ヲ有スルト同一ノ力ヲ有スルコトトナル(議長ハ議長トシテノ表決權ヲ有スルノ外議員トシテ決議權ヲ有スルカ否カニ付キ從來地方議會等ニ於テ屢々論議セラレタルコトアルモ余ハ議長カ決議ノ數ニ加ハルハ妨ケナシト信ス何トナレハ議長モ元ト議員トシテ選出セラレタル者ニシテ既ニ議員タル以上ハ自己ノ決議權ヲ行使スルハ當然ノコトナレハナリ(同說清水博士憲法篇一〇七六頁)百耳義、普魯西ニ於テハ同數ナレハ必ス否決ト看做スコトトシ議長獨決ノ自由ヲ與ヘス和蘭ニ於テハ議決ヲ後會ニ讓リ後會ニ於テモ尙可否同數ナレハ否決ト看做スコトトセリ)

議院ノ
決議ハ
自由
ヲ與ヘス

帝國議會ハ貴衆兩院ヨリ成ルカ故ニ一院ノ議決ハ以テ帝國議會ノ議決ト謂フコトヲ得ス是ヲ以テ議案ノ議決ニ付キ兩議院ノ關係ヲ定ムル必要アリ議院法第五十三條以下ニ規定ス即チ左ノ如シ

甲議院ニ於テ政府ノ議案ヲ可決シ又ハ修正シテ議決シタルトキハ乙議院ニ之ヲ移スヘシ乙議院ニ於テ甲議院ノ議決ニ同意シ又ハ否決シタルトキハ之ヲ奏上スルトト同時ニ之ヲ甲議院ニ通知スヘシ乙議院ニ於テ甲議院ノ提出シタル議案ヲ否決シタルトキハ之ヲ甲議院ニ通知スヘシ(議院法第五十四條)

乙議院ニ於テ甲議院ヨリ移シタル議案ニ對シ之ヲ修正シタルトキハ之ヲ甲議院ニ回付スヘシ甲議院ニ於テ乙議院ノ修正ニ同意シタルトキハ之ヲ奏上スルト同時ニ乙議院ニ通知スヘシ若シ之ニ同意セサルトキハ兩院協議會ヲ開クコトヲ求ムヘシ甲議院ヨリ協議會ヲ開クコトヲ求ムルトキハ乙議院ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス(議院法第五十五條)

兩院協議會ハ兩議院ヨリ各十人以下同數ノ委員ヲ選舉シ會合セシム委員ノ意見可否同數ナルトキハ議長之ヲ決ス(葡萄牙ニテハ委員ノ意見可否同數ナル場合ニ

ハ國王之ヲ裁決スルコトトセリ)委員ノ協議案成立スルトキハ議案ヲ政府ヨリ受取り又ハ提出シタル甲議院ニ於テ先ツ之ヲ議シ次ニ乙議院ニ移スヘシ協議會ニ於テ成立シタル成案ニ對シテハ各院ハ協議案ノ全體ニ付テ可否ヲ決スルコトヲ得ルモ更ニ修正ノ動議ヲ爲スコトヲ許サス(議院法第五十六條)

兩院ノ内何レニテ之ヲ否決スルモ其協議案ハ廢案トナルモノトス
兩院協議會ノ議長ハ兩院委員中ヨリ各一名ヲ互選シ每會更代シテ席ニ當ル初會ノ議長ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム協議會ハ傍聽ヲ許サス然レ共國務大臣政府委員及各議院ノ議長ハ何時ニテモ出席シテ意見ヲ述フルコトヲ得ルモノトス

第五節 政黨

第一 政黨ノ意義

立憲政治ニ於テハ國民一般ニ參政權ヲ附與シ其權利ト自由トヲ保護スルヲ以テ國民ハ政治ニ對シテ痛切ニ利害關係ヲ感スルニ至リ各人ノ地位、職業、境遇、識見等ニ依リ自ラ異ナル政治上ノ見解ヲ生スルニ至ル從テ互ニ政治上ノ主義政

綱ヲ同シウスル者カ其實現ヲ期センカ爲ニ相團結スルハ自然ノ勢ナリ此團結ヲ政黨ト稱ス政黨ハ我憲法ノ要求スル所ニアラサルモ其出現ハ立憲政治ニ於ケル當然ノ產物タリ而シテ政黨ノ存立ニハ(一)二大政黨對立主義(二)小政黨分立主義ノ二種アリ前者ハ國內ニ二大政黨カ對立シ互ニ主義政策ヲ以テ爭ヒ後者ハ幾多ノ小政黨カ分立シ或問題ニ付テ意見ヲ同シウスルトキ各黨派カ聯合シテ反對黨ト勢力ヲ爭フモノナリ兩主義ニハ利害相伴フ學者ノ中ニモ二大政黨對立主義ヲ可トスル者アリ小政黨分立主義ヲ是トスル者アリ兩主義ノ是非ハ容易ニ斷定ヲ下シ難シ實際ノ狀勢ニ徴スレハ世界各國ノ政黨ハ寧ロ小政黨分立主義ニ傾キツツアリ現在ニ於テハ純粹ナル二大政黨對立國ハ殆ント一國モ無シト謂フコトヲ得ヘシ

第二 政黨ノ本領

政黨ハ飽ク迄公黨タルコトヲ要ス其主義政綱ハ國權ヲ維持シ國利民福ヲ増進スルヲ目的トセサルヘカラスサレハ發達シタル政黨ハ互ニ切磋シテ輿論ヲ指導シ立憲政治ノ運用ニ資スルコト至大ナルモノアリト謂ハサルヘカラス

第三 政黨ト國民

政黨ハ英國ニ於テ夙ニ發達シ今ヤ世界ノ模範ト稱セラル而シテ我國ニ於テモ近時大ニ其發達ヲ見ルニ至レリサレハ立憲國民ハ常ニ各政黨ノ主義政綱ニ對シ嚴正ナル批判ヲ加ヘ其行動ヲ注意シ正ヲ揚ケ邪ヲ抑ヘ以テ健全ナル政黨ノ完成ニ貢獻セサルヘカラス

第二章 國務大臣及樞密顧問、會計検査院

第一節 國務大臣

第一 政府ノ意義

國家ノ統治機關タル國務大臣及樞密顧問ニ付テ論スル前ニ帝國憲法及其附屬法規ニ屢々用フル政府ノ意味ヲ明カニスルノ必要アリ帝國憲法中政府ノ文字ヲ用キタル條項即チ左ノ如シ

第八條、第三十八條、第四十條、第四十八條、第五十四條、第六十七條、第六十八條、第七十條、第七十一條、第七十二條

第三編 統治機關 第二章 國務大臣及樞密顧問會計検査院 國務大臣

而シテ政府ノ意義ニ關シテハ學說一致セス左ニ主ナル說ヲ掲ケン

(イ) 天皇說(美濃部博士太陽第十九卷第六號憲政研究會講演、近時ノ政界ニ於ケル憲法問題)

此說ハ三權分立說君主最高機關說若クハ憲法第八條、第七十條、第七十一條等ニ基キタルモノナレトモ我憲法上天皇ト政府トハ各別個ノ文字ヲ用ヒ別個ノ意義ヲ有セシメタルヲ以テ之ヲ同一ニ解スルハ正當ナル見解ニアラス憲法第四十條ニ於テ兩議院カ政府ニ意見ヲ呈上スルハ之ヲ建議ト名付ケ憲法第四十九條ニ於テ兩議院カ君主ニ其意見ヲ奉呈スルハ之ヲ上奏ト名付ケテ明カニ此兩文字ニ區別ヲ設ケタルハ即チ天皇ト政府トノ文字ノ同一意義ニアラサルコトヲ知ル例證ナリ

(ロ) 天皇及内閣說(市村博士帝國憲法論五九一頁—五九三頁)

此說ヲ主張スル學者ハ曰ク「政府ノ組織ニ關シテハ憲法中特別ノ規定アルコトナシト雖モ從來ノ慣例及法律規則ニ於テ定ムル所ヲ觀ルニ我國ノ政府ハ天皇及内閣ヲ以テ成立スルモノト謂ハサルヘカラス憲法ハ屢々政府ナル語

ヲ使用ス此語ハ常ニ悉ク天皇ヲ包含スルヤ否ヤニ付テハ多少ノ疑ヒナキニアラスト雖モ之ヲ廣義ニ解スルトキハ一般ニ政府トハ天皇ト内閣トヲ以テ成立スルモノト謂フモ不可ナシト論ス然レ共前述セル如ク憲法第四十條、第四十九條ニハ明カニ天皇ト政府トハ之ヲ區別シテ規定セルニ依リ此說モ亦正當ナル見解ト謂フヲ得ス

(ハ) 國務大臣及樞密顧問說(穗積博士憲法提要五三〇頁)

此說ヲ主張スル學者ハ曰ク「政府トハ各國務大臣ト樞密顧問トヨリ組織セララルモノナリ」ト論ス然レ共樞密顧問ハ憲法第五十六條ニ依リ天皇ノ諮詢ニ應ヘ重要ノ國務ヲ審議スルノ職務ヲ有スルニ止マリ外部ニ對シ何等交渉スルコトナク特ニ外部ニ對スル命令權ナキモノナルヲ以テ政府ナル語中ニ樞密顧問ヲ包含スルモノトセハ憲法其他ノ法規ニ於ケル政府ナル用語ノ趣旨ニ抵觸スルコトトナル故ニ此說モ亦當ヲ得タルモノニアラス

(ニ) 用例不定說(上杉博士憲法綱要一〇七頁—一〇八頁)

上杉博士ハ其著帝國憲法ニ於テ政府ナル語ヲ種々ニ解釋シ憲法第八條、第三

上杉博士の
憲法論
樞密顧問
の地位
は如何なる
ものであるか
と云ふ
疑問
がある
が、
この
疑問
は、
この
憲法
論
の
中
に
も
あ
る
。

十條、第七十條ニ於ケル政府ナル文字ハ天皇ヲ指稱シ、第四十條、第六十七條ニ於ケル政府ナル文字ハ行政機關ヲ總稱スルカ又ハ國務大臣全體ヲ指稱シ、用例一定セサルニ依リ各場合ニ付テ其意義ヲ定メサルヘカラスト主張セラル然レ共同一ノ文字ヲ法令ヲ異ニスル場合ニ於テ各異ナル意義ニ解スルハ已ムヲ得サルヘシト雖モ同一ノ憲法中ニ於テ同一ノ文字ヲ各條項ニ付キ其意義ヲ決定スルノ外ナシト論スルカ如キハ法文解釋ノ當ヲ得タルモノニアラスト信ス

右諸説アリト雖モ余ハ國務大臣説ニ贊成ス

或ハ國務大臣ヲ政府ナリト解釋セハ憲法上政府ト謂ヒ國務大臣ト稱スル異リタル文字ヲ同一義ニ解釋スルモノニシテ之ヲ二様ニ用キタル立法ノ趣旨ニ反シ解釋ノ原則ニ背クモノナリト論スルモノアランモ我憲法上ニ於テ政府ト謂フハ天皇ノ下ニ於テ帝國議會ニ對シ種々ノ交渉作用ヲ爲ス機關ヲ指稱スルモノナリ而シテ此機關ハ國務大臣ヲ以テ組織セラルルカ故ニ政府即チ國務大臣ト謂フモ不可ナシ但シ茲ニ注意ヲ要スルハ國務大臣ヲ以テ政府ト謂フハ國務

大臣ノ議會ニ對スル方面ニ於テ之ヲ謂フナリ恰カモ彼ノ國家ノ一面ヲ特ニ國庫ト稱スルカ如ク國務大臣ノ議會ニ對スル方面ヲ政府ト謂フナリ即チ文字ヲ異ニシテ其活動方面ノ意義ヲ分明ナラシメンカ爲ナリ(同說清水博士憲法篇一〇九一頁副島博士日本帝國憲法論二八四頁)

第二 内閣

内閣トハ國務各大臣ヲ以テ組織スル合議制機關ナリ(内閣官制第一條)其本質ニ於テ單純ナル評議機關タルニ止マリ機關意思ヲ以テ直チニ國家意思ヲ構成シ外部ニ發表スル所謂主動機關ニアラス但シ特別ノ明文ヲ以テ一定ノ行政作用ヲ管掌スル場合ニ於テハ例外トシテ行政官廳タルノ地位ヲ有ス而シテ内閣ヲ組織スル國務各大臣ハ原則トシテ一定ノ主管事務ヲ有スル行政大臣ナルカ故ニ内閣ハ一面ニ於テ國務大臣ノ合議機關タルト共ニ他面ニ於テ行政大臣ノ合議機關タル性質ヲ有シ國務大臣ノ合議機關トシテハ各大臣相互間ノ一致ヲ圖リ輔弼ノ趣旨相反スルコトナキヲ期シ行政大臣ノ合議機關トシテハ各省主任事務ニ付キ行政ノ調和統一ヲ圖ルモノナリ

内閣ハ單純ナル評議機關タルニ止マリ各省大臣ノ上級機關ニアラサルヲ以テ
 閣議ハ各省大臣ヲ拘束スルノ法律の效力ヲ有スルモノニアラス從テ閣議ノ決
 定ハ各大臣ノ多數ヲ以テ之ヲ決定スルコトナク全員ノ一致ヲ必要トスルモノ
 ナリ

第三 國務大臣ノ地位及職務

國務大臣ハ天皇ヲ輔弼シ國務一切ノ責ニ任シ法律勅令其他國務ニ關スル詔勅
 ニ副署スルコトヲ職務トスル憲法上ノ機關ナリ
 君主カ國務ヲ處理スルニ當リ或機關ヲシテ輔弼ノ任ニ當ラシムルコトハ必ス
 シモ立憲君主國ニノミ特有ナルモノニアラスシテ專制君主國ニ於テモ普通輔
 弼機關ヲ存スルモノトス然レ共專制君主國ニ於テハ君主ハ必スシモ輔弼機關
 ノ輔弼ニ依リテ國政ヲ行フコトヲ要スルモノニアラス其輔弼ヲ以テ國政ヲ行
 フト輔弼ヲ俟タスシテ國政ヲ行フトハ全ク君主ノ自由ニ屬スルモノナリ之ニ
 反シ立憲君主國ニ於テハ特別ノ例外ノ場合ヲ除クノ外君主ハ國務大臣ノ輔弼
 ニ依リテ國政ヲ行ハサルヘカラス君主カ國務大臣ノ輔弼ヲ俟タスシテ國政ヲ

閣議ハ各省大臣ノ多數ヲ以テ之ヲ決定スルコトナク全員ノ一致ヲ必要トスルモノナリ

行フハ憲法違反ナリ然レ共茲ニ注意ヲ要スルハ君主ハ國務大臣ノ輔弼ニ依リ
 テ大權ヲ行使セサルヘカラスト雖モ大權ノ行使ハ天皇ノ自由ナリ即チ天皇ハ
 大臣ノ意見ヲ聽カスシテ大權ヲ行使スルヲ得スト雖モ大臣ノ意見ニ拘束セラ
 ルルコトナキヲ以テ大臣ノ意見ヲ不當ト認ムルトキハ勿論之ヲ排斥シテ之ト
 異ナリタル自己ノ所信ヲ行フコトヲ得ルハ言フ俟タス國務大臣トハ君主ヲ輔
 弼スル憲法上ノ機關ナルヲ以テ其各省ノ長官タルト否トハ問ハサルナリ和蘭
 巴威里ノ如ク法制上各省ノ長官タラサル國務大臣ヲ認メサル國アリト雖モ一
 般ハ各省大臣タルコトヲ國務大臣ノ要件トナス佛國、奧國、白國、瑞典ノ如キ何
 レモ法制上實例上無任所國務大臣ヲ認ム我國モ亦國務大臣ハ必スシモ各省大
 臣タルコトヲ要セス前述ノ如ク國務大臣ハ天皇ヲ翼ケ奉リ以テ諸般ノ政務ヲ
 掌理スルノ職責ヲ有スルモノナリ輔弼トハ天皇ノ統治行爲ニ萬一ノ過誤ナク
 適當最善ノ統治ヲ爲シテ國家建存ノ目的ヲ完成シ奉ルヲ謂フ副署トハ法令詔
 勅ニ御名ニ副ヘテ署名スルノ義ナリ而シテ副署ハ文書發布ノ公式トシテ君主
 ノ君主トシテノ行爲ナルコトヲ保證スルニ過キササルモノニシテ決シテ同意不

同意ヲ表識スルモノニアラス副署ノ性質ニ付テハ學者間種々ノ見解ナキニアラス

(一) 輔弼公證說

副署ハ君主ノ行爲カ國務大臣ノ輔弼ニ依リテ行ハレタルコトヲ公證スルモノナリトノ說

然レ共輔弼ト副署トハ必スシモ同一ノ國務大臣ニ伴フヘキモノニアラス蓋シ輔弼ハ意見ヲ奉リテ聰明ヲ啓クモノナルニ反シ副署ハ君主ノ御親署アルモノニ副ヘテ署名シ君主トシテノ行爲ナルコトヲ保證スルモノニシテ事態同一ニアラサレハナリ

(二) 同意公證說

副署ハ國務大臣カ君主ノ行爲ニ同意シタルコトヲ公證スルモノナリトノ說然レ共大臣ノ副署アル行爲モ君主單獨ノ行爲ニシテ大臣トノ共同行爲ニアラス君主カ大臣ト共同シテ(即チ大臣ノ同意ヲ得テ)國政ヲ行フモノト爲スハ君主國ニ於テ容ルヘカラサル所ナリ故ニ此說モ亦採用シ難シ

(三) 合法證明說

副署ハ國務大臣ニ於テ君主ノ行爲カ違憲違法ナラサルコトヲ保證スルモノナリトノ說

此見解ニ依レハ國務大臣ハ君主ノ行爲ヲ判斷シ自己ノ解釋ヲ以テ君主ノ行爲ヲ違憲違法ナリト爲シ得ルモノニシテ大臣ハ憲法法律ニ關シ君主ヨリモ優レル解釋權ヲ有スルモノト謂ハサルヘカラス然レ共其結論ノ不當ナルハ言ヲ俟タス加之此說ニ依レハ國務大臣ハ君主ノ行爲ヲ違法違憲ナリト思料スルトキハ副署ヲ拒絕スルコトヲ得ルモノト謂ハサルヘカラサルニ至レハナリ

(四) 責任負擔說

國務大臣カ副署ヲ爲スハ國務大臣カ之ニ依リテ君主ノ行爲ニ付キ責任ヲ負擔スルカ爲ナリトノ說

我國務大臣ノ責任ハ憲法第五十五條ニ明示セルカ如ク輔弼ニ依リテ生スルモノニシテ副署ニ依リテ生スルモノニアラス故ニ此說ハ我國ニハ採用シ難

シ故ニ余ハ副署ハ君主カ君主トシテノ行爲ナルコトヲ保證スルモノナリト
説明セントス蓋シ立憲政體ノ特質ハ統治權ノ作用ニ一定ノ形式ヲ定ムルコ
トニアリ從テ統治權タル君主ノ行爲ハ之ヲ自然人タル君主ノ行爲ト區別シ
テ特定ノ形式ヲ以テ之ヲ示スノ必要アリ而シテ副署ハ此趣旨ニ副フカ爲ニ
ナサルルモノナレハナリ

副署ハ前述ノ如ク君主ノ行爲タルコトヲ保證スルモノニシテ憲法第五十五
條第二項ニ「凡テ法律勅令其他國務ニ關スル詔勅ハ國務大臣ノ副署ヲ要ス」ト
規定セルカ故ニ國務大臣ノ副署ハ國務ニ關スル法令詔勅ノ有效ナルニ必要
ナル條件ナリ若シ國務ニ關スル法令詔勅ニ國務大臣ノ副署ナキトキハ其法
令詔勅ハ國法上何等ノ效力ヲ有セサルナリ蓋シ憲法ノ定メタル要件ヲ具備
セサル法令詔勅ニ國法上ノ效力ヲ認メサルハ立憲制度ノ原則ナレハナリ然
レ共憲法ハ單ニ國務大臣ノ副署ヲ要スト規定スルニ過キササルヲ以テ其人員
ハ一人ニテモ二人ニテモ差支ナシ必スシモ總國務大臣ノ副署ヲ要セス普魯
西其他二三ノ國ニ於テハ緊急勅令ハ總國務大臣ノ副署ヲ以テ發スヘシト定

メタルモ我憲法ニハ斯ノ如キ規定ナキニ依リ緊急勅令ニ付テモ亦憲法上總
國務大臣ノ副署ヲ要セサルモノトス

三權分立ノ主義ヲ極端ニ行フ合衆國ニ於テハ國務大臣ハ議會ノ本會議ニ出席
發言スルコトヲ得サルモ我憲法ハ明文ヲ以テ國務大臣ハ何時タリトモ各議院
ニ出席シ及發言スルコトヲ得(憲法第五十四條)國務大臣ノ發言ハ何時ニテモ之
ヲ許サル但シ之カ爲議員ノ演說ヲ中止セシムルコトヲ得ス(議院法第四十二條)
議院ニ於テ議案ヲ委員ニ付シタルトキハ國務大臣ハ何時ニテモ委員會ニ出席
シ意見ヲ述フルコトヲ得然レ共國務大臣ハ會議ニ於テ表決ノ數ニ加ハラサル
ハ勿論ナリ

(註) 國務大臣ハ副署ヲ拒絕スルコトヲ得ルヤ否ヤニ關シテハ積極消極ノ二說アリケ、マイヤー(獨逸國法論八四號)市
村博士(内外論叢第三卷第三號二二頁)同博士(帝國憲法論六一頁)副島博士(日本帝國憲法論二九二頁)美濃部博
士(憲法講話一三二頁)等ハ積極說ヲ主張セラルルモ吾人ハ消極說ヲ正當ト信ス何トナレハ副署ト輔弼トハ別個
ノモノニシテ副署ハ命ヲ受ケテ署名スルニ止マリ輔弼ノ如何トハ何等交渉アルニアラス殊ニ國務大臣カ副署ヲ拒
ミ得ヘシトセンカ延イテハ君主ノ實權ハ大臣ニ依リ制限セラルルニ至ル故ニ我憲法ノ下ニ於テハ到底採用スルコ
トヲ得ス(同說總稿博士憲法提要五四五頁、清水博士憲法篇六七〇頁—六七三頁)

副署ノ手續ハ公文式第三條ニ明文アリ茲ニ實際ノ順序ヲ述フレハ左ノ如シ
議會ノ議決ヲ經テ奏上シタル法律案アルトキハ天皇ヨリ之ヲ内閣ニ下サレ内
閣ニ於テ審議ノ末閣議其裁可ヲ請フニ一決スルトキハ御裁可文ヲ作り閣議書
ヲ添ヘテ内閣總理大臣ヨリ上奏ス而シテ天皇裁可シ給フトキハ御裁可文ノ後
ニ御名ヲ親署シ内大臣ヲシテ御璽ヲ鈐セシメ給フ然ル後侍從長又ハ侍從局幹
事ヨリ再ヒ之ヲ内閣ニ下サレ内閣ニ於テ内閣總理大臣御裁可文ニ年月日ヲ記
入シ主任大臣ト俱ニ之ニ副署シ其各省專任ノ事務ニ屬スルモノハ主任大臣ノ
ミ年月日ヲ記入シ之ニ副署シ正文ハ内閣記録課ニ保存シ寫本ヲ以テ官報ニ公
布スルナリ

勅令案モ閣議ヲ經タルトキハ御裁可文ヲ作り閣議書ヲ添ヘテ内閣總理大臣ヨ
リ上奏シ親署ノ後御璽ヲ鈐シテ内閣ニ下附セラレ内閣總理大臣又ハ主任大臣
ニ於テ年月日ヲ記入シ副署スルコト法律案ノ如シ

第四 國務大臣ノ責任

是憲法上重大ナル問題トシテ學說立法未タ一樣ナラス

我憲法第五十五條ニハ「國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其責ニ任ス」ト規定ス故ニ帝
國憲法ノ解釋トシテハ大臣ノ責任ハ其職務違反ヨリ生スル制裁ナリト謂フヘ
ク大臣ニシテ違法ノ行爲ヲ爲シタルトキハ勿論凡ソ失政ヲ敢テシ其輔弼ノ道
ヲ誤リタル場合ニハ其責ニ任スヘキナリ而シテ其責任ハ絶對的ナリ即チ君命
ニ藉口シテ其責ヲ免ルルコトヲ得ス君主ノ同意ヲ以テ輔弼ノ過失ヲ辯護スル
ニ足ラサレハナリ尙第五十五條ニハ「國務各大臣ハ」トアルニ依リ國務大臣ノ責
任ハ憲法上連帶ニアラスシテ單獨ノ責任タルコト明カナリ

(註) 國務大臣ハ單獨ニ天皇ヲ輔弼スルモノニアラスシテ比較的輕微ナル事件ヲ除ク外總テ合議ヲ以テ天皇ヲ輔弼スレ
モノナリト主張スル學者アリ(美濃部博士憲法講義縮刷一二五頁——一二七頁)然レ共是明カニ憲法第五十五條ノ
明文ヲ無視シタル不當ノ說ナリト謂ハサルヘカラス

唯其責任ハ何人カ之ヲ問フヤニ付テハ我憲法ニ規定ナク從テ法律上ノ説明ト
シテハ唯天皇獨リ其責任ヲ問ヒ又之ヲ定ムルコトヲ得ト謂フノ外ナキカ如シ
ト雖モ斯ノ如クンハ結局責任ハ天皇ニ歸スルニ至リ天皇無責任ノ制度ヲ沒却
スルノ虞レナシトセス要スルニ政治ト道德ノ上ヨリ實際ニ付テ決スルノ外ナ

キナリ

(註一) 國務大臣ノ責任ハ何人カ之ヲ問フヘキヤ換言スレハ問責者ハ何人ナリヤニ付テハ學者間議論アリ伊藤博文氏(帝國憲法義解八六頁)穂積八東博士(憲法提要五九五頁)上杉博士(帝國憲法述義四一三頁)清水博士(憲法篇三一〇頁)ハ何レモ君主問責者ナリト主張セラル美濃部博士(憲法講話一四三頁)ハ問責者ハ議會ナリト主張セラレ市村博士(内外論叢論文第三卷第三號三六頁)(帝國憲法論六二五頁)ハ國務大臣カ責任ヲ負フヘキ事項ハ君主ノ行為ナリ君主カ自ら不正ヲ政行シタル後之ヲ輔弼シタル大臣ノ行為ヲ問責スルハ道理アリ得ヘカラサルヲ以テ其問責者ハ議會又ハ裁判所ナラサルヘカラスト論セラレ又佐々木博士(大正五年一月大阪朝日新聞所載立憲非立憲)ハ問責者ハ國民ナリト主張セラル

(註二) 國務大臣ハ何カ故ニ責任ヲ負フヘキモノナルニ付テモ亦種々ノ説アリ

第一説 代責任説 此説ハ君主ハ不可侵ニシテ其責任ヲ負ハサルカ故ニ國務大臣ハ君主ニ代リテ其責任ニ任スルモノナリトナス此論ハ一時盛ニ行ハレ今尙ブドイス、ピシヨウフ、フリツシ其他一派ノ學者ノ唱フル所ニシテ我國ニ於テモ上杉博士ハ其著帝國憲法ニ於テ之ヲ主張セラルルモ特ニ君主ニ代リテ責任ニ任スルコトヲ定メタル明文ナキ國ニ於テハ此説ノ如ク論定シ得ルモノニアラサルナリ何トナレハ是責任ノ原則ニ反スルヲ以テナリ即チ責任ノ原則トシテハ自己ノ行為ニ付キ其實ヲ負フヘキモノニシテ自己ノ與リ知ラサル行為ニシテ而カモ他人ノ爲シタルコトニ付キ其實ヲ負フヘキ理由ナケレハナリ

第二説 副署説 國務大臣ハ副署ヲ爲シタルカ爲ニ之ニ付キ其實ヲ負フモノナリト論ス右ハ思フニ歐洲諸國ノ採レル制度ヲ根據トシテ論シタルモノナラン(佛國一八一四年憲法第三十九條國務卿ハ其副署ニ因テ責任ヲ負フ、獨逸帝國憲法第十七條宰相ハ副署ニ因テ其責任ニ任ス、普魯西憲法第四十四條大臣ハ副署ニ因テ其責任ニ任ス、白耳

義憲法第六十四條執政ハ副署ニ因テ其責任ニ任ス)モ是亦其當ヲ得タルモノニアラスト信ス何トナレハ自己ノ關係セサル行為ニ付テモ之ヲナスコトアルノミナラス國務大臣ハ副署ヲ拒ムコトヲ得サルモノナレハナリ或ハ國務大臣ハ君主カ違憲若クハ違法ノ行為ニ付テ副署ヲ命シタル場合ニ之ヲ拒ムコトヲ得ルモノナリト主張スル者アリト雖モ憲法若クハ法律ニ關シ最高ノ解釋權ヲ有スル者ハ國務大臣ニアラスシテ君主ナルカ故ニ君主ノ副署ノ命令ニ對シ之ヲ拒ムコトヲ得サルハ前述ノ如シ又一步ヲ譲リ國務大臣ハ副署ヲ拒ムコトヲ得ルノミナラス國務大臣ハ自己ノ關係シタル行為ニ付テノミ副署スルモノトナスモ尙其當ヲ得タルモノニアラスト信ス何トナレハ國務大臣ハ副署ニ付テノミ憲法上ノ責任ヲ負フモノト爲ストキハ國務大臣ハ副署サヘ爲ササレハ輔弼機關トシテ其爲スヘキ行為ヲ爲ササル場合ニ於テモ之ニ付キ責任ヲ負ハサルコトナレハナリ

第三説 大臣權説 君主ノ行為ハ其實國務大臣カ成立セシメタルモノナルカ故ニ國務大臣ハ之ニ對シ責任ヲ負フヘシト爲スモノナリベンジャミン、コンスタン丁ノ唱フル所ナリ併シ此説ハ君主國ノ觀念ト低觸スルモノナリ何トナレハ此説ヲ認ムルトキハ政ヲ爲スモノハ君主ニアラスシテ大臣タルノ結果トナレハナリ

第四説 不能惡説 此説ハ君主ハ罪惡ヲナサス又欲セストノ法諺ニヨルモノニシテ君主ニ違憲背法ノ行為アルハ大臣ノ輔弼其宜シキヲ得サルモノナレハ大臣ハ其責任ヲ負ハサルヘカラスト説クツエブル、クリユバード氏ノ唱フル所ナリ然レ共此説ハ君主ハ不正ナルコトヲ爲シ得スト謂フコトハ君主ノ意思カ常ニ大臣ニ依リテ左右セラルルコトヲ認ムルモノナレハ大臣權説ト同一ナル非難アルヲ免レス

第五説 共同行為説 此説ハ立憲國ニ於テハ大臣ハ單純ナル君主ノ補助ニアラスシテ共同シテ行為ヲナスモノト見ルヘケレハ大臣又責任アリト説ク副島博士(日本帝國憲法論三〇三頁)美濃部博士(憲法講話一三〇頁)之ニ賛同ス然レ共民主國ニ於テハ格別我國ノ如キ君主國ニアリテハ君主カ統治權ノ主體ナリトノ觀念ト相容レサルヲ以テ

採用シ難シ

第六説 審査義務説 此説ハ國務大臣ハ輔弼上達憲ナリヤ否ヤヲ審査ノ義務アリ此義務ニ違背シタルトキハ其輔弼事項ニ對シテ責任アルナリト説ク一木博士此説ニ贊同セラル然レ共此説ニ依レハ違憲違法ニ關スル解釋權ニ付キ大臣ハ君主ノ上ニアリトナスニアラサレハ採用シ得ス從テ我國ノ如キ最高解釋權君主ニアル國ニ於テハ採用スル能ハス

第七説 輔弼説 一般ノ場合ニ於テハ輔弼即チ助言ヲ容レタルトキハ其事ニ關スル責任ハ專ラ行爲者ニ歸スルモノニシテ助言者ハ免レテ罪ナキニ似タリ然レ共憲法ハ大臣ノ輔弼ニ關シテハ特ニ此原則ト異ナリ絕對的助言ノ罪ヲ問ヒ君命ニ籍口シテ其責ヲ免レルヲ許サルモノナレハ大臣ノ責任ハ全ク輔弼ニアリト解スヘキナリ余ハ此説ニ贊同スルコト前述ノ如シ(同説總稿博士憲法提要五四九頁、清水博士憲法篇)

(註三) 彈劾制度 國務大臣ノ責任ヲ負フ方法トシテ歐米諸國ノ憲法ニハ彈劾制度ヲ認ムルモノ多シ實際ハ之ヲ適用スルコト少ナキモ憲法上ニ規定セルヲ以テ其大要ヲ説クコトトス

第一 彈劾權者

(A) 議會ト國王トニ彈劾權ヲ與フルモノ(此制度ハ少ナシ)

(B) 議會ノミ彈劾權ヲ與フルモノ(各國ノ通例トス)

議會ニノミ彈劾權ヲ與フル國中ニモ種々ノ制度アリ

一院制 (イ) 二同ノ決議ヲ要スルモノ(例 希臘) (ロ) 四分ノ三ノ同意ヲ要スルモノ(例 獨逸聯邦中ノ數國)

二院制 (イ) 下院ノミ彈劾權ヲ有スルモノ(一) 下院彈劾シ上院之ヲ裁判スルモノ(例 英國、佛國、西班牙、伊國、北米) (二) 下院彈劾シ特別裁判所之ヲ裁判スルモノ(例 巴丁、匈牙利、諾威) (ロ) 兩院ノ議決ヲ以テ彈劾

効シ得ルモノ(例 戰前ノ巴威里、索遜、ヘッセン) (ハ) 兩院別々ニ彈劾シ得ルモノ(例 戰前ノ奧地利、普魯西、ウエルテンベルヒ、ザクセンコープアルヒ)

第二 彈劾ノ原因

其主ナルモノ左ノ如シ

(イ) 憲法ニ違反スルコト (ロ) 法律ニ違反スルコト (ハ) 法令ヲ執行セサルコト (ニ) 國利民福ヲ害スルコト(巴丁) (ホ) 憲法ニ保障シタル臣民ノ權利自由ヲ害スルコト(奧地利、瑞典、巴丁) (ヘ) 職權ヲ濫用スルコト(瑞典、オルデンブルグ、ザクセンマイニンゲン、シユワルツブルグ、ルードルスダツト) (ト) 職務上ノ義務ニ背クコト (チ) 國費ヲ濫費スルコト(奧地利、ザクセンロイマル) (リ) 朝憲ヲ紊シ國安ヲ害スルコト(普國、英國、北米、瑞典) (ヌ) 收賄ヲ爲スコト(普國、英國、北米) (ル) 職務上ノ犯罪ヲ爲スコト(佛國、英國、ザクセンロイマル) (ヲ) 廣ク重罪ヲ犯スコト(北米)

第三 彈劾裁判所制度

(イ) 上院ヲシテ彈劾事件ヲ裁判セシムル制度(英國、佛國、伊國、西班牙、北米) (ロ) 司法裁判所ヲシテ彈劾事件ヲ裁判セシムル制度(和蘭、白耳義、丁抹、諾威、戰前ノ獨逸聯邦諸國) (ハ) 特別裁判所ヲシテ彈劾事件ヲ裁判セシムル制度(奧地利、希臘、戰前ノ獨逸聯邦中ノ數國)

第四 制裁主義

(イ) 北米主義 單ニ懲戒上ノ制裁ノミヲ與ヘ刑事上ノ制裁ハ之ヲ通常裁判所ニ讓レルモノ

(ロ) 英國主義 懲戒上ノ制裁ノミナラス刑事上ノ制裁ヲモ科スルモノトス

第五 制裁ノ種類 (イ) 譴責 (ロ) 免官 (ハ) 罰金ヲ主義トス

死刑ノコトヲ定メタル國モ一ニアルモ多クノ學者ハ其不當ヲ論ス又嘗テ大臣ノ追放ヲ規定シタル國アリシモ今ハ之ヲ認メス

然ルニ我國ニ於テハ此彈劾制度ヲ認メス何等ノ問責方法ヲモ規定スル所ナシ

第五 國務大臣ノ資格要件

(一) 國務大臣ト帝國議會ノ議員

外國立法例中ニハ議員ニアラサレハ國務大臣トナリ得ストスルモノアリ(英國)之ニ反シ議員タルモノハ國務大臣タルコトヲ得ストナスモノアリ(北米合衆國)然レ共我國ニハ之ニ對シテ何等ノ制限ナシ故ニ議員ニアラサル者モ國務大臣タルヲ得ルト同時ニ議員モ亦國務大臣タルコトヲ得ト謂ハサルヘカラス

(二) 國務大臣ト皇族

白耳義其他二三ノ國ニ於テハ皇族王族ハ國務大臣タルヲ得サルコトヲ規定セリ其理由ハ大臣カ憲法上責任ヲ負フトキハ其煩累ヲ君主ニ及ホスノ虞レアリトナスニ由ルモノナリ然レ共我國ニハ之ニ對シ何等ノ制限ナシ從テ二

種ノ解釋ヲ生ス即チ我國ニ於テハ皇族ハ國務大臣タルコト能ハスト謂フ明文ナキヲ以テ皇族ト雖モ國務大臣タルコトヲ得ト主張スル者ト(野村學士憲法大綱一〇二頁)之ト反對ニ明文ニハ之ヲ禁セサルモ其他ノ規定ニ依リテ推知スレハ皇族ヲシテ國務大臣タルコトヲ許ササル精神ナリト主張スル者トアリ余ハ皇族ハ國務大臣タルコトヲ得スト主張スル說ニ贊同スルモノナリ何トナレハ皇族ヲシテ國務大臣タラシムルハ煩ヲ皇室ニ及ホス虞レアルノミナラス皇族身位令第十七條ニ「皇太子皇太孫ハ滿十年ニ達シタル後陸軍及海軍ノ武官ニ任ス親王王ハ滿十八年ニ達シタル後特別ノ事由アル場合ヲ除ク外陸軍及海軍ノ武官ニ任ス」ト規定シタルニ依リ皇族ヲシテ國務大臣ノ地位ニ就クコトヲ許ササルノ精神ナリト考フ最モ其規定中ニ特別ノ事由アル場合ヲ除ク云々トアルモ之ハ祭主トナラレ又ハ病氣ニテ武官トナルコトヲ得サル場合等ヲ指スモノニシテ國務大臣ニ就職スルコトハ此中ニ包含セサルモノト信スレハナリ(同說清水博士憲法篇六四一頁)

(三) 國務大臣ト歸化人

歸化人、歸化人ノ子及我國民ノ養子又ハ入夫トナリタル者ハ國務大臣トナルコトヲ得ス(國籍法第十六條)右ハ國家樞要ノ地位ハ忠君愛國ノ精神ノ如何ト重大ナル關係アレハナリ白耳義、西班牙、瑞典、葡萄牙亦同シ

(註) 外國人ハ國務大臣タルヲ得ルヤ否ヤニ付テハ明文ナシ然レ共歸化人モ尙國務大臣タルコトヲ得アル點ヨリ觀レハ我現行制度ノ精神カ外國人ニ其資格ヲ與ヘサルモノナルコトハ明カナリ諸外國ニハ外國人ニ國務大臣タル資格ヲ與ヘサルコトヲ憲法ニ明示セル所少ナカラス白耳義、諾威、葡萄牙、ルーマニアノ如キ是ナリ

(四) 國務大臣ト文官任用令

文官任用令ハ親任官以下ニ適用スヘキモノナリ而シテ各省大臣タル國務大臣ハ親任官ナルヲ以テ文官任用令ノ適用ヲ受ケス

第六 國務大臣ノ權限

國務大臣ハ憲法ノ前ニ於テ總テ同列ニシテ同權ナリ故ニ憲法上ノ輔弼、副署及責任ノ事ニ付テハ國務大臣合議體ヲ以テ輔弼スルモノニアラスシテ各大臣天皇ニ直屬シテ同權同列ナリ憲法第五十五條ニ國務各大臣トアルハ右ノ意義ヲ明カニシタルモノナリ

固ヨリ各國務大臣相會合ノ上輔弼ニ付キ意見ヲ交換スルハ妨ケナク又實際ニ

行ハルル所ナリ然レ共輔弼ハ常ニ各大臣獨立シテ之ヲ爲スヘキモノニシテ内閣ヲ以テ團結ノ一體トナシ多數決ヲ以テ輔弼シ衆ヲ以テ寡ヲ壓シ各獨立ノ意見ヲ奉ルコトヲ得サラシムルカ如キハ我憲法ノ許ス所ニアラス如ク國務大臣トシテハ各大臣單獨ニ天皇ニ對シテ輔弼ノ任ヲ盡スモノナルカ故ニ總理大臣モ各省大臣モ國務大臣トシテハ其間ニ差異ナキモノトス
内閣總理大臣カ重要ノ地位ヲ占ムルハ政治上ノ地位ニ過キスシテ憲法上ニ於テハ各省大臣ト對等ノ地位ニ在リト謂ハサルヘカラス

(註) 然ルニ美濃部博士ハ之ニ反シ重要ナル國務ニ付テハ閣議ヲ以テ天皇ヲ輔弼スヘク又輔弼ハ總テ内閣總理大臣ヲ經由シテ之ヲ爲スヘキモノ(但シ例外トシテ軍ノ機密ニ關スル事項ニ付テハ閣議ヲ經ス且内閣總理大臣ヲ經由セスシテ直接ニ主任大臣輔弼スルコトヲ得)ト主張セラル然レ共所謂閣議トハ總國務大臣若クハ少ク共關係アル國務大臣一致ノ意見ノ意ニシテ便宜上共一致ノ意見ヲ以テ輔弼スルモノトセハ其ハ憲法ノ法理ニ反スルコトナカルヘキモ若シ閣議トハ多數決ノ意ニシテ多數決ヲ以テ輔弼シ獨立ノ意見ヲ奉ルコトヲ許ササルモノトセハ是明カニ憲法第五十五條ニ國務各大臣ト謂ヘル各ノ字ヲ無視セル不當ノ說ナリト謂フヘク又國務大臣カ内閣總理大臣ヲ經由シテ意見ヲ奉ルカ如キハ實際上ノ便宜ノ爲ニシテ憲法上然ラサルヲ得サルカ如キ爲ニアラサルナリ要スルニ博士ノ說ハ憲法ノ明文ヲ無視シ便宜上ノ形式方法ト憲法ノ法理トヲ混同シ且國務大臣ノ集合トシテノ内閣ト行政長官ノ集合トシテノ内閣トヲ區別セサル不當ノ說タルヲ免ラサルモノト信ス(清水博士憲法篇六四九頁參照)

第七 國務大臣ト各省大臣

國務大臣ハ國務ニ關スル政務官ナレハ官内大臣及内大臣ヲ含マス又國務大臣ハ憲法上輔弼ノ責ニ任スルト共ニ官制ノ便宜上各省ノ行政長官タルヲ例トス然レ共行政各部ノ長官タル大臣ノ外別ニ國務大臣ヲ置クコトヲ妨ケス内閣官制第十條ニ各省大臣ノ外特旨ニヨリ國務大臣トシテ内閣ニ列セシメラルコトアルヘシト規定セルハ是ナリ樞密院議長ノ時トシテ内閣員ニ列スルハ之ニ由ル

宮内大臣ハ親任トス皇室一切ノ事務ニ付キ輔弼ノ責ニ任ス

内大臣ハ親任トシ常侍輔弼ノ責任ヲ有シ御璽國璽ヲ尙藏シ又詔書勅書其他内廷ノ文書ニ關スル事務ヲ掌ル

(註) 宮内大臣及内大臣ハ國務大臣ナリヤ否ヤ學者間議論アリ松本博士(憲法原論六四四頁)ハ内大臣ハ常侍輔弼ノ任ニ在ルモノナルヲ以テ國務大臣タルコト疑ヒナシ宮内大臣ハ宮廷ノ内事ヲ管掌スルモノナレトモ國務ヲ奉行シ又總般ノ國務ニ付キ獻策ノ任ニ在ルヲ以テ國務大臣ト認ムルモ太過ナシト論セラレ又副島博士(日本帝國憲法論二八三頁)ハ宮内大臣ハ國務大臣ニアラスト主張セラル然レ共余ハ宮内大臣及内大臣共國務ニ關スル政務官ニアラスト思考スルヲ以テ大臣ノ稱アリト雖モ國務大臣ニアラスト信ス(同說三緒博士法學通論一一九頁)

第二節 樞密顧問及會計検査院

第一 樞密顧問

我國法上ニ於ケル樞密院制度明治二十一年四月二十八日裁可同月三十日公布ノ勅令第二十二號ヲ以テ設置セラルハ世界何レノ立憲國ニモ類例ヲ見サル特有ノ制度ナリ勿論單ニ外形ヨリ言ヘハ英國ニモ樞密院ナキニアラス而シテ我樞密院制度モ恐ラクハ英國ノ制度ヨリ來リタルモノナランモ我樞密院カ英國樞密院ト類似セル點ハ唯名稱及外形ノミニシテ其實質ニ於テハ組織上權限上ニ於テモ亦政治上ノ實際勢力ニ付テモ全然其趣ヲ異ニス

樞密顧問ハ樞密院官制ノ定ムル所ニ依リ天皇ノ諮詢ニ應ヘ重要ノ國務ヲ審議スル憲法上ノ機關ナリ今其性質ヲ分說スレハ左ノ如シ

(イ) 樞密顧問ハ合議機關ナリ故ニ個々ノ意見ヲ奉ルヲ得ス

(ロ) 樞密顧問ハ天皇ノ諮詢ニ應ヘ重要ナル國務ヲ議決スル機關ナレハ命令權ヲ行フヲ得ス

(ハ) 樞密顧問ハ憲法上ノ機關ナリ故ニ憲法ト其生存ヲ共ニスルモノナリ而シテ其組織ハ議長一名、副議長一名、顧問官二十四名ヲ以テセラルル顧問官、議長副議長ハ年齢四十歳以上ニシテ元勳練達ノ人ヲ選ヒ之ヲ親任ス專任顧問官ノ外各大臣ハ其職權上樞密院ニ於テ顧問官タル地位ヲ有シ議席ニ列シ表決ノ權ヲ有ス(樞密院官制第十一條)但シ專任顧問官ノ數ヲ二十四名トシ十名以上出席スルニアラサレハ議事ヲ開クコトヲ得ストセルヲ以テ恐ラク國務大臣ノ方專任顧問ノ出席數ヨリ多數ヲ占ムルコトナシ此外ニ官制ニ見エスシテ樞密院ノ議席ニ列シ表決ノ數ニ加ハルコトヲ得ル者ニアリ即チ

(イ) 在京ノ成年以上ノ皇族男子(樞密院設置ノ當時ニ於ケル詔勅ニ據ル)

(ロ) 特旨ヲ以テ樞密顧問官ニ列セラルル國家ノ元勳(故三條公ハ此資格ニ由リ顧問官ニ列セラレタリ)

樞密顧問官ハ前述ノ如ク國務大臣ト異ナリ各自施政ヲ輔弼スルニアラスシテ天皇ノ諮詢ヲ待ツテ會議ニヨリ意見ヲ奉答スル至高顧問ニシテ施行ニ干與スルコトナシ故ニ樞密顧問カ會議ニヨリ意見ヲ奉ルハ天皇ノ諮詢アリタル場合

ニ限ル其意見ノ採否ハ一ニ聖裁ニ依リテ決ス今樞密院官制ニ依リ如何ナル事項カ該院ニ諮詢セラルヘキカヲ見ルニ大様左ノ如シ

(一) 皇室典範ノ規定ニ依リ特ニ樞密院ニ諮詢スルコトヲ定メラレタル事項

(二) 憲法ノ疑義及憲法改正案其他憲法ニ附屬スル法律勅令ノ草案及之ニ關スル疑義

(三) 戒嚴ノ宣告、緊急勅令及憲法ニ依ル財政上ノ緊急處分ニ關スル勅令並ニ罰則ノ規定アル一切ノ勅令

(四) 國際條約及約束

此外樞密院ノ官制及事務規定ノ改正モ諮詢事項ニ屬ス尙以上列記セルモノノ外臨時諮詢セラルル事項ハ固ヨリ聖意ニ依リテ定マルモノトス

(註) 樞密顧問ハ自ら發議權ナキヲ原則トスルモ唯例外トシテ攝政ヲ置クトキ又ハ之ヲ解任スル場合及攝政ノ順位ヲ變更スルニ付キ其原因タル事實ヲ認定スル場合ハ自ら發議スルノ權限ヲ有スルコトハ前述ノ如シ

勅令ニ依リ樞密顧問ニ諮詢事項ヲ下付セラレタルトキハ議長之ヲ書記官長ニ審査セシメ其報告書ヲ會議ニ付ス會議ヲ開クヨリ少クトモ三日前ニ議長ハ其

報告書並ニ附屬書類ヲ各顧問官ニ配付スヘキモノトス會議ハ顧問官十人以上出席スルニアラサレハ之ヲ開クコトヲ得ス(樞密院官制第九條)會議ニハ議長首席タリ議長事故アルトキハ副議長之ニ代リ議長副議長共ニ事故アルトキハ顧問官其席次ニ依リ之ニ代ル(同第十條)議事ハ多數ニ依リ之ヲ決シ可否同數ナル場合ニハ會議ノ首席之ヲ決スルモノトス(同第十二條)表決ノ結果ハ書記官長又ハ書記官之ヲ起草ス議長ハ之ヲ檢閲シタル後天皇ニ上奏シ同時ニ内閣總理大臣ニ通告スルモノトス

(註) 樞密顧問ニシテ政治紛争ノ外ニ立チ偏セズ黨セズ忠實嚴正ニ大憲ヲ擁護シ輔翼ノ重任ヲ盡サハ大權ノ行動ヲシテ憲法ノ精神ニ依ラシムルト同時ニ憲政ノ通弊タル統治機關ノ軋轢ヲ防キ議院ノ跋扈ヲ抑ヘ大臣ノ專恣ヲ制スルニ於テ大ナル效用アリ斯ノ如クシテ樞密院ノ職始メテ全キモノトナル我憲法上ニ於テハ天皇大權ノ範圍甚ダ廣シ而シテ大權ノ行動ハ固ヨリ議會ノ容喙ヲ許ササル所トス若シ大權ノ行使ニ參與スルモノハ國務大臣ニ止マリ他ニ君主ハ之ヲ諮詢スルノ府ナシトセハ事或ハ偏聽ニ流レ事實ニ於テ權力ハ國務大臣ニ歸スルノ弊ナキヲ保セス樞密院設置ハ正ニ其權力偏重ノ虞レニ具ヘント欲シタルモノナリ故ニ我樞密院カ前述ノ趣旨ニ於テ天皇大權ノ輔翼ヲナセハ其設置ノ目的ヲ充分ニ達スルコトヲ得ルモノナルモ我樞密院ハ單ニ法律上重要ノ國務ニ關シ天皇ノ諮詢機關タルニ止マラス實際ニ於テ内閣ニ對シ自己ノ意見ヲ主張シ屢々内閣ヲ制肘シテ自己ハ全然無責任ノ地位ニ在リナカラ責任者タル内閣ノ意見ニ反對シ之カ爲内閣ノ方針ヲ變更セシメ又ハ少ク共其實行ヲ遲延セシムルコト尠カラ

ス余ハ斯ノ如ク制度機關カ尙我國情ニ於テ果シテ必要ナリヤ否ヤ疑問トスル所ナリ

第二 會計検査院

會計検査院ハ國家歳入歳出ノ決算ヲ検査確立シ並ニ各官廳ノ會計事務ヲ監督スル憲法上ノ機關ナリ會計検査院ノ検査ハ事後ニ於テノミ之ヲ行フ帝國議會ハ事後ニ於テ決算ヲ審査スルノミナラス事前ニ於テモ豫算ニ協賛スルモノナリ是會計検査院ト議會トカ會計監督ノ方法ヲ異ニスル所以ナリ國務大臣ノ下ニ隸屬スルトキハ其目的ヲ達スルコト能ハサルニヨリ天皇ニ直隸シテ國務大臣ニ對シ特定ノ地位ヲ有ス検査院ハ院長一名部長二名検査官八名ヲ置キ之ヲ會計検査官トシ別ニ書記官專任一人副検査官專任十六人及書記技師ヲ置ク會計検査院ニ二部ヲ設ケ各部々長一人検査官四人ヲ以テ検査ノ事務ヲ分掌ス會計検査院ニ於テハ總會議及部會議ヲ開ク總會議ハ會計検査院全體ノ事務ニ屬スル事項ヲ議スル場合ニ開ク院長ヲ以テ議長トス部會議ハ各部ノ事務ニ屬スル事項ヲ議スル場合ニ開ク部長ヲ以テ議長トス總會議及部會議共議事ハ多數ヲ以テ決シ可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル而シテ其

議決ヲ爲スニハ總會議ニハ會計検査官現員ノ三分ノ二以上、部會議ニハ其部ノ検査官現員ノ半數以上出席スルコトヲ要ス而シテ會計検査院長ハ毎年度決算ノ成績ヲ天皇ニ上奏ス尙會計ニ關スル規定ノ變更若クハ其解釋ニ付キ意見アルトキハ之ヲ天皇ニ上奏スルコトヲ得ルナリ又會計検査院ハ其會計ヲ検査スル上ニ於テ當ニ計算上ノ數ノミニ止マラス當該收入支出カ豫算及法令ニ違背スルコトナキヤヲモ検査スルモノトス

(註) 會計検査院カ出納官吏ノ計算書及證憑書類ヲ検査シテ正當ナリト判決シタルトキハ該官吏ニ對シテ認可狀ヲ交付シ會計上ノ責任ヲ解除スルモノトス若シ會計官吏ノ處分ノ不當ナルコトヲ發見シタルトキハ辯明又ハ正誤ヲナサシメ尙改メサルトキハ其處分不當ナリトノ判決ヲ爲シ之ヲ上奏スルト共ニ其官吏ノ行政長官ニ通牒シテ處分セシムルモノトス(會計検査院法第二十條) 會計検査院ノ判決ハ一審ニシテ終審ナリ會計検査院ハ行政官吏懲戒權ヲ有セサルカ故ニ之ヲ懲戒セントスル場合ニハ必ス行政長官ニ通牒シテ處分セシメサルヘカラス會計検査院ノ判決ニ依リ辨償ノ責ニ任スル者ハ天皇ノ恩赦ニ依ルノ外本屬長官ニ於テ之ヲ減免スルコトヲ得サルモノトス(同第二十一條)

第三章 裁判所

第一節 司法裁判所ノ意義、種類及階級

第一 司法裁判所ノ觀念

司法權ハ統治權作用ノ一ニシテ裁判所ハ天皇ノ司法權行使ノ機關ナリ是裁判所カ天皇ノ名ニ於テ司法權ヲ行フ所以ニシテ民事刑事ノ訴訟ヲ裁判スル所ナリ今裁判所ノ國法上ノ地位ヲ分説スレハ左ノ如シ

- (イ) 裁判所ハ司法權ヲ行フノ機關ナリ即チ議會ノ立法ニ於ケル政府ノ大權ニ於ケルト共ニ憲法上ニ鼎立シ立憲國家ノ機關ヲナスモノナリ
- (ロ) 司法權ハ固ヨリ國權ノ行動ナリ裁判所之ヲ行フト謂フモ統治ノ作用ニ參與スルノ義ニシテ自主ノ權力ヲ行フニアラサルハ言ヲ俟タス
- (ハ) 裁判所ハ立憲政體ノ特色ナリ專制ノ世司法ト立法トヲ混シ又ハ其機關ヲ分ツモ二者同シク直接干涉ノ下ニアリ故ニ公正ヲ期スルノ裁判ハ時ニ權勢威力ノ侵犯ヲ被ルノ流弊アルヲ免レサリキ之ヲ政府ノ權勢外ニ獨立セシメタルハ寔ニ立憲ノ美果ナリトス世或ハ之ヲ稱シテ司法權ノ獨立ト謂フ蓋シ

政府ノ干渉ヲ受ケサルノ義ニ外ナラス固ヨリ國權ノ外ニ立ツノ謂ニハアラサルナリ

(註) 司法大臣ノ設置ハ明カニ憲法違反ナリト信ス松本博士ハ其著憲法原論四二四頁ニ於テ司法大臣ノ存置ハ憲法違反ナリト論セラル余ハ此卓見ニ敬服スルモノナリ即チ我憲法上ノ解釋トシテハ司法大臣ノ存置ハ明カニ憲法違反ナリト謂ハサルヘカラス我憲法ハモンテスキュー氏ノ政體論ニ基キテ其大綱ヲ規定シタルモノナルヲ以テ帝國議會裁判所及政府ヲ特立機關トシ而カモ憲法上ノ統治機關トス憲法上ノ統治者タル天皇ニ直屬スル統治機關ノコトナリ其故ニ裁判官ハ憲法上ノ統治機關ナルヲ以テ帝國議會ニモ屬セス又政府ニモ屬スルコトナクシテ天皇ニ直屬スル統治機關ナリ然ルニ國務大臣タル所ノ司法大臣タル政府カ(其補助機關タル大審院長控訴院長地方裁判所長モ勿論ノコト)裁判官ノ上ニ立チテ裁判官ヲ監督シ裁判官ノ進退ヲ決シ以テ裁判官ヲ司法大臣タル政府ノ下ニ置キテ天皇ニ直屬セシメサルコトト爲シタルハ裁判官ヲ憲法上ノ統治機關トナシテ天皇ニ直屬セシメタル憲法ノ規定ニ違反スルモノト謂ハサルヘカラス斯ノ如ク我裁判官ハ立憲ノ本義ニ違ヒ憲法ノ規定ニ反スル監督ヲ受クルヲ以テ眞ニ理想ノ裁判官ナスコトヲ得サルナリ斯ク云ヘハ論者或ハ曰ハン司法大臣ハ裁判官ヲ監督スルモノニシテ裁判官ヲ監督スルモノニアラサルカ故ニ立憲ノ本義ニ反スルモノニアラスト是大ナル誤ナリ若シ斯ク論スレハ司法大臣ハ直接ニ裁判官ヲ左右スルコトヲ得サルモ間接ニ裁判官ヲ左右スルハ差支ナシト謂フコトナラン故ニ司法大臣ヲ廢シ一切ノ監督ヲ止メ別ニ裁判官ノ進級ノ方法ヲ講シ以テ裁判官ノ特立ヲ保障セハ理想ノ裁判官ヲ得ルコト決シテ難キニアラス論者又曰ハン裁判官ヲ監督スル者ヲ廢止セハ勢ヒ裁判官ハ勝手氣儘トナリ却テ裁判ノ惡弊ヲ生スル虞レアリト然レ共其ハ相愛ニ過キス何トナレハ裁判官ハ審級ノ制アルヲ以テ原審ノ裁判ニ不服アル者ハ上訴ノ途ヲ有ス從テ不當不法ノ裁判ヲナスコトアリトスルモ直チニ之ヲ廢棄破毀セラルルヲ以テナリ加之裁

判ノ公私ニ於ケル行動ニ付テハ國民ノ注視ヲ受ケ特ニ辯護士環視中ニアリ尙又懲戒法ノ存スルアリテ懲戒訴追機關ノ注視ヲ受クルヲ以テ不當不法ノ裁判ヲ續出セシムルカ如キ裁判官ノ生スル虞レナシ要スルニ我現司法制度ハ立憲ノ本義ニ違ヒ憲法ノ規定ニ反スルモノナルヲ以テ理想ノ裁判官ヲ得テ望ムコトヲ得ス司法ノ革新ヲ望ムモノハ司法制度ノ缺陷ノ根本原因ノ此處ニ在ルコトヲ思ヒ之ヲ改ムルコトニ努力スルニアラサレハ如何ナル方策ヲ講スルモ決シテ其望ヲ達スルコトヲ得スト信ス

(ニ) 裁判所ノ裁判ハ天皇ノ名ニ於テ之ヲ行フモノナリ茲ニ天皇ノ名ニ於テ之ヲ行フトハ一ハ司法權ハ君主ノ權力ニシテ其以外ノ獨立スル權力ニアラサルコトヲ示シ一ハ以テ司法權ノ行使ハ専ラ裁判所ニ於テスルモノニシテ大權トシテ親裁セサルノ義ヲ明カニセルニ外ナラス

(ホ) 裁判ハ法律ニ依リ之ヲ行フモノナリ法律ニ依リテ行フト謂フハ裁判ノ手續ハ必ス法律ヲ以テ唯一ノ準則トシ法律以外ノ權勢ノ干渉ハ絶對ニ之ヲ排斥スルノ義ヲ示シタルモノナリ

第二 司法裁判所ノ種類及階級

司法裁判所ハ又之ヲ分ツテ通常裁判所特別裁判所トナス司法裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒處分ニ

依ルノ外其職ヲ免セラルルコトナシ懲戒ノ條規ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム(憲法第五十八條)而シテ司法官ノ地位ヲ保障セルナリ
 裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開ス公開ノ目的ハ裁判所ノ公平ヲ維持シ一般人民ヲシテ法律生活ニ慣レシメ又國法ノ權威ヲ人民ニ知ラシムルニアリ但シ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スル虞レアルトキハ法律ニ依リ又ハ裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得(憲法第五十九條)但シ判決ノ言渡ハ必ス之ヲ公開スルコトヲ要ス

通常裁判所ハ裁判所構成法ヲ以テ其組織權限ヲ定メタルモノニシテ特別裁判所トハ其他ノ法令ニ依リ設ケラレタル裁判所ヲ謂フ
 通常裁判所ハ特定ノ事件ヲ除キ通常三審制ナリ第一審ノ判決ニ不服ナルトキハ之ヲ直近上級ノ裁判所ニ控訴シ第二審ノ判決ニ不服ナルトキハ更ニ大審院ニ上告スルコトヲ得第三審ノ判決ハ終審ナリ控訴ハ法律及事實ニ對シ上告ハ法律ノ適用ノミニ對シテ争フモノナリ此他訴訟手續ニ關スル裁判ニ對シ直近上級裁判所ニ不服ヲ申立ツルヲ抗告ト謂フ而シテ控訴上告及抗告ヲ上訴ト稱ス

ス

(註) 上訴制度 裁判ハ國家立法ノ精神ヲ宣明維持シ又人民ノ權利ヲ確認保護スルヲ以テ目的トス然ルニ訴訟當事者タル原告又ハ被告ノ疎漏若クハ裁判官ノ不注意等ニ因リテ真正ノ事實ヲ確保セサルコトアリ裁判官ノ誤解ニ因リテ法律ノ解釋又ハ適用ヲ誤ルコトアリ茲ニ於テ裁判官ノ事實ニ適合セスシテ其本旨ニ悖リ當事者ノ不服正當ナル場合亦少シトセス是國法ヲ控訴上告又ハ抗告ノ制ヲ設ケ以テ裁判ノ公正ト權利ノ伸張トヲ期スル所以ナリ

上訴スルコトヲ得サル判決ヲ確定判決ト謂フ
 判決確定ノ後ハ民事ニアリテハ強制執行ヲナシ刑事ニアリテハ刑ヲ執行ス

所判裁法司

所判裁常通

- 一、區裁判所
 - 一 輕微ナル事件(第一審)……………單獨制(判事一人)
 - 二 非訟事件及破産事件……………
- 二、地方裁判所
 - 一 區裁判所ニ屬セサル事件(第一審)……………合議制(判事三人)
 - 二 區裁判所ノ判決ニ對スル控訴(第二審)……………
 - 三 區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告(第二審)……………
- 三、控 訴 院
 - 一 地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴(第二審)……………合議制(判事三人)
 - 二 地方裁判所ノ第一審トシテ爲シタル決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告(第二審)……………
- 四、大 審 院
 - 一 地方裁判所及控訴院ノ第二審判決ニ對スル上告(終審)……………合議制(判事五人)
 - 二 地方裁判所ノ第二審トシテ爲シタル決定及命令並ニ控訴院ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告(終審)……………
 - 三 皇室國事等ニ關スル犯罪事件(第一審ニシテ終審)……………
- 一、陸 海 軍
 - 軍法會議(始審及上告審)……………合議制(判士及法務官五名)
- 二、領事裁判
 - (區裁判所及地方裁判所ノ職務ヲ行フ)……………單獨制(領事一名)

一覽
特別裁判所

三 臺	灣	一 地方法院(第一審) 二 高等法院(第二審及終審)	單獨制並ニ合議制(判事一人若クハ三人) 合議制(判事三人若クハ五人)
四 朝	鮮	一 地方法院(第一審) 二 覆審法院(第二審) 三 高等法院(終審)	單獨制(判事一人) 合議制(判事三人) 合議制(判事五人)
五 關 東 州		一 地方法院(第一審) 二 高等法院(終審)	單獨制(判事一人) 合議制(判事三人)
六 南 洋 群 島		一 地方法院(第一審) 二 高等法院(終審)	單獨制(判事一人) 合議制(判事三人)

注意 樺太ハ内地ト同シク裁判所構成法施行セラル
今各裁判所ノ管轄權限ノ大略ヲ舉タレハ左ノ如シ

第一 區裁判所

(A) 民事裁判所構成法第十四條

- 一 千圓ヲ超過セサル金額又ハ價額千圓ヲ超過セサル物ニ關スル請求
- 二 價格ニ拘ハラヌ左ノ訴訟
 - イ 住家其他ノ建物又ハ其或部分ノ受取、明渡、使用、占據若クハ修繕ニ關シ
 - 又ハ賃借人ノ家具若クハ所持品ヲ賃借人ノ差押ヘタルコトニ關シ
 - 賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

ロ 不動産ノ經界ノミニ關スル訴訟

ハ 占有ノミニ關スル訴訟

ニ 雇主ト雇人トノ間ニ雇期限一年以下ノ契約ニ關シ起リタル訴訟

ホ 左ニ掲ケタル事項ニ付キ旅人ト旅店若クハ飲食店トノ間ニ又ハ旅人

ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟

(1) 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料

(2) 旅店若クハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲預ケタル

手荷物、金錢又ハ有價物

三 破産事件

(B) 刑事(同第十六條)

一 拘留又ハ科料ニ該ル罪

二 短期一年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ該ル罪ヲ除ク外有期ノ懲役若クハ禁錮

又ハ罰金ニ該ル罪

但豫審ヲ經サルモノニ限ル

(C) 非訟事件(同第十五條、非訟事件手續法及各種登記法)

區裁判所ハ裁判所構成法又ハ他ノ法律ニ特別ノ規定アルモノヲ除ク外非訟事件ニ關スル一切ノ事務ヲ取扱フ
非訟事件中最モ主要ナルモノハ各種ノ登記事務ナリトス登記事務ハ裁判所書記ヲシテ之ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第二 地方裁判所

(A) 民事(同第二十六條)

一 第一審トシテハ區裁判所ノ權限又ハ控訴院ノ權限ニ屬セサル凡テノ事件
二 第二審トシテ區裁判所ノ判決ニ對スル控訴及區裁判所ノ決定及命令ニ對スル抗告

(B) 刑事(同第二十七條)

一 第一審トシテハ區裁判所ノ權限並ニ大審院ノ特別權限ニ屬セサル事件
二 第二審トシテ區裁判所ノ判決ニ對スル控訴及區裁判所ノ決定及命令ニ對スル抗告

對スル抗告

(C) 非訟事件

區裁判所ノ決定及命令ニ對スル抗告(同第二十九條)

第三 控訴院(同第三十七條)

- 一 地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴
- 二 地方裁判所ノ第一審トシテ爲シタル決定及命令ニ對スル抗告
- 三 皇族ニ對スル民事上ノ訴訟ニ付キ第一審及第二審ノ裁判權ハ東京控訴院ニ屬ス(同第三十八條)

第四 大審院(同第五十條)

- 一 終審トシテ
 - イ 地方裁判所及控訴院ノ第二審判決ニ對スル上告
 - ロ 地方裁判所ノ第二審トシテ爲シタル決定及命令並ニ控訴院ノ決定及命令ニ對スル抗告
 - ハ 地方裁判所又ハ區裁判所ノ爲シタル上告棄却ノ決定ニ對スル抗告

二 第一審且終審トシテ

刑法第七十三條、第七十五條、第七十七條乃至第七十九條ノ罪並ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處スヘキモノノ豫審及裁判

此外臺灣總督府法院ニ付テハ明治三十一年七月律令第十六號、臺灣總督府法院條例、關東廳法院ニ付テハ明治四十一年九月勅令第二百十二號、關東州裁判令、朝鮮總督府法院ニ付テハ明治四十二年十月勅令第二百三十六號、朝鮮總督府裁判所令、南洋廳法院ニ付テハ大正十一年三月勅令第三百三十三號、南洋群島裁判令ヲ見ルヘシ

第二節 司法裁判所職員

裁判所ニ(一)判事(二)裁判所書記(三)執達吏ヲ置ク

(一) 判事ハ裁判ヲ司ル而シテ現行法ニ於テハ司法權ノ獨立ヲ保護スル爲(イ)裁判官ノ職務ノ獨立(ロ)裁判官ノ地位ノ保障ヲナス

(イ) 裁判官ノ職務ノ獨立

裁判官ハ裁判ヲナスニ當リ他ノ官廳ノ干涉又ハ上官ノ指揮ヲ受ケス自己ノ意思ニ基キ其確信スル所ニ從テ法規ノ解釋適用ヲナスコト

(ロ) 裁判官ノ地位ノ保障

裁判官ハ刑事又ハ懲戒處分ニ由ルノ外其意ニ反シテ職ヲ免セラルルコトナシ

(註一) 憲法第五十八條第二項ニ「裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外職ヲ免セラルルコトナシ」ト規定ス諸國ノ憲法モ亦我國ノ憲法ト同シク裁判ノ公平、安全ヲ保障スル爲ニ裁判官ノ地位ヲ保護スル所ノ規定ヲ存置ス即チ左ノ如シ

佛蘭西一七九一年憲法第一百五十九條 國王ハ裁判官在勤中ノ犯罪ニ付キ處刑ノ裁判後ニアラサレハ其職ヲ奪フコトナシ

同一七九五年憲法第二百六條 裁判官在勤中ノ犯罪及法律ニ依ラスシテ裁判ヲ爲シタル犯罪ノ外其職ヲ免セラルルコトナシ

同一八一四年憲法第五十八條(一八一五年憲法第五十一條、一八三〇年憲法第四十九條ハ同文) 裁判官ハ終身其職ヲ免セラルルコトナシ

奧大利憲法第五編第五條、第六條 裁判官ハ終身其職ニ任シ轉職スルコトナシ裁判官ハ不羈獨立ナリ法律ニ從ヒ公正ナル審判ニ依ルニアラサレハ免職セラルルコトナシ

白耳義憲法第百條 裁判官ハ終身其職ニアルヘシ審判ニ依ルニアラサレハ免職又ハ停職セラルルコトナシ

伊太利憲法第七十一條 裁判官ハ裁判ニ依ルニアラサレハ他ノ裁判所ニ轉任セラルルコトナシ
普魯西憲法第八十七條 裁判官ハ終身官ニシテ法律ノ豫見シタル原因ニ基ク裁判ノ宣告ヲ以テスルニアラサレハ
其職ヲ奪ヒ又ハ免セラレルコトナシ

丁抹憲法第七十三條 裁判官ハ法律ニ依リテ司法ノ裁判ノ宣告ニ依ルニアラサレハ免職セラルルコトナシ

北米合衆國憲法第三章第一條 裁判官ノ任期ハ其品行方正ナル期間トス

葡萄牙憲法第二百十條 裁判官ハ轉任セラルルコトナシ然レ共法律ノ定ムル所ニ依リテ免職スルコトアルヘシ

西班牙憲法第六十八條 裁判官ハ裁判ニ依ルニアラサレハ有期若クハ無期ニ其職ヲ職ハルルコトナシ

茲ニ一ノ疑問ハ「其職ヲ免セラレルコトナシ」トアル職ノ一字ナリ即チ職ト官トハ相同シカラス停職退職ノ場合
ニハ官ハ依然トシテ殘ルモノナリ然ラハ刑事宣告又ハ懲戒處分ニ依リテ職ヲ免セラレタルトキモ官ハ尙殘ルモノ
ナリヤ否ヤノ疑問ナリ余ハ停職又ハ退職ノ場合ハ官ハ勿論存スルモ刑事ノ宣告又ハ懲戒處分ニ依リタル場合ハ官
モ之ニ從テ止ムモノト解スヘキモノナリト信ス

(註二) 尙茲ニ一言スヘキハ所謂裁判官ノ停年制(裁判所構成法第七十四條ノ二)カ憲法第五十八條第二項ニ違反スル
コトナキヤ否ヤノ問題ナリ

蓋シ實際ノ必要ヨリ觀レハ停年制ヲ設クルコト時勢ノ進運ニ順應スルモノナルモ憲法ノ嚴正解釋トシテハ之ヲ是
認スルコト困難ニアラサルカト思フ從テ尙裁判所構成法第七十四條ニ規定スル身體若クハ精神ノ衰弱ニ因リ職務
ヲ執ルコト能ハサルニ至リタルトキ控訴院又ハ大審院ノ總會ノ決議ヲ經テ司法大臣退職ヲ命スルコトヲ得ルノ規
定ニ付テモ停年制ニ關スル第七十四條ノ二ノ規定ト同様ノ問題ヲ生ス(松本博士憲法原論六三三頁)

(註三) 裁判官ノ保障ハ其職ヲ免セラレルコトナキノミニテハ未タ充分ナリト謂フヲ得スト信ス不昇等、不增俸ヲ以

テ威嚇シ裁判官ノ本意ニアラサル裁判ヲ爲サシムルノ間道ナキニアラサルカ故ニ昇等、增俸ノ要件ヲ法定シ其要
件ヲ具備シタルモノハ當然昇等シ增俸スルモノト爲スヲ必要ト思考ス(同說松本博士憲法原論六三四頁)

(註四) 裁判官ノ法令審査權ニ就テ

裁判官カ法ヲ適用スルニ當リテハ其法カ完全ニ成立シ有效ニ存在スルモノナリヤ否ヤヲ審査セサルヘカラサルハ
論ヲ俟タズ茲ニ於テ乎其審査ノ程度ニ付キ學者間議論アリ余ハ法令成立ノ形式的要件即チ法律ニ付キ議會ノ協贊
アリヤ法律勅令ニ付キ國務大臣ノ副署アリヤ等ノ問題ニ付テハ審査權アルモ其實質ニ立入り違憲ノ法律ナリヤ違
法ノ命令ナリヤ等ハ之ヲ審査スル權限ナキモノト信ス勿論立法者カ法律ヲ制定スルニ當リ固ヨリ誤ナキコトヲ期
セス故ニ法律ノ條規ニシテ正理ニ反シ公益ニ悖レルモノ或ハ是アラシ然レ共若シ裁判官ヲシテ法律ノ善惡ヲ審判
シ以テ法律ヲ補正スルコトヲ許サンカ裁判官ヲシテ立法者ノ地位ニ居ラシムルモノニシテ其危險蓋シ云フヘカラ
サルモノアラシ況ヤ正理ト謂ヒ公益ト謂フモノハ人々其觀ル所ヲ異ニシ敢テ一定ノ繩墨アラサルニ於テヤ立法
者ニシテ誤アルヲ免レヌムハ裁判モ亦過失ナキヲ保セス是故ニ裁判官タルモノハ唯法律ノ形式的要件如何ヲ顧ル
ノミ善惡ヲ審判スルノ職權アルヘカラス(反對說上杉博士)(新編憲法述義六〇二頁以下)市村博士(帝國憲法十
一版六八九頁以下)清水博士(憲法篇十九版一一二頁以下)稻田博士(日本憲法一二三頁以下)副島博士(日
本帝國憲法論四七四頁)同說一木博士(日本法令豫算論二〇六頁以下)美濃部博士(憲法概要四九三頁)
我國ノ實例モ余ノ意見ト一致セリ曾テ警察犯處罰令ニ違反シタル密淫實事件ニ於テ上告人ハ此警察犯處罰令ナル
內務省令ハ憲法第二十三條ニ明白ニ違反スルヲ以テ裁判所ハ之ヲ適用スヘキモノニアラスト主張シタルモ裁判所
ハ之ヲ否定セル事件アリ曰ク「裁判所カ司法權ヲ行フニ當リ先ツ適用スヘキ法律命令カ法律命令タル形式ヲ具備
スルヤ否ヤヲ審按セサルヘカラサルハ固ヨリ言ヲ俟タサル所ナレ共荷モ其形式ニ於テ缺クル所ナシトセハ則チ進

シテ其實質カ憲法違反ノ法律ニアラサルカ若クハ法律違反ノ命令ニアラサルカヲ審査シテ之カ適用ヲ拒ミ得ヘキ
 モノニアラスト判決セリ(大審院刑事判決録大正二年七九六頁以下)又香川縣漁業取締規則違反ノ事件ニ於テ
 上告人カ該縣令ノ内容カ刑法ニ違反セルヲ以テ第二審裁判所カ之ヲ適用セルハ不法ナリト主張セルニ對シ裁判所
 ハ「所論ノ如ク右規定(當該縣令)カ違反ナリトスルモ裁判所ハ固ヨリ法令ノ内容カ違反ナリヤ否ヤヲ審査シ其違
 法ナル場合ニ於テハ之カ適用ヲ拒否スルノ職權ヲ有セサルヲ以テ違法ナル内容ヲ有スル法令ト雖モ適法ノ形式ヲ
 以テ公布セラレタル以上ハ當然之ヲ適用セサルヘカラスト判決セリ(大審院刑事判決録大正三年一九二八頁)
 尙此判例ニ對シテ美濃部博士ノ詳細ノ評論(法學協會雜誌第三八卷第四號一二五頁五二五頁以下)宮内法學士(國
 家學會雜誌第三九卷第二號佛國裁判所ノ法律審査權)ノ論文ヲ參照セラレタシ

- (二) 裁判所書記ハ往復會計訴訟記録等ノ事務ヲ取扱フモノトス
- (三) 執達吏ハ區裁判ニ屬シ法律ニ從ヒ訴訟ニ關スル書類ヲ送達シ又ハ裁判ヲ執
 行スルモノトス

裁判所ニ檢事局ヲ附置ス而シテ檢事ハ裁判所ニ對シテ獨立ノ地位ヲ保有シ

- (一) 刑事ニ關シテハ公訴ヲ提起シテ法律ノ正當ナル適用ヲ請求シ及判決ノ適當
 ニ執行セラルルヤ否ヤヲ監視シ又(二)民事ニ於テモ必要ナリト認ムルトキハ通
 知ヲ求メ其意見ヲ述フルコトヲ得故ニ檢事ノ主タル職務ハ通常公益ヲ代表シ
 特定ノ場合ニ於テ私益保護ノ義務ヲ行フニアリ而シテ其職務ノ性質上裁判官

タル判事ト異リテ上官ノ命令ニ服從スヘキ義務アリ

(註) 檢察事務ハ司法大臣ノ指揮ノ下ニアル行政事務ニシテ司法權ノ行使ニアラス起訴不起訴ハ司法大臣統率ノ下ニア
 ル檢事之ヲ決スルモノニシテ司法權ヲ行使スル裁判官ノ權限ニ屬スルモノニアラス從テ司法權ノ獨立トハ何等ノ
 交渉アルモノニアラサルナリ然ルニ國民稱ヤモスレハ司法權ニアラサル行政權ノ一部タル檢察權ヲ司法權ト誤解
 シ現行法上獨立權ナキ檢察權ヲ獨立ナリト思惟シ爲ニ檢事局カ裁判所ノ一部ナルカ如キ誤解ヲ有シ累々司法權ニ
 及ホス虞レアリ言フ迄モナク眞ノ意義ニ於ケル司法權即チ裁判權ノ活動ハ檢事ノ起訴アリタル後ニ起ルモノニシ
 テ未タ起訴ナキニ司法權ノ活動若クハ司法權獨立問題ノ起リ得ヘキ余地アルコトナシ故ニ余ハ裁判所構成法ヲ改
 正シテ同法中ヨリ檢事局ニ關スル規定ヲ削除シ裁判所ト檢事局トハ全然別個獨立ノ官衙ナルコトヲ明カニシ國民
 ノ腦裡ニ司法權ト行政權ノ區別ヲ透徹セシムル制度ノ一日モ速カニ確立セラレルニ至ランコトヲ望ム

裁判所附屬員ニ辯護士及公證人アリ

- (一) 辯護士
 辯護士ハ地方裁判所ニ屬シ當事者ノ委任ヲ受ケ又ハ裁判所ノ命令ニ從ヒ通
 常裁判所ニ於テ法律ニ定メタル職務ヲ行フモノトス
- (二) 公證人
 公證人ハ地方裁判所ニ屬シ人民ノ囑託ニ應シ民事ニ關スル公正證書ヲ作成
 シ及私署證書ニ認證ヲ與フルヲ以テ職務トナス公正證書ハ完全ナル證據ニ

シテ其正本ハ裁判所ノ命令ニヨリ強制執行ヲナシ得ルカヲ有ス

第三節 行政裁判所

第一 行政裁判所ノ組織

行政裁判所ハ行政官廳ノ違法ナル處分ニ由リテ權利ヲ侵害セラレタル者カ訴ヲ起シテ救濟ヲ求ムル裁判所ナリ故ニ行政裁判所ノ目的ハ違法ナル行政處分ヲ矯正シテ行政監督ヲ全フスルニアリ行政裁判所ノ組織ハ必ス法律ヲ以テ定ムヘキコト憲法第六十一條ニ明カナリ今其組織ノ大要ヲ説明スレハ左ノ如シ

- (一) 唯一ニシテ之ヲ東京ニ置ク即チ第一審ニシテ終審タリ
- (二) 行政裁判所ニ長官一人及專任評定官十四人ヲ置ク
- (三) 長官及評定官ハ三十歳以上ニシテ五年以上高等行政官ノ職ヲ奉シタル者若クハ裁判官ノ職ヲ奉シタル者ヨリ内閣總理大臣ノ上奏ニ依リ任命セララルモノトス
- (四) 長官及評定官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニアラサレハ原則トシ

テ其意ニ反シテ退官轉職又ハ非職ヲ命セララルコトナシ

- (五) 長官ハ自ラ裁判長トナリ若クハ評定官ニ裁判長ヲ命スルコトヲ得若シ部ヲ定ムルノ必要アルトキハ其組織及事務分配ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

- (六) 行政裁判所ノ裁判ハ裁判長及評定官ヲ併セ五人以上ノ列席合議ヲ要ス但シ列席ノ人員ハ奇數ニ限リ議決ハ過半數ニ依ル

第二 行政裁判所ノ權限

行政裁判所ハ法律勅令ニヨリ行政裁判所ニ出訴ヲ許シタル事件ヲ審判スル職權ヲ有ス而カモ如何ナル場合ニ之ヲ許スヤハ概括的ニ定ムル場合ト列舉的ニ定ムル場合トアリ即チ大要左ノ如シ

(一) 概括的事項

- (1) 海關稅ヲ除ク外租稅及手数料ノ賦課ニ關スル件
- (2) 租稅滯納處分ニ關スル件
- (3) 營業免許ノ許否又ハ取消ニ關スル件
- (4) 水利及土木ニ關スル件

シテ其正本ハ裁判所ノ命令ニヨリ強制執行ヲナシ得ルカヲ有ス

第三節 行政裁判所

第一 行政裁判所ノ組織

行政裁判所ハ行政官廳ノ違法ナル處分ニ由リテ權利ヲ侵害セラレタル者カ訴ヲ起シテ救済ヲ求ムル裁判所ナリ故ニ行政裁判所ノ目的ハ違法ナル行政處分ヲ矯正シテ行政監督ヲ全フスルニアリ行政裁判所ノ組織ハ必ス法律ヲ以テ定ムヘキコト憲法第六十一條ニ明カナリ今其組織ノ大要ヲ説明スレハ左ノ如シ

- (一) 唯一ニシテ之ヲ東京ニ置ク即チ第一審ニシテ終審タリ
- (二) 行政裁判所ニ長官一人及專任評定官十四人ヲ置ク
- (三) 長官及評定官ハ三十歳以上ニシテ五年以上高等行政官ノ職ヲ奉シタル者若クハ裁判官ノ職ヲ奉シタル者ヨリ内閣總理大臣ノ上奏ニ依リ任命セララルモノトス
- (四) 長官及評定官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニアラサレハ原則トシ

テ其意ニ反シテ退官轉職又ハ非職ヲ命セラルルコトナシ

- (五) 長官ハ自ら裁判長トナリ若クハ評定官ニ裁判長ヲ命スルコトヲ得若シ部ヲ定ムルノ必要アルトキハ其組織及事務分配ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル
- (六) 行政裁判所ノ裁判ハ裁判長及評定官ヲ併セ五人以上ノ列席合議ヲ要ス但シ列席ノ人員ハ奇數ニ限リ議決ハ過半數ニ依ル

第二 行政裁判所ノ權限

行政裁判所ハ法律勅令ニヨリ行政裁判所ニ出訴ヲ許シタル事件ヲ審判スル職權ヲ有ス而カモ如何ナル場合ニ之ヲ許スヤハ概括的ニ定ムル場合ト列擧的ニ定ムル場合トアリ即チ大要左ノ如シ

(一) 概括的事項

- (1) 海關稅ヲ除ク外租稅及手数料ノ賦課ニ關スル件
- (2) 租稅滯納處分ニ關スル件
- (3) 營業免許ノ許否又ハ取消ニ關スル件
- (4) 水利及土木ニ關スル件

(二) 列舉の事項

- (1) 違法ノ行政處分ニ依リ恩給若クハ退隱料ニ關スル權利或ハ遺族扶助料ニ關スル權利ヲ侵害セラレタリトスルトキ
- (2) 土地收用審査會ノ違法裁決ニ依リ權利ヲ侵害セラレタリトスルトキ
- (3) 砂防河川及其委任命令ニ依リ規定シタル事項ニ關シ行政官廳ノ違法處分ノ爲ニ權利ヲ毀損セラレタリトスルトキ
- (4) 保安林ノ編入解除ノ處分ニ依リ違法ニ權利ヲ毀損セラレタリトスルトキ
- (5) 鑛業ニ關スル出願ニ關スル許可若クハ許否又ハ鑛業權ノ取消ニ依リ違法ニ權利ヲ侵害セラレタリトスルトキ
- (6) 國有土地森林原野ノ下戻處分及秩祿給與ニ對シ不服アルトキ
- (7) 漁業ニ關スル處分若クハ裁決ニ依リ違法ニ權利ヲ侵害セラレタリトスルトキ

- (8) 結社禁止ノ違法處分ニ依リ權利ヲ侵害セラレタリトスルトキ
 - (9) 精神病者監護法又ハ之ニ基キ發スル命令ノ執行ニ關シ違法處分ニ依リ傷害セラレタリトスルトキ
 - (10) 府縣制、市町村制、北海道町村制、島嶼町村制、水利組合法等ノ自治制度ニヨリ行政訴訟ヲ許サレタルトキ
- 行政訴訟ノ手續ニ關スル詳細ハ行政法ノ研究ニ讓ル

第四節 陪審制度

陪審制度ハ元來裁判所ノ組織構成ニ關スル制度ナルモ便宜上茲ニ之ヲ論スルコトトセリ元來裁判制度ハ之ヲ分ツテ二トナスコトヲ得一ハ之ヲ官僚裁判制度ト稱シ他ハ之ヲ陪審制度ト謂フ前者ハ我國ノ如ク專門ノ裁判官ノミニ依リ裁判ヲナス制度ニシテ後者ハ專門ノ裁判官以外ニ人民カ人民ノ資格ニ於テ裁判ニ參與スル制度ナリ而シテ此陪審制度ハ更ニ分ツテ普通陪審制度即チ所謂ジュリーシステム及參審制度ノ二トナス普通陪審制度トハ裁判ニ於テ人民ノ團體ト裁判官

ノ團體トニヨリ前者ハ事實問題ヲ調査シ後者ハ法律問題ヲ審議スルモノニシテ
裁判上權限ヲ異ニセルニ反シ參審制度ハ右二團體ヲ合シテ一トナシ事實問題及
法律問題トモ決定スルモノニシテ即チ一體トシテ權限ノ主體トナル制度ヲ謂フ
而シテ我國ノ實施スルモノハ普通陪審制度ニ類似セルモノナルモ刑事陪審殊ニ
公判陪審ノ制度ヲ採ル今其大要ヲ説明スレハ左ノ如シ

(一) 陪審ノ議ニ付スルモノ

(イ) 法定陪審事件 死刑無期刑等ノ重罪犯ニハ法律上當然陪審制ヲ適用ス

(ロ) 請求陪審事件 三年以上ノ刑ニ當ル被告ノ請求ニ依リ之ヲ適用スルモノ

(二) 陪審ノ議ニ付セサルモノ

(イ) 陪審不要事件 三年以下ノ刑ニハ之ヲ適用セス

(ロ) 陪審不適事件 事件ノ性質上陪審ヲ不適ト認ムルモノ即チ素人ニハ理解
シ難キカ又ハ感情ニ走リ正當ナル判斷ヲ誤リ易キ事件例へハ皇室軍規ニ關
スルモノ又ハ内亂外患選舉ニ關スル事件等

尙右ノ中法定陪審事件ト雖モ被告ノ請求ニ依リ陪審ヲ拒絕シ得ヘク又請求陪

審事件ニ於テモ被告ハ一旦陪審ヲ請求シタル後ト雖モ之ヲ取消スコトヲ得ヘ
キモノトス

(三) 陪審員ノ資格

三十歳以上ノ帝國臣民タル男子ニシテ引續キ同一市町村内ニ二年以上居住シ
引續キ二年以上直接國稅三圓以上ヲ納メ讀ミ書キノ出來得ル者ハ職業ノ如何
ヲ問ハス陪審員トナリ得ルナリ尤モ身心ノ不完全ナル者又ハ特別ノ職業ヲ有
スル者ハ此限リニアラス

(四) 陪審員ノ職務

公判ニ立會ヒ公判ニ於ケル證據ニ依リテ評議シ其事實ヲ認定シテ裁判長ニ答
申スルモノトス

(五) 裁判長ト陪審員トノ關係

陪審員ノ答申ノ採否ハ裁判長ノ自由トス
各國陪審制度ハ其種類必スシモ同一ニアラス然レ共何レモ事件ノ真相ニ適スル
公正ナル裁判ヲ得セシメントスル趣旨ニ出テタルコトハ相異ルコトナシ殊ニ人

民カ法律ノ制定ニ參與スル以上之カ運用ニモ參加セシメ以テ人民ノ權利ヲ尊重シ之ヲ擁護セシメンカ爲ナリ然レ共陪審制度ヲ採用スルノ可否ニ付テハ議論一
致セス
之ヲ可トスル者ハ曰ク

(イ) 陪審員ハ判事ニ比シテ事件ニ豫斷ヲ抱クコト少ナク從テ事實ノ判定ニ錯誤ノ機會少ナク判斷確實ナリ

(ロ) 陪審員ハ法ヲ適用スルニ當リ社會ノ趨勢ニ鑑ミ時勢ニ適セシムルコトヲ得ヘシ

(ハ) 陪審員ハ常識ニ富ミ世情ニ通スルヲ以テ能ク實情ヲ究メ真相ヲ穿ツコトヲ得ヘシト

又之ヲ否トスル者ハ曰ク

(イ) 陪審員ハ法律智識ニ暗キヲ以テ複雑ナル訴訟手續ヲ運用シテ事件ヲ審理スルノ能力ナシ

(ロ) 陪審員ハ往々感情ニ馳セ審理判斷ノ冷靜ヲ失シ公平ナル裁判ヲ爲スコト

能ハス

(ハ) 陪審員ハ裁判官トシテノ自己ノ責任ヲ感スルコト薄ク世評ニ依リテ其意見ヲ左右セララルコト多シト

一利一害遽ニ首肯スヘカラスト雖モ靜カニ近來ノ陪審制度ノ本義ヲ窺フトキハ其目的トスル所ハ事實ノ真相ヲ誤ルコトナク公平ナル裁判ヲ得ントスルニアルコトハ疑ヒナキ所ナルヲ以テ専務裁判官タル判事ノ裁判適切ナルヲ得サル國ニ於テ初メテ其必要ヲ感スヘク判事ノ裁判ニシテ能ク實情ニ適シ社會ノ趨勢ニ鑑ミテ法規ノ適用刑罰量定其宜シキヲ得ハ陪審制度ハ其存在ノ基礎ヲ失フコトトナルヘク結局陪審制度ハ判事ノ裁判適切ナラサルコトヲ前提トス故ニ余ハ陪審制度ヲ採用シ漫リニ一般人民ヲシテ司法權行使ニ參與セシメンヨリハ寧ロ裁判官ノ養成ニ努メ其經驗智能ヲ涵養シ專ラ之ヲシテ適切公平ナル判斷ヲ爲サシメ
ンコトヲ圖ルコソ我國現下ノ急務ナリト信ス

第四編 統治權ノ作用

第一章 行政

行政トハ國家ノ對内作用中立法司法ノ兩者ヲ除キテ殘ル部分ヲ指スコトハ前述ノ如シ此中更ニ天皇ノ親裁ニ依ルモノト然ラサルモノトアリ
今兩者ヲ區別シテ説明セン

第一節 天皇ノ親裁ニ依ル行政

天皇ノ親裁ニ依ル行政ハ分ツテ之ヲ憲法上ノ大權及憲法外ノ大權ノ二トス所謂憲法上ノ大權トハ天皇カ他ノ機關ノ干涉以外ニ於テ親裁シ得ヘキコトヲ憲法ニテ列記スル事項ヲ謂ヒ憲法外ノ大權トハ憲法ノ明文以外ニ於テ自由ニ天皇ノ行使セララル大權作用ヲ謂フモノナリ

第一款 憲法上ノ大權

天皇ハ統治權ノ總攬者トシテ無限ノ權力ヲ有スレ共立憲政治ニアリテハ其作用ヲ特殊ノ機關ニ分掌セシムルヲ例トシ唯其中ノ特殊ナル事項ノミハ他ノ機關ニ委任セス天皇カ其自由意思ヲ以テ獨斷專行セララルモノトス是即チ憲法上ノ大權ナリ

第一項 緊急勅令

凡ソ法律ハ法律ヲ以テスルニアラサレハ之ヲ動カスヘカラサルハ法律ノ效力ヨリ生スル自然ノ結果ニシテ之カ制定改廢ハ議會ノ協贊ヲ經ルヲ立憲ノ通義トス是我憲法第五條ノ明示スル所ナリ然ルニ同法第八條ニ於テ法律ニ代ルヘキ效力ヲ有スル命令ヲ發スルコトヲ認メタルハ何ソヤ他ナシ法律ノ重キハ固ヨリ論ナシト雖モ之ヲ以テ國家ノ生存公共ノ安全ニ代ヘ得ヘキモノニアラサレハナリ若シ夫レ如何ナル場合ニ於テモ立憲ノ通義ヲ確守セサルヘカラサルモノトセンカ國家非常ノ事變ニ際會シ法律ヲ制定改廢スルノ緊急ナル必要アルトキハ如何ニスヘキヤ偶々議會開會中ナルトキハ勿論議會ノ協贊ヲ經テ新ニ法律ヲ制定スル

ヲ得ヘシト雖モ議會ハ常ニ必ス開會シツツアルモノニアラサルヲ如何セン故ニ此時ニ當テハ緊急勅令ヲ發シ以テ臨機應變ノ手段ニ出ツルノ外ナキナリ(英國、白耳義、佛蘭西、北米合衆國等ハ此緊急勅令ヲ認メス但シ英國ニ於テハ責任解除法ヲ認ム責任解除法トハ廣ク違法ノ行爲ニ對シテ責任ヲ解除スルモノナリ政府カ緊急ノ場合ニ爲シタル應急處分ノ如キハ後ニ至リテ此法ニ依リ責任ヲ解除セラレルカ故ニ政府ハ緊急ナル事件ニ遭遇スルモ自由ニ適當ナル處分ヲ講スルコトヲ得ルモノナリ)

第一 意義

緊急勅令トハ國家ニ緊急ノ必要アル場合ニ當リ法律ニ代ルヘキ效力ヲ有スル勅令ヲ謂フ緊急勅令ハ立法ノ原則ニ對スル一大例外ナルヲ以テ之カ制定ニ付テハ嚴格ナル條件ヲ定ム

第二 制定ノ條件

緊急勅令ヲ發スルニハ

(一) 時期ニ於テ議會閉會中ナルコトヲ要ス

(註) 茲ニ謂フ閉會ハ通常閉會後ノ場合ノミナラス衆議院解散及貴族院停會ノ如キ場合ヲモ包含スルモノトス(法學新報第三〇卷第五號五六頁清水博士同說)但シ帝國議會停會中ニ於テハ緊急勅令ヲ發スルコト能ハサルハ勿論ナリトス

(二) 目的ニ於テ消極的ナルコト即チ公共ノ安寧ヲ保持シ又ハ其災厄ヲ避クルカ爲ニノミ之ヲ制定シ得ヘク產業ノ發達ヲ圖リ幸福ヲ増進スルカ爲等ノ積極的ノ爲ニ之ヲ制定スルコトヲ得ス

(三) 必要ノ程度ニ於テ緊急ナルコトヲ要ス
立法ノ大原則ニ對スル例外タル當然ノ結果ナリ然レ共茲ニ緊急トハ唯次ニ開カルヘキ議會ヲ待ツコト能ハサル程度ナレハ足り臨時議會ヲ召集スルノ餘裕ナキ程度タルコトヲ要セサルモノトス右ハ憲法第八條ト第七十條トヲ對照スルニ依リ明瞭ナリト信ス(但シ反對說アリ)

(四) 樞密院ノ議決ヲ經ルコトヲ要ス

第三 發布ノ手續

緊急勅令ノ發布ニハ副署、裁可、公布等ノ手續ヲ要ス

(イ) 制定者 緊急勅令ハ法律ニ代ル命令ナリ故ニ緊急勅令ヲ制定スル者ハ必

ス立法權ノ主體タラサルヘカラス而シテ我國ニ於テハ天皇カ立法權ノ主體ニシテ議會ハ單ニ立法ニ協賛スルノミナレハ緊急勅令ノ制定ハ天皇ニ專屬スルモノナリ

(ロ) 副署 緊急勅令ノ發布ニハ國務大臣ノ副署ヲ要ス然レ共總國務大臣ノ副署ヲ必要トセス

(ハ) 裁可 勅令ハ天皇ノ定ムル所ナレハ裁可ヲ要セスト論スルモノアルモ裁可ナケレハ勅令ト雖モ臣民ヲ拘束スル力ヲ生セサルヲ以テ之ヲ必要トス

(三) 公布 緊急勅令ハ樞密院ノ諮詢ヲ經ルコトヲ要スルヲ以テ之カ諮詢ヲ經タル旨ヲ記載シテ官報ニ掲載セラルルモノトス

第四 規定ノ範圍

歐洲各國ノ立法例ニハ立法事項中緊急勅令ヲ以テ定ムルコトヲ得サル事項ヲ憲法ニ規定スルモノアレトモ我憲法第八條ニハ單ニ法律ニ代ルヘキ勅令ト謂ヒ何等ノ制限ヲモ爲サルヲ以テ緊急勅令規定ノ範圍ハ立法事項ノ範圍ト同一ナリト解スヘキナリ

第五 效力

緊急勅令ハ法律ニ代ルヘキ勅令ナリ其實質的效力ニ於テ法律ト同様ノ效力アルハ勿論其形式的效力ニ於テモ亦法律ト同様ノ效力アルモノトス從テ法律ヲ以テ規定シ得ヘキ事項ハ總テ緊急勅令ノ内容トナリ得ヘク緊急勅令ニ依リ法律ヲ改廢シ得ルト共ニ緊急勅令ヲ廢止變更スルニハ法律又ハ之ト同等ノ效力アル命令ヲ以テセサルヘカラス

第六 議會ノ承諾

此勅令ハ次ノ議會ニ提出スヘシ而シテ議會ノ承諾ヲ得レハ將來其效力ヲ有スルモ承諾ヲ得サレハ其效力ヲ失フ(憲法第八條)

(註) 議會カ此承諾ヲ決スニ付テ何ヲ標準トスヘキヤニ關シテハ議論ニ派ニ別ル其一派ノ學者ハ議會ハ果シテ緊急勅令ヲ發スルノ必要アリシヤ否ヤ並ニ其命令ニ於テ規定スル所ノ手段ハ此必要ニ應スルニ適當シタルモノナリヤ否ヤニ關シテ諾否ヲ決スヘキモノニシテ寧ロ政府ノ緊急勅令發布ニ於ケル責任ヲ解除スヘキヤ否ヤヲ主眼トナシモノナリト解ス他ノ一派ノ學者ハ緊急ノ必要アリト認メテ緊急勅令ヲ發スルノ權ハ既ニ憲法第八條ヲ以テ天皇ノ大權事項トセリ故ニ此權利ヲ用フルト否トハ天皇ノ自由ナレハ議會ハ後ニ之ヲ是非スルノ權ナシ事後承諾ノ目的ハ唯將來ニ向ツテ之カ效力ヲ有セシムルヤ否ヤヲ決スルニアリト主張ス余ハ孰レノ趣旨ヲ以テ諾否ヲ決スルヤハ議員多數ノ意中ニ存スルコトニシテ外ヨリ之ヲ律スルニ由ナキノミナラス其實際ノ結果ハ何レニスルモノナリ

即チ第一ノ見解ヲ採ル場合ニ於テモ不當ト認ムルモノハ固ヨリ將來ニ向ツテ效力アルコトヲ承諾セサルヘク又其當時ニアリテハ頗ル適當ノ處分ナリシト認ムヘキモノナリトモ既ニ其必要止ミタルトキハ將來ニ向ツテ效力アルコトヲ承諾セサルヘシ要スルニ承諾ニハ第一ノ趣旨モ第二ノ趣旨モ共ニ存スルモノニシテ或時ハ其一方ヨリ又或時ハ其雙方ニヨリ諾否ヲ決スヘキモノト信ス

或學者ハ緊急勅令ニシテ帝國議會ノ承諾ヲ得レハ化シテ法律トナルト論ス(美濃部博士憲法講話二二六頁)然レ共是誤リナリト信ス何トナレハ協贊ト承諾トハ其性質ニ於テ差異アリ承諾ハ緊急勅令ヲシテ其效力ヲ將來ニ繼續セシムルノ效力ヲ生スルニ過キス決シテ其命令ヲシテ法律ニ轉化セシムル效力ヲ與フルモノニアラサレハナリ(同說一木博士法令豫算論一六一頁—一六五頁)上杉博士憲法述義四五八頁、清水博士憲法篇七五一頁)

(註一) 緊急勅令ヲ廢止スルニ更ニ緊急勅令ヲ以テシタルトキハ前後ノ勅令共議會ニ提出スヘキ必要ナシト信ス此問題ニ對シテハ學者間議論アリト雖モ余ノ案スル所ニ依レハ前令ノ效力ヲ失フハ後令ノ力ニシテ後令ハ單ニ前令ヲ廢止スルヲ目的トスルモノニシテ前令ニシテ效力ヲ失ハハ後令ハ其目的ヲ達スルモノト謂フヘシ凡ソ法令ハ一般ニ其制定ノ目的ヲ達スレハ茲ニ自ラ消滅スルヲ以テ通則トス故ニ此場合ニ於テ後令ハ目的ヲ達シタルノ爲ニ其效力ヲ失フヘシ歸スル所此場合ハ前後ノ二令共其效力ヲ失フモノトス既ニ其效力ヲ失ヒタル命令ハ之ヲ議會ニ提出スルノ必要ナシ何トナレハ緊急勅令ヲ議會ニ提出スル所以ノモノハ其命令ノ存廢ノ決議ヲ求ムルノ目的ニ出テタル

モノニシテ既ニ其效力ヲ失ヒタル命令ハ之カ存廢ノ決議ヲ求ムルノ必要ナケレハナリ

之ト同一理由ニヨリ緊急勅令カ議會開會前ニ其效力ヲ失ヒタル場合モ同様之ヲ提出スルノ要ナシト信ス(同說上杉博士「憲法述義四六四頁」清水博士「憲法篇七四七頁」市村博士「帝國憲法論七九二頁」反對一木博士「法令豫算論一五五頁」美濃部博士「憲法講話二四〇頁」松本博士「統治權論五三二頁」金森學士「帝國憲法要綱二九三頁」)

(註二) 緊急勅令カ其效力ヲ失フトキハ緊急勅令ノ爲ニ廢止セラレタル諸法律ハ總テ復活スルモノナリヤ否ヤ(レンネ「普國國法論三七七頁」)ゲ、マイヤー(獨逸國法論一六一號)野村學士(國家學會雜誌第三五卷第一一號一頁)ハ積極的ヲ採用セラル我大審院モ明治三十三年三月十二日(オ)第一一二號事件ノ判決ヲ以テ緊急勅令カ其效力ヲ失フトキハ其緊急勅令ノ爲ニ廢止セラレタル法令ハ復活スルモノトセリ

然レ共余ハ此說ニ反對ス何トナレハ憲法第八條ニ若シ議會ニ於テ承諾セサルトキハ政府ハ將來ニ向ツテ其效力ヲ失フコトヲ公布ストアリ將來ニ向ツテト謂フトキハ此失效ハ既往ニ遡及スルモノニアラサルコト明白ナリ從テ緊急勅令ノ爲ニ廢止セラレタル法律ノ復活スルモノニアラサルコトハ言ヲ俟タス(同說總積八東博士「憲法提要七二九頁」松本博士「統治權論五三五頁」金森學士「帝國憲法要綱二九三頁」)

(註三) 議會ノ承諾ヲ經ル爲提出シタル緊急勅令ニ對シ議會カ諾否ノ議決ヲ爲サスシテ閉會又ハ解散シタルトキハ其勅令ヲ承諾シタルモノト看做スコトヲ得ルヤ否ヤ上杉博士「憲法述義四六五頁」ハ議會ノ不承諾ハ積極的ニ議決セラレルコトヲ要ス故ニ議決ニ至ラスシテ閉會又ハ解散シタルトキハ不承諾ニアラスト主張セラル之ニ反シ總積八東博士「憲法提要七二九頁」金森學士「法學新報第二九卷第七號四九頁」一木博士「法令豫算論一五八頁」美濃部博士「法學志林第二一卷第五號八四頁」ハ消極說ヲ主張セラル清水博士「憲法篇七四六頁」同博士「法學新報第二九卷第八號八八四頁」市村博士「帝國憲法論七九二頁」ハ緊急勅令ヲ議會ニ提出スル目的ハ其承諾ヲ求ムルニアリ故ニ次

ノ會期ニ於テ諾否ヲ決セサルトキハ更ニ諾否ヲ決スル迄順次ノ議會ニ提出スヘシト主張セラルル余ハ此説ニ贊同スル者ナリ

(註四) 緊急勅令ノ廢止ハ法律又ハ緊急勅令ヲ以テナスヘキヤ又普通命令ヲ以テスルモ可ナリヤ一木博士(法令豫算論一六六頁)美濃部博士(憲法講話二四〇頁)上杉博士(憲法通義四六三頁)市村博士(帝國憲法論七八一頁)ハ普通命令ヲ以テ廢止シ得ルモノト主張セラルル而シテ其理由ハ緊急勅令ヲ他ノ命令ト區別スルハ唯其内容ニアリテ形式ニアラサルカ故ニ普通命令ヲ以テ之ヲ廢止シ得ルモノト主張セラルル然レ共余ハ此説ニ反對ス何トナレハ緊急勅令ハ憲法第八條ニ法律ニ代ルヘキトアルカ故ニ緊急勅令ハ普通ニ其内容ヲ法律ト均シクスルノミナラス法律ト同一ノ效力ヲ有ス之ヲ以テ既定法律ヲ廢止變更スルコトヲ得從テ緊急勅令ヲ廢止變更スルニハ法律又ハ緊急勅令ニ依ルヘキモノナリト信ス(同說清水博士「憲法篇七四二頁」續積博士「憲法提要七三四頁」)

第二項 執行命令及獨立命令

天皇ハ法律ヲ執行スル爲ニ又ハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スル爲ニ必要ナル命令ヲ發シ又ハ發セシム但シ命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ス(憲法第九條)

第一 執行命令

(一) 執行命令ノ意義

執行命令トハ法律ノ目的ヲ達スルカ爲ニ法律ニ規定シタル大綱ヲ實施スルニ必要ナル細則ヲ定ムルモノヲ謂フ此命令ノ獨立命令ト異ナル所ハ其存立及效力カ他ニ格段ノ法律アリテ始メテ生シ法律ト其存立ヲ共ニシ法律ノ豫定セサル準則ヲ掲クルコトヲ得サルニアリ

(二) 制定權

執行命令ノ制定權カ何人ニ存スルカニ付テハ議論ナキニアラサルモ我憲法ノ解釋トシテハ天皇及天皇ノ委任ヲ受ケタル政府ニアリト解ス憲法第九條ニ天皇ハ法律ヲ執行スル爲ニ必要ナル命令ヲ發シ又ハ發セシムトアルヲ以テナリ

(三) 施行細則ヲ定ムル方法

法律カ施行細則ヲ定ムルニハ次ノ方法アリ

(イ) 法律中ニ一定ノ命令ヲ指定スル場合例ヘハ「本法施行ニ必要ナル細則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム」又ハ「本法施行ニ必要ナル細則ハ内務省令ヲ以テ之ヲ定ム」ト規定スルカ如シ最モ普通ニ行ハルル方法ナリ法律中ニ命令ヲ指定セル場合ニハ必ス其命令ヲ以テ細則ヲ發布セサルヘカラス

(口) 法律中ニ命令ヲ明白ニ指定セサル場合例ヘハ「本法ノ施行ニ必要ナル細則ハ命令ノ定ムル所ニ依ル」ト規定スルカ如シ罕ニ行ハルル方法ナリ明白ニ命令ヲ指定セサル場合ニハ如何ナル命令ヲ以テ其施行細則ヲ定ムヘキカニ付テハ學者間諸説アルモ余ハ法律ノ執行ニ必要ナル命令ヲ發スル權ハ本來ナラハ憲法第九條ニ依リ天皇ニ屬シ官廳ハ唯天皇ノ特別委任ニ依リテ施行命令ヲ發シ得ルニ止マルカ故ニ若シ法律ニ特別ノ命令ヲ指定セサルトキハ勅令ヲ以テ施行細則ヲ規定スヘキモノト解スルヲ至當ト信ス但シ此場合ニ於テハ勅令ハ必スシモ一切ノ施行細則ヲ漏レナク規定スルコトヲ要セス一定ノ範圍ヲ限リテ官廳ノ命令ニ細則ノ一部ヲ規定スルコトヲ委任スルヲ妨ケス實例ニ於テモ斯ノ如キハ常ニ行ハレツツアル所ナリ(同説市村博士帝國憲法論八二一頁)

(四) 規定ノ範圍

執行命令ハ法律ヲ執行スルモノナルカ故ニ其法律ノ規定スル範圍外ニ亘リ又ハ法律ノ根本ノ規程ニ牴觸スルコトヲ得サルナリ或ハ執行命令ニシテ原法律

ノ範圍外ニ亘ルコトアルモ憲法上違反ノ責任ヲ生セスト説ク者アルモ我國ニ於テハ之ヲ採用スルコトヲ得ス

(註) 市村博士(帝國憲法論八一九頁)ハ執行命令ハ法律ヲ完全ニ執行スルヲ目的トスルモノナレハ必要ナル場合ニハ法律ノ不備ナル點ヲ補充スルコトヲ得ト主張セラルルモ余ハ此説ニ反對ス何トナレハ執行命令ハ法律ヲ執行スル爲ニ發スルモノニシテ法律ヲ補充スル性質ヲ有スルモノニアラサレハナリ從テ法律ノ原則ニ違反シ若クハ法律ノ範圍外ニ亘ル規定ヲ設クルコトヲ許サス或法律ヲ執行スルニ必要ナル細則ナラサルヘカラス若シ法律ニ違反スル規定アルトキハ其效力ナキモノト信ス憲法第九條ノ但書ニモ命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ストアリ假令其規定ナクモ命令ノ性質上法律ヲ變更スル規定ヲ設クルコトヲ得サレハナリ(同説副島博士日本帝國憲法論六六〇頁)

(五) 效力

執行命令ノ目的ハ法律ヲ執行スルニアリ故ニ執行命令ノ效力ハ執行スル法律ニ伴フモノナリ若シ執行スヘキ原法律カ廢止セラレタルトキハ執行命令モ當然其效力ヲ失フモノナリ執行スヘキ原法律ヲ離レテ獨立ノ存在ヲ保ツヘキモノニアラス命令ヲ發スルノ權ハ憲法ニ依リ生スレトモ其命令ノ效力ハ原法律ト共ニ存亡スルモノナレハナリ

第二 獨立命令

(一) 獨立命令ノ意義

獨立命令トハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スル爲ニ法律ノ範圍内ニ於テ自由ニ發スル命令ヲ謂フ之ヲ獨立命令ト謂フハ法律ヲ執行スル爲ニモアラス又法律ノ委任ニ依ルモノニモアラスシテ憲法ノ直接ノ規定ニ依リテ天皇ノ發セラルル命令ナルヲ以テナリ學者或ハ之ヲ行政命令トモ謂ヒ又補充命令トモ謂フ故ニ此命令ハ單ニ消極的ニ止マラス進ンテ積極的ニ公益ニ關スル事項ニ付テモ之ヲ發シ得ルナリ然レ共憲法上ノ所謂立法事項ニ關シテ之ヲ爲スヲ許ササルハ勿論ナリ故ニ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ臣民ノ幸福ヲ増進スル目的ノ爲ナル場合ニ於テモ憲法上法律ヲ以テ規定スヘキコトヲ定メタル事項ハ獨立命令ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ許サス例ヘハ臣民ノ住居移轉ノ自由ヲ制限スル如キ假令警察目的ニ出スルモ憲法第二章ノ保證アルヲ以テ獨立命令ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ得サルナリ而シテ法律ヲ執行スル命令及獨立命令ハ獨リ君主カ勅令ヲ以テ之ヲ規定シ得ルノミナラス憲法第九條ノ「發セシム」ト謂フ條文ニ依リ勅令ヲ以テ之ヲ官廳ニ委任シ其命令ヲ以テ之ヲ規定セシ

ムルコトヲ得ヘシ而シテ此獨立命令ヲ規定シタルハ我帝國憲法上ノ特例トモ謂フヘキモノニシテ歐洲各國ノ憲法ハ唯索遜王國ノ憲法第八十七條、巴丁憲法第六十六條ニ於テ之ヲ認メタルノ外一モ獨立命令權ノ存スル所ナシ

(二) 獨立命令ノ範圍

獨立命令ノ範圍ニ付テハ學者間議論アリ

第一說 最モ狹義ニ之ヲ解釋スル者ハ公共ノ安寧ヲ保持ストハ保安警察ノ目的ニシテ臣民ノ幸福ヲ増進ストハ行政警察ノ目的ニ外ナラサレハ獨立命令規定ノ範圍ハ警察事項ニ限ルモノナリト説ク美濃部博士之ヲ主張セラルル然レ共獨立命令ノ範圍ヲ警察事項ノミニ限ル此説ニハ反對者多シ

第二說 憲法第九條ノ規定ヲ最モ廣ク解釋シテ國務ノ全體ニ對シテ獨立命令ヲ發シ得ルモノト主張ス何トナレハ國務ノ目的ハ何レモ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ臣民ノ幸福ヲ増進スルニ存スレハナリト金森學士帝國憲法綱要二九六頁「等之ヲ主張セラルル然レ共第九條ノ規定ヲ斯ノ如ク廣義ニ解スルコトハ妥當ニアラスト信ス何トナレハ憲法第九條ハ斯ク國務ノ全體ニ對シ獨立命令ヲ發シ

得ルコトヲ定メタルモノニアラス斯ク解スルニアラサレハ憲法カ別ニ官制大權戒嚴大權等ヲ憲法第九條以外ニ定メタルハ無意義トナルヘケレハナリ

第三說 獨立命令ノ範圍ハ內務行政ニ限ルトノ說ナリ即チ憲法第九條ノ趣旨ハ直接ニ公安ヲ維持シ民福ヲ増進スル場合ニ限ルヲ以テ畢竟內務行政ノ範圍ニ限ルモノナリ外務行政、司法行政、軍務行政、財務行政ノ範圍ニ於テハ獨立命令ヲ發スルコトヲ得サルモノナリト主張セラル余モ此說ヲ適當ナリト信ス(同說一木博士「日本法令豫算論六一頁以下」市村博士「帝國憲法論八二二頁」)

(三) 獨立命令ノ效力

獨立命令ハ法律ヨリモ弱シ故ニ法律ヲ以テ獨立命令ヲ變更スルコトヲ得レ共獨立命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ス(憲法第九條)

第三項 委任命令

第一 委任命令ノ意義

委任命令トハ法律ノ委任ニヨリ立法事項ヲ定メタル命令ナリ立法事項トハ憲

法ニ於テ法律ヲ以テ定ムヘシト規定シタル事項ヲ謂フ故ニ立法事項ハ法律ニテ定ムヘキモノナリ然レ共法律ハ議會ノ協贊ヲ經サレハ制定スルコト能ハス而カモ議會ハ常設ノ機關ニアラサレハ比較的變更シ易キ細則若クハ地方ノ狀況ヲ斟酌スヘキ細則迄モ法律ニ依リテ定ムルコトハ著シク不便ナリ根本的ノ事項ヲ法律ニテ定メ特定ノ事項ヲ命令ニ委任スルコトハ實際上ニ於テ頗ル便利ナリ是委任命令ヲ認ムル所以ナリ

委任命令ハ憲法上認メラルヘキモノナリヤ否ヤニ付テハ議論少カラスト雖モ憲法ハ敢テ法律制定ノ形式ヲ限定セサルヲ以テ法律自ラ直接ニ其内容ノ全部ヲ規定セスシテ間接ニ命令ヲ通シテ之ヲ規定スルモ理論上何等憲法ニ違反スルモノニアラス例ヘハ法律カ一定ノ事項ヲ規定シ其細則ヲ命令ニ委任シテ發セシメタル場合ノ如シ從テ余ハ違憲問題ヲ惹起スルモノニアラスト信ス

第二 委任命令ノ範圍

委任命令ノ範圍ニ付テハ何等ノ制限ヲ設ケサルカ故ニ如何ナル事項ヲモ法律ヲ以テ命令ニ委任スルコトヲ得ルモノト謂フヘシ但シ立法事項以外ノモノハ

法律ノ委任ヲ要セサレハ委任命令ヲ生スルコトナシ委任命令ハ立法事項ヲ命令ニ委任スル場合ノミニ生ス立法事項中如何ナル事項ヲ委任スルモ敢テ妨ケス

第三 委任命令ノ效力

委任命令ハ法律ニ代ルヘキ命令ナリ苟モ委任ノ範圍内ナル以上其效力ハ實質的ニモ形式的ニモ法律ト同一ナリ
從テ委任命令ヲ以テ法律ヲ改廢スルコトアルヘク又委任命令ヲ改廢スルニハ法律若クハ之ト同等ノ效力アル命令ニ依ラサルヘカラス而シテ委任命令ヲ制定スルニハ必ス法律ノ委任ヲ前提トセサルヘカラサルハ勿論ナリト雖モ該法律ハ委任命令制定ノ條件タルニ止マリ其存續ノ條件ニアラス法律ノ授權ニ基キ制定セラレタル命令ハ夫レ自身正當ニシテ基礎法律ノ消滅ノ爲ニ其效力ヲ失フモノニアラス

第四 復委任

次ニ法律ニ依リ一定ノ命令ニ委任セラレタル場合ニ於テ其命令ヲ以テ更ニ以

下ノ命令ニ復委任ヲナシ得ルヤト謂フニ此點ニ關シテハ學者間議論アリト雖モ基礎法カ特ニ之ヲ禁止スルノ趣旨ニアラサル限リハ之ヲ積極的ニ解スルヲ至當ト信ス

之ヲ實際ニ付テ觀ルニ法律カ命令ニ委任シタル事項ハ甚タ多シ其中特ニ著シキモノヲ擧クレハ憲法第二十三條ノ規定ニ依リ罰則ヲ定ムル場合ニハ必ス法律ノ規定ニ依ルモノナルモ明治二十三年九月十八日法律第八十四號ニ依リ「命令ノ條項違犯ニ關スル罰則ノ件」ヲ制定シ勅令ニ罰則ノ規定ヲ委任セリ即チ之ニ依リテ命令ノ條項ニ違犯スルモノハ各其命令ニ規定スル所ニ從ヒ二百圓以内ノ罰金若クハ一年以下ノ禁錮ニ處スヘキモノトセリ更ニ此法律ニ基キ明治二十三年勅令第二百八號(明治三十九年公布明治四十一年改正)ニ依リ閣令省令ニハ百圓以内ノ罰金若クハ科料又ハ三月以下ノ懲役禁錮若クハ拘留警視總監及地方長官ノ發スル命令ニハ五十圓以内ノ罰金若クハ科料又ハ拘留ノ罰則ヲ附スルコトヲ許シ所謂復委任ヲセリ

然レ共法律ヲ以テ規定スヘキ一般ノ事項ヲ悉ク擧ケテ命令ニ委任スルカ如キ

ハ憲法カ議會ヲ設ケテ法律ノ制定ニ協贊セシムル趣旨ヲ沒却スルモノニシテ之ハ明カニ憲法ノ違犯ナリ

朝鮮ニ施行スヘキ法令ニ關スル件(明治四十四年三月二十五日法律第三十號)第一條ニハ「朝鮮ニ於テハ法律ヲ要スル事項ハ朝鮮總督ノ命令ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ得」ト規定シ一般ノ事項ヲ悉ク舉ケテ朝鮮總督ノ發スル命令(制令)ト謂フニ委任セリ是純理上違憲タルヲ免レス

(註) 委任命令カ違憲ナリヤ否ヤニ付テハ學者間議論アリレント(普國國法論第一卷八九頁—三五六頁)櫻積博士(憲法提要八〇一頁)上杉博士(憲法述義四六六頁、四六七頁)ハ積極說ヲ主張セラルル而シテ其理由ハ法律ハ議會ノ議決ナクシテ成立スルモノニアラス議會ノ法律ニ協贊スルハ會ニ議會ノ權利ノミニアラスシテ其義務タルモノナリ其故ニ議會ハ自由勝手ニ此權利ヲ拋棄スルコトヲ得ルモノニアラス從テ要法事項ノ規定ヲ行政命令ニ移スハ違憲ナリト主張セラルル之ニ反シ一木博士(法令豫算論一七九頁)清水博士(憲法篇七六二頁)市村博士(帝國憲法論八三四頁)ハ何レモ消極說ヲ主張セラルル余ハ此說ニ贊同スルコト前述ノ如シ何トナレハ憲法ハ單ニ法律ヲ以テ規定スヘキコトヲ命スルノミ法律ノ規定スル所如何ハ固ヨリ憲法ノ間フ所ニアラス法律カ詳細ニ細目ノ規定ヲ爲スモ法律ヲ以テ規定スル一法ナリ又其大綱ノミヲ定メ之カ細目ヲ命令ニ讓ルモ亦法律ヲ以テ規定スル一方法ナリ憲法ハ法律カ之ヲ規定スル方法ヲ制限スルコトナキカ故ニ一定ノ範圍内ニ於テ規定ヲ命令ニ委任スル方法ヲ採ルモ亦憲法ノ明文ニ矛盾スルコトナシト信スレハナリ

第四項 官制大權

第一 官制大權ノ意義

官制大權トハ天皇カ行政各部ノ官制及文武官ノ俸給ヲ定メ及文武官ヲ任免セラルル大權ヲ謂フ但シ此憲法又ハ他ノ法律ニ特例ヲ掲ケタルモノハ各々其條項ニ依ル(憲法第十條)即チ本條ハ官制々定文武官俸給額確定文武官任用ニ關スル大權ナリ憲法ニ所謂官制トハ行政官廳ノ組織及權限ヲ定ムル勅令ヲ意味スル行政官廳トハ一人又ハ數人ノ官吏ヲ以テ組織セラレ一定ノ範圍ヲ限リテ行政事務ヲ行フコトヲ天皇ニ依リテ委任セラレタル統治ノ機關ナリ天皇ハ文武官ノ俸給ヲ定ム俸給ハ官吏ヲシテ其地位ニ相當スル生活ヲ營マシムル爲ニスル給與ナリ

茲ニ官吏トハ任官ノ形式ニ依リテ國家ノ事務ヲ行フヘキ義務ヲ有スル自然人ヲ謂フ官吏ノ任免ハ天皇ノ大權ニ屬スト雖モ今日迄ノ制度ニ依ルトキハ文武官ノ一部ノ任免ハ之ヲ他ニ委任スルコトトナセリ即チ判任官以下ノ任免ハ君

主自ラ之ヲ爲サスシテ其所屬ノ長官ニ之ヲ爲スコトヲ委任スルモノナリ而シテ是亦必要已ムヲ得サルコトニシテ或ハ憲法ノ精神ハ高等ノ文武官ヲ指シタルモノニシテ判任官以下ヲ包含セサルノ趣意ナルヘシト雖モ明文ノ上ニ於テ其區別ヲ爲シ得サルカ故ニ是亦委任ヲ爲シ得ルモノト解釋スルノ外ナカラシ

第二 官制大權ノ性質

官制ハ官廳ノ組織及權限ヲ定ムルモノナリ故ニ官制ノ中ニハ官廳ノ組織ニ關スルモノアリ又ハ權限ニ關スルモノアリ其組織ニ關スル部分ハ單ニ官廳内部ノ規定ニ過キサレハ法規ニアラサルモ其權限ニ關スル部分ハ人民トノ間ニ權利義務ノ關係ヲ生スルカ故ニ官制ハ法規ト非法規トヲ併有スルモノナリ

第三 制定權

官制々定權ハ天皇ノ大權ニ屬ス然レ共憲法第十條ノ但書ニ此憲法又ハ他ノ法律ニ特例ヲ掲ケタルモノハ各其條項ニ依ルト規定セリ此但書ハ官制々定權ニ特例ヲ認メタルモノナリ

第五項 兵馬大權

第一 兵馬大權ノ意義

兵馬ノ大權トハ天皇カ陸海軍ヲ統帥シ又陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定メラルルヲ謂フ(憲法第十一條、第十二條)
國家ノ軍隊ヲ設クル目的ハ國家ノ獨立ト安寧秩序ノ維持トニアリ外敵ノ襲撃ニ抵抗シテ國土ノ保全ヲ圖ルハ勿論警察力ヲ以テ防遏スルコト能ハサル國內ノ暴動ヲ鎮壓シテ安寧秩序ヲ維持セサルヘカラス兵馬ノ權力ノ存スル所ニハ統治ノ實權存スルコト古今ノ例ニ徴シテ明カナレハ兵馬ノ大權ハ天皇ニ專屬スヘキ性質ノモノナリ

第二 陸海軍ノ統帥

陸海軍ヲ統帥スト謂フハ現ニ編制セラレタル陸海軍ヲ指揮命令シ之ヲ活動セシムルコトニシテ換言スレハ軍隊ニ對シ最上命令權ヲ有スルノ義ナリ單ニ陸海軍ノ指揮ト謂フ意ニアラス陸海軍各部ノ指揮ハ將校ヲシテ之ヲ行ハシム然

レ共帝國陸海軍ニ對スル最上ノ命令ハ獨リ天皇ノ專ラ有セララル所ナリ
所謂大元帥トハ此地位ヲ指シタル名ナリ而シテ此統帥權ノ作用ニ依リテ發セ
ラルル命令ハ之ヲ軍令ト稱シ普通ノ命令ト區別ス

第三 編制及兵額確定

軍ノ編成及常備兵額ヲ定ムル權ハ天皇ニ專屬ス編制トハ軍隊ヲ配置分合シ其
内部ノ組織ヲ定ムルヲ謂フ常備兵額ハ即チ現役及豫備役ノ兵籍ニアル者ノ員
數ナリ

陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ムルハ國庫ノ負擔ニ關スル問題ナレハ法律ヲ以
テ之ヲ定ムルノ例歐洲諸國ニ多シ英國ノ如キハ毎年之ヲ議決ス其他ノ國ニ於
テモ五年乃至七年毎ニ之ヲ議決スルモノ多シ然ルニ我國ニ於テハ之ヲ天皇ノ
親裁專斷事項トシ議會ノ協贊ヲ要セサルモノトス蓋シ陸海軍ノ編制及常備兵
額ノ決定ニ議會ノ協贊ヲ要セシムルトキハ國防上ニ種々ノ不便ヲ生スルヲ以
テナリ歐洲ニ於テハ是等ノ事項ニ關シ議會ニ干涉セシムルカ爲議會カ其決議
ヲ爲サス爲ニ國法上患フヘキ結果ヲ生シタルコトアリ故ニ我國ハ天皇親カラ

之ヲ定ムルコトト爲セリ勿論議會ハ豫算ノ議決權ヲ有スルカ故ニ陸海軍ノ歲
出ノ不當ナル場合ニ之ヲ抑制スルコトヲ得ルモ之トテモ憲法上ノ大權ニ基ケ
ル既定ノ歲出ヲ動かスコトヲ得サルヲ以テ歐洲諸國ニ觀ルカ如キ議會ノ不當
ナル決議カ國家ノ存立ヲ危フスルカ如キコト斷シテナシ

(註) 軍隊ノ一部ヲ外國武官ノ指揮ノ下ニ活動セシムルハ違憲ナリヤ否ヤ明治三十三年北清事件ニ際シ我軍隊ノ一部カ
獨逸元帥指揮ノ下ニ活動シタルコトアリ斯カル事實ヲ如何ニ解釋スヘキカ或論者ハ曰ク天皇カ軍隊ヲ外國武官ノ
指揮ノ下ニ移スハ其自由意思ノ發動ニ屬スルモノニシテ而カモ此委任ハ又何時ニテモ之ヲ天皇ノ手ニ收ムルコト
ヲ得從テ違憲ニアラスト主張ス然レ共余ハ之ニ反對ス何トナレハ這ハ明カニ陸海軍統帥ニ關スル天皇ノ大權ノ委
任ニ屬シ憲法ノ規定ト抵觸スルヲ以テナリ(同說清水博士憲法篇一二四九頁)(市村博士帝國憲法論八五八頁)

第六項 外交大權

第一 外交大權ノ意義

外交大權トハ天皇カ戰ヲ宣シ和ヲ講シ及諸般ノ條約ヲ締結セララルヲ謂フ(憲
法第十三條)宣戰ノ權力カ君主ノ大權ニ屬スルコトハ我憲法第十三條ニ規定ス
ル所ナリ同條ニ謂フ所ノ戰ヲ宣シトハ敵國ニ對シテ交戰ヲ宣告スル天皇ノ意

見表示ヲ謂フ實ニ戰爭ハ國家存亡ノ岐ルル一重大事タルニ拘ハラズ君主ノ專斷ニ一任シ國會ノ容喙ヲ許ササル所以ノモノハ何ソヤ他ナシ宣戰ハ往々間髪ヲ容レサルノ迅速果斷ヲ要スルハ勿論極メテ祕密ヲ尊フヲ以テノ故ナラン而シテ宣戰ハ國家非常ノ場合ニ活動スル君主ノ大權ナルカ故ニ非常大權タル所以ナリ

(註) 宣戰ナケレハ戰爭ヲ開始スルコト能ハサルヤ此問題ニ付テハ古來國際法上ノ大問題トシテ議論セラル第一說ハ宣戰ハ開戰ノ條件ナリト主張ス戰爭ヲ開始スルニハ必ス宣戰ヲ布告シ然ル後ニ戰爭行爲ヲナササルヘカラス宣戰ヲ布告セスシテ直チニ戰爭行爲ヲナスハ卑怯ノ譏ヲ免ルルコト能ハサルノミナラス國際法違反ナリト論ス第二說ハ宣戰ハ開戰ノ要件ニアラスト主張ス開戰ノ事實ハ宣戰ト同一ノ效力ヲ有ス唯宣戰ハ國內ノ臣民ニ敵愾心ヲ起サシメ列國ノ同情ヲ得ルノ利益アルノミ宣戰ヲ布告セスシテ開戰スルモ決シテ國際法違反ニアラサルノミナラス古代ノ如ク通信交通ノ便ナク他國ノ狀態明カナラザリシ時ニ平和ノ交際ヲナシツツアリシ國カ突然戰爭ヲ開始スレハ相手方ハ不意ヲ打タレテ不利益ノ地位ニ陥ルコトナシトモ今日ノ如ク通信機關完備シテ世界ノ事情明白ナルノミナラス列國常ニ軍備ヲ盛ニセル時代ニ於テハ宣戰ヲ布告セスシテ開戰スルモ卑怯ノ行爲ナリト謂フヲ得スト論ス余ハ從來各國ノ例ニ照シ後說ニ贊同スルモノナリ

講和トハ戰爭終了スルニ際シ敵國ト和睦スルヲ謂フ講和ハ天皇ノ大權ニ屬スルモノナレハ其條件等ハ天皇ノ自由意思ニ依ル從テ講和ノ條件トシテ國土ヲ

割讓シタル場合ニ其國土ノ上ニ居住スル臣民カ法律ノ保障ニヨリ與ヘタル權利義務ニ變更ヲ生スルモ別ニ帝國議會ノ協贊ヲ經ルコトヲ要セサルナリ

第二 條約ノ性質

外交ノ事ハ國際法規ノ下ニ於テ他國ト交渉スルモノニシテ所謂對外事件ノ處理ニ屬ス對内作用ノ一部タル行政ノ範圍ニ屬スルモノニアラス然レ共此中ニハ條約ノ締結權ヲ包含シ而カモ條約ノ中ニハ其公布ト共ニ臣民ヲ拘束スルモノ頗ル多キカ故ニ今特ニ條約ニ付テ一言セン條約ハ一ノ約束ナリ即チ一ノ國家カ他ノ國家ト自由ナル意思ヲ以テ權利ト義務トヲ締結スルモノナリ法理上一個人相互間ノ合意ニ異ナルコトナシ然レ共一個人相互間ノ關係ニ付テハ相手方雙方ヲ束縛スル主權上ニ在リ之ニ反シ國家ト國家トノ關係ニ於テハ此共同ノ主權ナシ故ニ一個人間ノ約束ト條約トハ本來ノ性質ニ於テハ差點ナキモ其效果ヲ異ニスルコトアリ又條約ハ外國ニ對スルモノナルカ故ニ法律又ハ命令ト異ナリ人民ヲ拘束スルノ力ナキモノトス換言スレハ條約上ノ權利義務ノ主權ハ法理上國家其モノニシテ國家ノ構成員タル臣民各個人ニアラス

第三 條約ノ締結權

條約ノ締結權ハ天皇ニ屬ス先ツ兩國全權委員ノ間ニ條約議定書ヲ作成シ而シテ後國法上國家ヲ外部ニ代表スル國家機關カ之ヲ批准ス條約ハ批准ニ依リテ成立ス批准前ニ於ケル議定書ハ唯條約ノ草案タルニ過キス恰カモ裁可ナキ法律カ法律案タルニ過キサルカ如シ

君主カ此締結權ヲ行フニハ諸國ニ於テ特別ノ要件ヲ設クル所少カラス今其二三ノ例ヲ舉クレハ

- 一 北米合衆國ニ於テハ義務ヲ負擔スルノ條約ハ元老院三分ノ二以上ノ多數ノ同意アルニアラサレハ之ヲ締結スルコトヲ得ス
- 二 和蘭ニ於テハ領土ノ讓與交換ノ條約及金錢上ノ義務ヲ負擔スル條約殊ニ國民ノ權利義務ニ關スル條約ハ議會ノ承諾ヲ得タル後ニアラサレハ國王ハ其批准ヲ爲スコトヲ得ス
- 三 獨逸(戰前)ニ於テハ皇帝條約ヲ締結ス而シテ其締結事項カ同國憲法第四條ノ立法ノ範圍ニ屬スルトキハ其締結ニ付キ聯邦會議ノ同意ヲ要ス

四 ウユルテンベルヒニ於テハ領土ノ讓與租稅ノ賦課法律ノ變更其他國民ノ負擔ニ關スル條約ヲ締結スルトキハ之ヲ締結スル以前ニ議會ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

右ニ舉ケタル諸國ニ於テハ即チ其機關ノ同意ヲ締結ノ條件トスルモノニシテ其同意アルニアラサレハ絕對ニ條約ヲ締結スルコトヲ得サルモノナリ然ルニ我國ニテハ憲法第十三條ニ於テ「天皇ハ……諸般ノ條約ヲ締結ス」ト規定シ締結上ニ何等ノ要件ヲ定メサルニ依リ締結權ハ天皇ニ專屬スルモノト觀ルヘシ

(註) 尙茲ニ附言スヘキハ天皇ハ其締結權ヲ他ニ委任スルコトヲ得ルヤ否ヤノ點ナリ或ハ實例アルコトヲ理由トシテ締結權ハ之ヲ他ニ委任スルコトヲ得ルモノナリト説ク人アリト雖モ締結權ハ宣戰講和ノ權ノ一部ニシテ宣戰講和ノ權ハ重大ナル作用ニシテ之ヲ他ニ委任スヘキモノニアラサルニ依リ條約ノ締結權モ亦委任スキモノニアラストナスヘキナリ

第四 條約ノ效力

條約ハ國ト國トノ約束ニシテ國法ニアラス故ニ之ヲ公布スルモ法理上直接ニ臣民ヲ拘束スヘキモノニアラサルハ前述ノ如シ然レ共我國ノ慣行ニ依レハ條約ノ内容ニシテ臣民ヲ拘束スルモノアルトキハ其公布ニ依リテ國法タル效力

ヲ有シ臣民モ亦當然之ヲ遵守スヘキモノトセリ(例ヘハ船舶衝突ニ付テノ規定ノ統一ニ關スル條約タル大正三年條約第一號對獨平和條約其他近時ノ平和條約)然レ共其當否ニ付テハ多少考慮ノ餘地ナキニアラス北米合衆國ノ憲法ノ如ク特ニ條約ハ國內法タルコトヲ明文ヲ以テ定ムルモノニアリテハ極メテ明カナリ又獨逸憲法第四條ノ如ク一般ニ承認セラレタル國際法規ハ獨逸國法ノ一部タル效力ヲ有ストアル場合ニ於テハ特ニ反對ノ國內法アル場合ハ別トシテ一般ニハ條約ハ國內法タルノ效力ヲ有スルモノト謂フヘシ又條約ノ採否ニ付キ議會ニ於テ議決ヲナス國ニ於テハ立法權ト條約トカ機關的ニ調和セラルルヲ以テ條約即チ國內法トスルノ論據アリ得ルモ我國ニ於テハ果シテ法理上如何ナル根據ニ依リ現在ノ實際ヲ説明シ是認シ得ルカ多少ノ問題ヲ免レヌ

(註) 外國ニ於テハ條約ノ效力發生ノ條件トシテ議會ノ協贊ヲ必要トスルノ例ナキニアラス即チ伊國根本法第五條ニハ「國庫ノ負擔若クハ國稅ノ變更ニ關スル條約ハ兩院ノ議決ヲ經タル後ニアラサレハ確定ノ效力ヲ有セス」ト規定シ普國憲法第四十八條ニハ「條約ニシテ國民若クハ國庫ノ負擔ヲ増スヘキモノナルトキハ兩院ノ同意ヲ得タル後ニアラサレハ其效力ヲ有セス」ト規定シ又白國憲法第六十八條ニハ「國王ハ宣戰講和同盟通商ノ條約ヲ締結スルモ國庫ノ負擔トナルヘキ條約並ニ人民ノ權利義務ニ關スル條約ハ議會ノ協贊ヲ經タル後ニアラサレハ其效力ヲ有

セス」ト規定シ又獨逸(戰前)憲法第十一條ニハ「白國憲法ニ規定スルト同一事項ノ條約ヲ締結スルニハ聯邦參事院ノ同意ヲ要シ其效力ヲ發生スル爲ニハ帝國議會ノ協贊ヲ必要トス」ト規定スソレカ爲我國ニ於テモ上杉博士、清水博士、穂積博士ノ如キハ議會ノ協贊ヲ必要トスル立法事項ヲ包含スル條約ヲ締結スルニハ當然議會ノ協贊ヲ必要トスト論セラル然レ共此說ハ誤レリ蓋シ我憲法ハ普國、白國其他歐洲諸國ノ憲法ヲ參照シタルニ拘ハラス其條件ニ「天皇ハ諸般ノ條約ヲ締結ス」トノミ規定シ特別ノ條約ニ關シ議會ノ協贊ヲ必要トストノ規定ヲ採用セザリシハ是ニハ條約ニ關シ天皇ノ意見ト議會ノ意見トカ一致セザルトキノ困難ヲ避ケニハ諸外國ノ例ニ於ケルカ如ク條約ノ締結若クハ效力發生ノ條件トシテ議會ノ協贊ヲ必要トスルトキハ對手國トノ關係上困難ナル狀態ニ陥ルコトアルニヨリ此點ヲ考慮シテ議會ノ協贊ヲ要セスシテ其效力ヲ發生セシメントシタル精神ナルコトヲ推定シ得ヘキヲ以テナリ

第七項 戒嚴大權

第一 戒嚴ノ意義

天皇ハ戒嚴ヲ宣告ス(憲法第十四條)
 戒嚴トハ戰時又ハ事變ニ際シ兵備ヲ以テ一定ノ區域内ヲ警戒スルノ義ナルコト明治十五年八月布告第三十六號ノ明言スル所ナリ即チ國家ノ存在又ハ保全ニ對スル危險ノ生シタル場合ニ軍事官廳ヲシテ一般ノ政務ヲ行ハシメ以テ之

ヲ鎮壓防禦スル作用ヲ謂フ同年同月布告第三十七號ニハ「法律規則中戰時ト稱スルハ外患又ハ内亂アルニ際シ布告ヲ以テ之ヲ定ム」ト規定シ「事變」ニ付テハ何等ノ説明ナシト雖モ戰時ト類似セル状態ノ發生シタル場合即チ兵備ヲ以テ動作スヘキ必要ノ生シタル狀況ヲ指シテ謂フナリ既ニ開戰ノ宣告ヲナシタルトキハ即チ戰時タルコトヲ布告シタルモノトス而シテ戒嚴宣告ノ效果ハ司法及行政ノ作用ヲ普通ノ官廳ヨリ軍事上ノ官廳ニ移シ且ツ普通法ヲ停止シテ軍法ヲ適用スルモノトス蓋シ戰時又ハ事變ノ際ニ於テハ普通ノ官廳ノ力ヲ以テ公共ノ安寧秩序ヲ能ク保ツコトヲ得サレハナリ

此戒嚴ノ制度ハ元ト英國ニ起レリ同國ニ於テハ一千六百八十九年ノ權利宣言ニ依リ人民ノ自由權ヲ保護セシモ又一方ニハ戒嚴ノ制ヲ設置セリ次テ佛國ニ於テハ一千七百九十九年十二月六日ノ憲法ニ於テ國家ノ安全ヲ侵害スル場合ノ生スルトキハ憲法ノ規定ヲ停止スヘキコトヲ規定セルモ其後此規定ハ廢止セラレ一千八百四十九年八月二日ノ法律ニ於テ人民ノ自由ヲ保護スル法律ヲ停止スルノ權ヲ政府ニ付與スルノ規定ヲ設ケタリ此佛國ノ制度カ遂ニ一般ニ

各國ニ採用セララルルニ至リタルナリ

第二 戒嚴地境

戒嚴ノ地境ハ之ヲ(一)臨戰地境(二)合圍地境ノ二トス而シテ地境ニ依リテ戒嚴ノ效力ヲ異ニス

(一) 臨戰地境トハ戰時若クハ事變ニ際シ警戒スヘキ地境トシテ定メラレタルモノニシテ臨戰地境內ニ於テハ地方行政事務及司法事務ノ軍事ニ關係アル事件ニ限リ其地ノ司令官ニ其權利ヲ委スルモノトス地方官、地方裁判官、檢察官等ハ速カニ該司令官ノ指揮ヲ請フヘキモノトス

(二) 合圍地境トハ敵ノ合圍攻撃其他ノ事變ニ際シ警戒スヘキ地境トシテ定メラレタルモノニシテ合圍地境ニ於テハ地方行政事務及司法事務ハ盡ク其地ノ司令官ニ管掌ノ權ヲ委スルモノトス地方官、地方裁判官、檢察官等カ戒嚴ノ宣告ト共ニ其地ノ司令官ニ付テ指揮ヲ請フコトハ前ト同シ

戒嚴令ヲ發スルコトヲ君主ノ專斷ニ一任シタル所以ノモノハ他ナシ是實ニ非常ノ場合ニ對スル命令ナルヲ以テ機ニ臨ミ最モ急速ヲ要スルモノナルカ故ニ

實際上議會ノ協賛ヲ經ルノ暇ナケレハナリ

(註) 戒嚴宣告ノ大權ハ之ヲ委任スルコトヲ得ルヤ否ヤ學者間議論アリ第一說ヲ主張スル者ハ戒嚴宣告ノ大權ハ天皇ノ親裁セラルル所ニシテ之ヲ他人ニ委任スルコト能ハス從テ現行戒嚴令ノ規定ハ憲法違反ナリト論ス第二說ヲ主張スル者ハ曰ク戒嚴宣告ハ天皇ノ大權ナルモ國家有事ノ日ニハ天皇ノ宣告ヲ待ツコト能ハサル場合アリ斯カル危急ニ際シテモ尙宣告ヲ待タサルヘカラストセハ徒ニ機宜ヲ失シテ禍根ヲ大ナラシムルモノアリ故ニ合圍若クハ攻撃ヲ受ケタル土地ノ軍隊司令官ニシテ通信斷絶シテ戒嚴宣告ノ上奏ヲ爲スコト能ハス而カモ戰略上臨機ノ處分ヲ要スル場合ニハ戒嚴ノ宣告ヲ爲シ得ルモノトス現行戒嚴令ハ憲法違反ニアラスト論ス余ハ後說ニ贊同ス

第八項 榮典ノ授與

第一 榮典ノ性質

榮典ノ授與トハ憲法第十五條ニ依リ爵位勳章等ヲ授與スルコトヲ主トシテ指スモノニシテ外國ノ勳章ノ佩用ヲ許可スルモ亦一ノ榮典ノ作用ノ一ナルニ依リ之ヲ爲スコトモ亦天皇ニ屬スルモノナリ

第二 榮典ノ種類

天皇カ憲法上ノ大權ニ依リ臣民ニ授與スル榮典ノ主要ナルモノハ(一)爵(二)位(三)勳章(四)褒章(五)記章(六)學位等トス爵ニ公侯伯子男ノ五等アリ爵ヲ授クルハ勅旨

ヲ以テシ宮内大臣之ヲ奉行ス朝鮮貴族令ニ於テモ亦同様ノ制アリ位ハ華族朝鮮貴族勅任官奏任官及國家ニ勳功アル者又ハ表彰スヘキ功績アル者ヲ敍スル爲ノ榮典ニシテ正一位ヨリ從八位ニ至ル十六階トス而シテ從四位以上ハ勅授トシ宮内大臣之ヲ奉シ正五位以下ハ奏授トシ宮内大臣之ヲ宣ス尙四位以上ハ下ノ例ニ從ヒ爵ニ准スル禮遇ヲ受ク從一位一公爵正二位一侯爵從二位一伯爵正從三位一子爵正從四位一男爵勳章ハ國家ニ功ヲ立テ績ヲ顯ス者ニ與フル賞牌ナリ大勳位菊花章寶冠章旭日章瑞寶章金鷄勳章アリ其他ノ榮典ニ屬スルモノニ褒章(紅綬綠綬藍綬紺綬黃綬)記章(一)戰爭(二)即位(三)大婚(四)其他特別ノ事件ニ參與シタルモノニ記念トシテ與フルモノ學位(法、經濟、商政、醫、藥、工、文、理、農、林、獸)等アリ又爵位勳章ニハ年金若クハ特別ノ給與金ノ附隨スルコトアリト雖モ其金額ヲ與フルモ天皇ノ一方面的行爲タル榮典授與ノ結果ニシテ契約ノ結果ニアラサルニ依リ憲法第六十二條第三項ノ適用ヲ受ケテ議會ノ協賛ヲ經ヘキモノニアラサルナリ或ハ此榮典授與ヲ國務ニアラスト解釋シ君主ノ一身上ノ榮譽權ノ作用ニ外ナラサルニ依リ國務大臣ノ副署ヲ要スヘキモノニアラスト唱フル

人アリ又實例ニ於テモ然ルモノノ如シト雖モ榮典ヲ授與スルコトハ君主自身ノ榮譽ト異ルハ勿論ナルニ依リ其理由ヲ以テ國務ニアラスト論定スヘキモノニアラサルナリ

(註一) 榮典ノ授與ハ國務ニアラスト論スル學者アリ(ケ、マイヤー獨逸國法論八四號)而シテ其理由ハ榮典ノ授與ハ君主ノ榮譽上ノ特權ノ發動ナルト同時ニ榮典ノ授與ニ國務大臣ノ副署ヲ要セサルヲ以テ國務ニアラスト論ス然レ共余ハ榮典ノ授與ハ天皇ノ施政行爲ニシテ國務大臣ノ副署ヲ要セサル國務ナリト信ス即チ他人ニ榮典ヲ授與スルト自己ノ榮譽ヲ保持スルトハ同シカラサルニヨリ余ハ天皇カ特別ノ紋章ヲ用ヒ又ハ敬稱ヲ受クル等ハ其榮譽上ノ特權ニシテ國務行爲ニアラサルモ他ノ者ニ榮典ヲ授與スルハ天皇ノ憲法上ノ大權作用ニシテ國務行爲ニ屬スルモノナリト信ス加之ケ、マイヤーノ如ク榮典ノ授與ニ國務大臣ノ副署ヲ要セサルカ故ニ榮典ノ授與ハ國務ニアラスト論スルハ其論據餘リニ薄弱ナリ氏ノ説ハ本質ノ論ニアラスシテ制度ノ論ナリ制度ノ論ハ制度ノ改變ニ從ヒテ異同スルモノナルカ故ニ論擊ノ價ナシ(同説松本博士統治權論四二二頁)ホルンハック(普國國法論第一卷四六八頁)エリホック(公權論一四五頁)清水博士(行政篇一二頁)市村博士(行政法原理六一頁)同博士(帝國憲法論三〇五頁)副島博士(日本帝國憲法論一八二頁)

(註二) 各褒章ノ要旨ヲ掲ケレハ左ノ如シ
(ノ)紅綬褒章 自己ノ危險ヲ顧ミス人命ヲ救助シタル者ニ授クルモノナリ
(ロ)綠綬褒章 孝子、順孫、節婦、義僕ノ類ニシテ德行卓絶ナル者又ハ實業ニ精勵シ、民衆ノ模範タルヘキ者ニ授クルモノナリ

(ハ)藍綬褒章 學術技藝上ノ發明、改良、著述、教育、衛生、慈善、防疫ノ事業、學校病院ノ建設、道路、河渠、堤防、橋梁ノ修築、田野ノ墾闢、森林ノ栽培、水産ノ繁殖、農商工業ノ發達ニ關シ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナルモノ又ハ公共ノ事務ニ勤勉シ勞效顯著ナル者ニ授クルモノナリ
(ニ)紺綬褒章 公益ノ爲私財ヲ寄附シ功績顯著ナル者ニ授クルモノナリ
(ホ)黃綬褒章 明治二十年海防ノ急アリシ時實ヲ投シテ其事ヲ贊助セル者ニ授クル爲ニ設定セラレタルモノナリ

(註三) 憲法第十五條ニハ榮典授與カ天皇ノ大權ナルコトヲ規定スルノミニシテ之ヲ他ノ官憲ニ委任スルコトヲ得ルヤ否ヤニ關シテハ何等ノ規定ナシ從テ議論ノ餘地ヲ生ス理論上ヨリ云ヘハ憲法第九條ノ如ク他ノ官憲ニ委任シ得ル旨ヲ示サル大權ハ之ヲ委任スルコトヲ得サルモノト謂フヘシ然レ共君主カ總テノ榮典ヲ自ラ授與スルコトハ實際上ニ於テ不可能ニ屬ス委任ニ付テ明文上ニ示ササルモ憲法ノ精神ハ總テノ榮典授與ヲ天皇ニ強フルモノトハ謂フヘカラス他ノ官憲ニ委任シテ授與セシムルモ決シテ違憲ト謂フヘキニアラスト信ス官吏任命權ハ天皇ニ屬スレトモ下級官吏ノ任命マテ天皇之ヲ行フコト不可能ナレハ之ヲ他ノ官憲ニ委任スルコトヲ得ト解スルト同權榮典授與權モ亦他ノ官憲ニ委任スルコトヲ得ルモノト解スルヲ至當ナリト信ス從テ學位ヲ文部大臣ヨリ授與シ感狀ヲ軍隊司令官ヨリ授與シ褒狀ヲ地方長官等ヨリ授與スルハ違憲ニアラス

第九項 恩赦大權

第一 恩赦大權ノ意義

恩赦トハ犯罪行爲ニ對スル刑法上ノ效果ヲ減免スルコトナリ即チ刑罰ニ對シ

大赦、特赦、減刑、復権ヲ行ハルルコトヲ謂フ(憲法第十六條)

恩赦 犯罪行為ニ對スル刑罰法上ノ責任ヲ減免スル大權ノ作用タリ刑罰ハ法律ノ定ムル所ナリ大權ヲ以テ刑罰法ノ效果ヲ動かスコト能ハサルハ一應當然ナリ然リト雖モ刑罰法規ハ必スシモ一切ノ場合ニ付キ妥當ナル效果ヲ生スルモノト認メ難シ又裁判所ノ刑ヲ言渡ス判決ハ時ニ國家ノ大策ヨリ觀テ其效果ヲ減免スルヲ必要トスル場合ナキヲ保セス又國家ノ慶典又ハ天皇崩御ノ如キ特殊ノ場合ニ於テハ人心ニ感動ヲ生スルコト極メテ多ク犯罪人ニ對シテ平時ノ如キ科刑ヲナサルルモ克ク之カ匡正ヲナスコトヲ得ヘキ場合アラン以上ノ如キ場合ニ於テ大權ノ作用ヲ以テ刑罰法規ノ作用又ハ之ニ基キタル裁判所ノ判決ニ變動ヲ生セシムルハ機宜ニ適スル處置タリ茲ニ於テ乎恩赦大權ノ必要ヲ生ス

第二 恩赦ノ種類

恩赦ハ大赦、特赦、減刑、復権ニシテ大赦トハ其犯罪ニ對スル法律ノ效力ヲ全滅スルコトニシテ確定判決前ノ犯罪ニ對シ大赦アリタルトキハ刑罰請求權ヲ消滅

セシメ確定判決後ノ犯罪ニ對シ大赦アリタルトキハ裁判言渡ノ效力ヲ全滅スルモノニシテ更ニ罪ヲ犯スモ再犯ヲ以テ論セサルモノナリ且ツ復権モ生ス又特赦トハ罪ニ對セスシテ人ニ對スルモノニシテ刑ノ執行ノ全部ヲ免除スルモノナリ減刑トハ刑ノ執行ノ輕減ヲ謂フ即チ減刑トハ確定判決ニ依リテ定マリタル刑罰ノ一部ヲ免除スルコトナリ故ニ減刑トハ其性質ヲ同シウス唯刑ノ一部ヲ免スルト全部ヲ免スルトノ差アルノミナリ復権トハ刑ノ言渡ヲ受ケテ公權ヲ剝奪セラレタル者ニ對シテ其資格ヲ回復スルヲ謂フ例ヘハ公民權ノ回復、議員選舉權、被選舉權ノ回復等ノ如シ尙恩給ニ浴シタル者復権シタルトキハ將來ニ向ツテ完全ニ資格ヲ回復シ刑ノ言渡ナカリシト同様ノ取扱ヲ受クルモノトス(大正七年十一月三十日法曹會決議記事第二九卷第三號三七頁參照)恩赦ハ實際ノ事情ヲ酌量シ法律ノ適用ヲ緩ウスルモノナルニ依リ犯罪人ノ利益ノ爲ニ行フモノト考フヘカラス從テ犯罪人ハ恩赦ヲ受クルコトヲ拒ムコトヲ得サルナリ又會計検査法第二十一條ノ賠償ノ責任ヲ有スル出納官吏ノ恩赦ハ刑事ノ事件ニアラサルニ依リ包含セサルモノト解スヘキナリ

恩赦權ハ犯罪ニ對シテノミ行ハルルモノニシテ私法上ノ責任ヲ減免スルモノニアラス故ニ天皇ノ大權ニ依リテ赦免セラレタル犯人ニ對シ被害者ハ尙民事上ノ損害賠償ヲ請求スルコトヲ得ヘシ

恩赦ニ付テハ恩赦令アリ(大正元年九月二十六日勅令第二十三號)天皇カ大赦、特赦、減刑及復權ヲ命スル場合ニ於ケル手續ヲ定ム

然レ共特赦減刑ニ對シテハ大正元年ノ恩赦令施行ニ際シ司法當局者ハ左記八種ノ犯罪者ニ對シテハ特赦又ハ減刑ノ恩典ナキコトヲ内定セリ

(イ)大逆罪ヲ犯シタル者 (ロ)直系尊屬ヲ殺傷シ又ハ逮捕シ又ハ監禁シタル者

(ハ)罪ヲ犯スコトヲ職業トスルモノ(例ヘハ)拘摸又ハ賭博常習者ノ如シ) (ニ)強盜

人ヲ傷ケタル者 (ホ)強盜婦女ヲ強姦シタル者 (ヘ)強姦ノ爲人ヲ死ニ致シタル

者 (ト)軍機保護法第一條乃至第三條ノ罪ヲ犯シタル者 (チ)改悛ノ情アリト認

ムルコト能ハサル者

尙減刑ニ付テハ別ニ定ムル所ナケレハ當局者カ隨意ニ之ヲ定ムルモノト見テ可ナリ大正元年恩赦令施行ノ際ニ行ハレタル減刑ノ標準ハ左ノ如シ

(イ)死刑ハ之ヲ無期徒刑トス (ロ)無期徒刑(無期懲役又ハ無期禁錮)ハ之ヲ十五年以下

ノ有期徒刑トス (ハ)有期徒刑ハ刑期三分ノ一以内ヲ減刑セリ

(註一) 天皇ハ未タ判決ニ至ラサル前ニ赦免スルノ權アリヤ否ヤ

判決前ニ於テハ未タ有罪無罪確定セス若シ無罪ナレハ前ニ赦免セラレテ恰カモ有罪ナリシヤノ觀ヲ呈スルコト木人ノ爲ニ不利益ナリ故ニ之ヲ赦免權ヨリ除ク憲法アリ(ラバント)獨逸國法九一節)然レ共我憲法ニハ明文ヲ以テ之ヲ禁スル規定ナシ從テ裁判中止ノ權モ本條ニ包含スルモノト謂ハサルヘカラスト信ス

(註二) 大赦ト特赦トノ差異

(イ) 大赦ハ確定判決前ニモ行ハレ得ルモ特赦ハ確定判決後ニ限リ行ハル

(ロ) 確定後ノ大赦ハ刑ノ言渡ノ效力ヲ全減スルモ特赦ハ單ニ刑罰執行ノ免除ヲ爲スニ止マル

(ハ) 大赦セラレタル犯罪行為ハ再犯ノ原因トナラス之ニ反シ特赦セラレタル犯罪ハ再犯事由タリ

(ニ) 大赦セラレタル者ハ當然復權スレトモ特赦ヲ受ケタル者ハ特赦狀中ニ記載セラレタル者ニアラサレハ復權ヲ得ス

(ホ) 大赦ハ一定ノ種類ノ犯罪ニ對シテ行ハレ特赦ハ特定ノ犯人ニ對シテノミ行ハルモノトス

(註三) 刑ノ執行猶豫制度ニ對シ違憲說ヲ唱フル者アリ即チ刑ノ執行猶豫ヲ恩赦ノ一種ト看做ス學者アリ(清水博士憲法篇一二八三頁)然レ共執行猶豫ハ恩赦ニアラス何トナレハ執行猶豫ハ條件中ニ判決ヲ言渡スモノナリ

若シ之ヲ恩赦ナリトスレハ法律ヲ以テ裁判所ニ恩赦權行使ノ權ヲ付與スルモノニシテ憲法第十六條ニ違反スルモノナレハナリ

執行猶豫ハ判決ノ執行ヲ猶豫シ若シ其猶豫期間中ニ猶豫ノ言渡ヲ取消サルルコトナクシテ其期間ヲ經過シタルト

キハ刑ノ言渡ハ其效力ヲ失フモノニシテ即チ判決ノ執行力ヲ一定ノ條件ニ繋ケタルニ過キス從テ之ヲ恩赦ノ一種
看做スヘキモノニアラスト信ス(同説市村博士國民教育憲法一八七頁)

第二款 憲法外ノ大權

憲法上ノ大權事項ハ憲法ニ依リテ制限ヲ受クルモ憲法外ノ大權事項ニ付テハ全ク無制限ナリ故ニ憲法ノ明文以外ニ於テハ我國天皇ハ自由ニ其大權ヲ行使スルコトヲ得ルモノトス

元來我國ノ憲法ハ欽定憲法ニシテ天皇ノ意思ニ基キ成立シタルモノナレハ天皇ノ統治權作用ハ決シテ憲法ニ列記セラレタル事項ノミニ止マラサルナリ唯憲法ニ掲ケラレタル作用ハ之ヲ爲スニ指定ノ形式ニ依ルヘキコトヲ宣示セラレタルニ止マリ其他ノ作用ハ天皇ニ於テ之ヲ行フコトヲ禁止スルノ主旨ニアラス從テ天皇ニ於テ之ヲ行フコトヲ得ルノミナラス如何ナル形式ヲ以テ之ヲ行ハルルモ全ク其自由ニ屬ス自耳義憲法ニ明示セラレタルカ如ク國王ハ憲法ヲ以テ與ヘラレタル權限ノ外之ヲ行フコトヲ得ストノ主義ハ我國ニ於テハ全ク適用セラレサルモノナリ曩キニ論シタルカ如ク若シ我國天皇ヲ國家ノ機關ナリト解スルトキ

ハ其大權作用ハ機關ノ權限ナル觀念ニ屬シ憲法ニヨリ委任セラレタル職務ノ外絕對ニ何事ヲモ爲シ得サルコトトナリ我國體ト相反スルコトトナル是余カ天皇機關說ヲ排斥シテ大權ハ機關ノ權限ナリトノ說ヲ否認スル理由ノ一ナリ

右ノ如ク我國天皇ハ憲法ニ規定ナキ事項ニ付キ何等ノ形式ニ依ラス獨斷專行ヲ爲スコトヲ得ヘキカ故ニ彼ノ領土ノ變更ノ如キ大使公使ノ派遣又ハ受理ノ如キ神社ノ昇格元帥稱號ノ授與若クハ大臣禮遇ノ特典ヲ與フルコトノ如キ憲法ニ何等其規定ナキ事項ハ全ク天皇ノ大權作用ニ屬ス余ハ之ヲ憲法外ノ大權ト稱シ彼ノ憲法ニ列記シタル憲法上ノ大權作用ト區別ス天皇ノ大權ヲ論シテ憲法ノ規定外ノ事項ニ論及セサルモノハ未タ以テ大權事項ヲ盡ササルモノト信ス(同説清水博士著憲法篇一一七六頁)

第二節 會計

第一節ニ於テ述フル所ハ天皇ノ親裁ニ依ル行政ナリ其他ノ行政ニ至リテハ行政官廳ヲシテ之ヲ管掌セシム國家行政ノ作用ハ之ヲ大別シテ軍務、外務、內務、財務及

法務ノ五者トスルコトヲ得ヘシ此中直接ニ臣民ノ負擔ニ重大ノ關係ヲ有スルモノヲ財務トス憲法第六章ニ於テ會計ト題シ國家ノ財務ニ關スル大綱ヲ定ムルハ之カ爲ナリ

國家ノ歲入ハ法令ノ定ムル所ニ依リテ之ヲ徵收又ハ收納スヘキモノナルヲ以テ假令收入カ豫算ニ超過スルモ又ハ之ニ不足スルモ又ハ豫算額項外ノ收入ヲ生スルモ法律上歲入豫算ノ爲ニ何等ノ拘束ヲ受クヘキモノニアラス(會計法第十二條第一項)而シテ國家ノ歲入ニハ公法上ノ收入ト私法上ノ收入トアリ公法上ノ收入ノ内容ハ大體租稅手数料及國債ノ三種ヨリ成ルモノトス

公法上ノ收入ノ内租稅收入ハ國家歲入ノ大部分ヲ占ムルモノニシテ國民一般ヨリ無償ニ其財貨ヲ徵收スルモノナルカ故ニ法律ヲ以テスルニアラサレハ新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルコトヲ得サルモノトス

第一款 租 稅

新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ(憲法第六十二條)是

憲法第二十一條ノ納稅義務ト照應スルモノニシテ純理上ヨリ謂ヘハ重複セル無用ノ規定ナリ

租稅トハ國家ノ公益ニ充ツル目的ヲ以テ其權力作用ニヨリ一般ノ標準ヲ以テ無償ニ個人ノ資産ヲ強制徵收スルモノナリ租稅ハ公費ニ充ツル爲ニ徵收スルモノナレハ罰金過料又ハ科料ノ如ク其徵收ノ目的カ他ニ存シテ公費ニ充ツルニアラサルモノハ租稅ニアラス又徵發及土地收用ノ如キハ個人ノ資産ヲ強制徵收スルモノナルモ其目的ハ物ヲ其有形ノ儘ニテ軍隊ノ用ニ供シ又ハ他ノ公用ニ供スルカ爲ニ強制徵收スルモノニシテ收入ヲ得ルコトヲ目的トセス此ハ徵發品並ニ收用地ニ對シ相當代償ヲ補償スルヲ見テモ明カナラン故ニ又租稅ニアラス

租稅ハ無償ニシテ又絕對ノ徵收ナリ即チ私法上ノ贈與寄附ノ如キモノト異ナリ國家ノ權力作用ニヨリ徵收スルモノナリ而シテ收入ヲ目的トスルカ故ニ之ニ賠償ヲ與フル性質ノモノニアラス絕對ノ徵收ナリ故ニ納稅者カ受クル保護若クハ利益ノ大小ニ關セス

租稅ト似テ非ナルモノヲ手数料トス手数料ニハ廣狹二義アリ

廣義ニ於テハ國家機關ノ行爲ヲ要求スル者カ其報償トシテ支拂フモノト國家ノ營造物(營造物トハ行政上ノ目的ヲ達スル爲直接公用ニ供セラレ且ツ公衆ノ使用ニ供セララル所ノ設備ヲ謂フ)ノ使用ヲ爲ス者カ支拂フ所ノ使用料トノニヲ含ム然レ共狹義ニ於ケル手數料トハ國家機關ノ行爲ヲ要求スル者カ支拂フ報償ノミヲ意味ス手數料支拂ノ根據タル行爲ヲ爲ス國家機關ニ司法機關ト行政機關トアルカ故ニ手數料ニモ亦司法上ノモノト行政上ノモノトノ區別ヲ生ス我憲法第六十二條第一項ニハ「新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ」ト規定ス同第二項ニ於テハ「但シ報償ニ屬スル行政上ノ手數料及其他ノ收納金ハ前項ノ限リニ在ラス」ト規定セリ故ニ此等ハ命令ヲ以テモ尙之ヲ定ムルコトヲ得但シ司法上ノ手數料ハ尙法律ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ要スト解スヘシ

(註) 租稅ト手數料トノ區別

(一) 性質ヲ異ニス

即チ手數料ハ官廳ノ行爲ニ對スル報償ノ性質ヲ有スルモ之ニ反シテ租稅ハ何等報償ノ性質ヲ有セス

(二) 負擔標準ヲ異ニス

即チ租稅ハ之ヲ負擔スヘキ者ノ實力ヲ標準トスルヲ本則トスルモ之ニ反シテ手數料ハ特定人ノ享有スル利益其

モノヲ標準トスルナリ

(三) 負擔者ノ範圍ヲ異ニス

即チ租稅ハ原則トシテ國民一般的ニ之ヲ賦課徵收スルモノナルモ之ニ反シテ手數料ハ其官廳ノ行爲ニヨリ特定

利益ヲ享クルモノノミニ對シ徵收スルモノトス

(四) 義務ノ發生ヲ異ニス

即チ租稅義務ノ發生ハ必ス法律ニ依ルコト憲法第六十二條ノ規定スル所ナルモ之ニ反シテ手數料ニ於テハ法律ニ限ラス命令ヲ以テ之ヲ定メ得ヘキモノトス

租稅及手數料ノ賦課及滯納處分ニ關スル行政官廳ノ處分カ違法ナルカ又ハ不當ナル場合ニ於テハ處分ヲ受ケタル者ハ處分ヲ爲シタル行政官廳ヲ經由シテ直接上級行政官廳ニ訴願ヲ提起スルコトヲ得但シ各省大臣ノ處分ニ對スル訴願ハ其省ニ之ヲ提出スヘシ但シ訴願ハ法定ノ期間内(原則トシテ六十日ナリ但シ特別法ニ於テハ屢々短カキ期間ヲ認ム)ニ之ヲ提出スルヲ要ス

海關稅ヲ除ク外租稅及手數料ノ賦課及滯納處分カ違法ニシテ權利ヲ侵害セラレタルトキハ被處分者ハ處分ヲ爲シタル行政官廳ヲ被告トシテ六十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

(註) 訴願ト行政訴訟ノ區別

第一 實質上ノ差別

一 行政訴訟ノ提起ハ違法處分ヲ受ケタルヲ理由トナシテ爲スモノニ限ルモ之ニ反シテ訴願ニ於テハ違法處分ノミニ止マラス不當處分ノ場合ニ於テモ之ヲ許ス否ナ却ツテ行政訴訟ハ裁量處分ヲ以テ其主眼トナスヲ以テ不當處分ニ對シテ爲スヲ其重要ナル事項ナリトス

二 行政訴訟ハ權利侵害ノ場合ニ限ルモ之ニ反シテ訴願ハ單ニ權利侵害ノ場合ニ止マラス利益ノ侵害ニ於テモ之ヲ爲シ得ルナリ是蓋シ裁量處分ノ場合ノ多クハ法律ニ違背スルコトナク從テ權利ヲ侵害スルコト少キモ私人ノ利益ヲ害スルコト多キヲ以テナリ

第二 形式上ノ差別

一 訴願ハ其處分ヲ爲シタル行政官廳ヲ經由シテ其上級行政官廳ニ於テ之ヲ再審スルモノナルモ之ニ反シテ行政訴訟ハ獨立ナル行政裁判所ニヨリテ審判セラルルモノトス

二 訴願ハ之ヲ裁決スルニ當リ關係當事者ノ參與ヲ要セサルモ行政訴訟ハ一ノ訴訟ノ形式ニヨル結果トシテ之カ關係當事者ノ參與ヲ要シ裁判ノ形式ニヨリテ判決セラルルモノトス

第二款 國 債

廣キ意味ニ於テ國家ノ債務ト謂ヘハ國家カ負擔スル一切ノ債務ヲ意味ス此中更ニ行政上ノ債務ト財政上ノ債務トノ二アリ國家カ行政ヲ爲スニ伴フテ普通ニ起

ル債務ハ之ヲ行政上ノ債務ト謂ヒ國家カ一時特別ノ收入ヲ得ルノ目的ヲ以テ特別ノ行爲ニ依リテ債務ヲ負擔スルモノヲ財政上ノ債務ト謂フ憲法ニ所謂國債トハ財政上ノ債務ヲ指スモノナリ國債ヲ起シ及豫算ニ定メタルモノヲ除ク外國庫ノ負擔トナルハキ契約ヲ爲スハ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシ(憲法第六十二條第三項)茲ニ所謂國債ノ中ニハ狹義ノ國債ト移動國債トノ二ヲ含ム狹義ノ國債トハ一時國庫ノ收入ヲ増加スル目的ヲ以テ長期間ノ債券ヲ發行スルモノヲ謂ヒ移動國債トハ其年度ノ收入ヲ以テ辨濟スル目的ヲ以テ債券ヲ發行スルモノヲ謂フ未タ國庫ノ收入トナラサル歳入ヲ目當ニ前借スルカ如キモノナリ我國ノ大藏省證券ノ如キ之ニ屬ス

狹義ノ國債ヲ起スニ付キ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘキハ論ヲ俟タス移動國債ニ付テモ亦然リ我會計法第九條ニ於テ毎年度大藏省證券發行ノ最高額ハ帝國議會ノ協贊ヲ經テ之ヲ定ムト規定スルハ之カ爲ナリ豫算ニ定メタルモノヲ除クノ外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スニハ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシ豫算ニ定メタルモノトハ豫算ニ計上シテ既ニ議會ノ協贊ヲ經タルモノヲ謂フ豫算ニ掲ケサルモノニ

シテ國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スハ皆帝國議會ノ協贊ヲ要スルナリ例ヘハ數年ニ互リテ或會社ニ年々ノ補助ヲ與ヘ公共團體ニ事業費ノ補助ヲ與フルカ如キハ此種ノ契約ニ屬ス此種ノ支出ハ初年度ノ支出ニ係ルモノハ其年ノ豫算ニ計上シアルモ翌年度以後ノ支出ハ之ヲ豫算ニ計上スルコト不可能ナルカ故ニ其部分ニ付テハ豫算ニ定メタル以外ノ國庫負擔トシテ議會ノ協贊ヲ要スルナリ一年度限ノ支出ニテモ豫算ニ計上シテ議會ノ協贊ヲ求メタルモノ以外ノ國庫金ヲ支出スルコトヲ要スル契約ハ同シク議會ノ協贊ヲ要ス豫算ニ定メタルモノ以外ニ於テ政府カ物品ヲ買上ケントセハ憲法第六十二條第三項ニ依リ必ス議會ノ協贊ヲ得ヘシ勅令ヲ以テ議會ノ協贊ナシニ政府カ斯ノ如キ行爲ヲ爲シ得ルコトヲ定ムルハ正面ヨリ憲法ノ明文ニ違反スルモノナリ

第三款 歲計豫算

第一項 緒論

國家ハ經費ヲ要ス而シテ國家ノ收入支出ハ一定ノ計畫ノ下ニ之ヲ行フニアラサ

レハ財政ノ圓滑ヲ期シ難シ此故ニ豫算ノ制アリ

第二項 豫算ノ性質及種類

第一 豫算ノ性質

豫算カ國家財政上ノ見積ナルコトハ異論ナキモ其法律上ノ性質ニ付テハ學者間大要左ノ諸説アリ

(イ) 法律説(ツオルン氏)

豫算ハ法律ヲ以テ定ムルモノナルカ故ニ法律ナリト謂フ説ナリ獨普其他豫算ヲ法律ヲ以テ定ムル國ニ於テハ或ハ之ヲ法律ナリト謂ヒ或ハ實質的法規ニアラサルモ形式的ニ法律ナリト稱セリ然レ共我國ハ明カニ豫算ト法律トハ之ヲ異ニセルヲ以テ勿論此説ハ採用シ難シ

(ロ) 委任狀説(グナイスト、リヨンネ、アルンド氏等)

此説ハ民主國ニ於テ行ハルルモノニシテ政府ハ豫算ナル委任狀ヲ議會ヨリ得テ之ニ依リテ財政上ノ處理ヲ爲シ得ヘキモノナリト主張スルモ我國ノ如

キ君主國ニ於テハ形容詞トシテモ不可ナリ蓋シ議會ハ豫算ノ協賛決算ノ認定等ニ依リ政府ノ財政ヲ監督スルノ權限アリト雖モ敢テ國家ノ財政權ヲ有スルモノニアラサレハナリ

(ハ) 必要條件說(エリネツク氏、一木博士等)

豫算ハ政府ニ財政上ノ權限ヲ與フルモノニアラサルモ豫算其モノハ政府財政上ノ必要條件ニシテ豫算ナケレハ收支ヲナスヲ得ストセリ然レ共豫算成立セサルモ政府ハ絕對ニ收支ヲナシ得サルニアラサレハ此說モ亦不可ナリ

(ニ) 責任解除說(ラバント氏等)

豫算ハ政府ノ議會ニ對スル責任ヲ豫メ解除セラルルコトヲ承認スルモノナリトノ說ニシテ此說ノ前提ハ即チ豫算ナケレハ收支ヲナシ得ス故ニ豫算ハ豫メ其責任ヲ解除スルモノナリトノ說ナルモ前提既ニ誤リナルヲ以テ之ヲ採用スルヲ得ス

(ホ) 二面說(美濃部博士)

立憲國ニ於ケル豫算ノ性質ハ第一ニハ一年度ノ收支ニ付キ豫メ議會カ其適

當ナルコトヲ證明シ豫算ニ從ヒタル國務大臣ノ行爲ハ豫メ議會ニ對シ責任解除ヲ承認セシムルモノニシテ第二ニハ君主ノ行政官廳ニ對スル會計上ノ訓令タルノ性質ヲ有ストセリ然レ共豫算ハ議會ニ對スル責任解除ニアラサルコトハ前述ノ如キヲ以テ此點ニ於テスルモ本說モ採用シ難シ

(ヘ) 豫見說(穂積博士)

豫算ハ歲計ノ豫見ナリ見積ナリ豫見タルニ於テ其用ヲナスモノナリト說カル然レ共單ニ見積ナリトノミニテハ未タ法理上ノ説明トナスニ足ラス故此說モ亦不可ナリ

余輩ハ豫算ハ天皇ヨリ行政官廳ニ對シテ與フル所ノ訓令ナリト信ス此事タルヤ憲法制定前明治十四年太政官達第三十三號ノ會計法ニ政府ノ出納ハ必ス豫算ニ據テ執行スヘキヲ定メ前年ノ收支ニ係ル金額ヲ以テ次年ノ收支ニ流用スルコトヲ禁シ且ツ確定豫算小科目以上ノ費額ノ流用ヲモ禁シタルニヨリ其趣旨タルヤ訓令ナルコト明白ナリ故ニ今日憲法施行後ト雖モ其訓令タルノ性質ニ何等變更ヲ加フヘキノ理由ナキヲ以テ豫算ハ其性質訓令ナリト解スルノ正

當ナルヲ信ス(同說清水博士憲法篇一三七九頁)

豫算ハ國家ニ特有ナル制度ニアラス之ヲ小ニシテハ一家之ヲ大ニシテハ國家皆其會計ヲ整理スルカ爲ニハ收支ノ豫算ヲ以テセサルヘカラス然レ共一個人ノ經濟ト國家ノ財政トハ豫算ニ於テ大ニ其趣ヲ異ニス即チ一個人ノ經濟ニ於テハ先ツ收入ヲ計リ其範圍内ニ於テ支出ヲナスヲ常トスルモ之ニ反シテ國家財政ニ於テハ支出ニ重キヲ置キ之ニ相當スル收入ノ計畫ヲ立ツルニアリ思フニ國家財政ニ於テハ必要缺クヘカラサル支出アリテ收入ヲシテ之ニ應セシメサルヘカラサルト共ニ濫費ヲ制限スル必要上豫メ支出ノ標準ヲ定メ之ニ應セシムルノ要アレハナリ而シテ毎年之ヲ議會ニ提出シテ其協贊ヲ求ムルハ政費ノ濫費ト政務ノ紊亂トヲ防キ以テ間接ニ政府ヲ監督セシムルカ爲ナリ而シテ今之ヲ分說スレハ左ノ如シ

(一) 豫算ハ一會計年度ヲ限リテ存在ス

豫算ハ毎年之ヲ制定セサルヘカラス憲法第六十四條ニ「毎年」ナル文字ノ存スルヲ以テモ明カナリ會計年度ハ必スシモ一年ニ限ルモノニアラス外國ニ於

テハ二年以上ノ會計年度ヲ定ムルモノナリ

我國ハ獨逸ノ制度ニ倣ヒ太政官達第八十九號ヲ以テ前年四月一日ヨリ翌年三月三十一日迄ヲ一會計年度トシ明治十九年度ヨリ實行セリ此制度ハ今モ尙行ハル

一、四月一日：三月三十一日 獨英、瑞典、丁抹、諾威

二、七月一日：六月三十日 北米合衆國、西班牙、葡萄牙、伊太利、メキシコ

三、一月一日：十二月三十一日 佛、白、和、瑞西、希臘

豫算ハ一會計年度ヲ限リテ效力ヲ有スルカ故ニ各年度ニ於テ決定シタル經費ノ定額ヲ以テ他ノ年度ニ屬スヘキ經費ニ充ツルコトヲ得ヘキニアラス(會計法第三條)

(二) 豫算ハ歲入歲出ノ見積ナリ

豫算ハ將來ニ於ケル事實ノ見積ナリ

故ニ事實ニ變化アラハ結果ハ其豫想ニ反スルコトナキヲ保セス如何ニ歲入ヲ見積ルモ實際ノ結果ハ其見積ニ過不足ナルコトアルヘク如何ニ歲出ヲ見

積ルモ實際ハ其見積ニ過不足アルヘシ

憲法ハ第六十四條第一項ニ於テ國家ノ歳入歳出ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシト規定ス(同條ノ「毎年」ノ文字ヲ曆年ノ如ク解スル人アルモ是誤リニシテ同條ノ「毎年」トハ每會計年度ノ義ナリトス)是豫算ノ效力ニ關スル大原則ヲ定メタルモノニシテ國家ノ財政ハ議會ノ協贊ヲ經タル歳入歳出豫算ニ依ルノ外之ヲ行フコトヲ得サルノ原則ヲ定メタルモノナリ

(三) 豫算ハ財政ニ關スル行政行爲ヲ監督スルノ用ニ具フルモノナリ
憲法カ豫算ヲ帝國議會ノ協贊ヲ經ルコトニ規定シタル所以ハ議會ヲシテ豫メ政府ノ財政ヲ監督セシムル趣旨ニ出ツ歳出ノコトハ國民ノ負擔ニ關スルコト最モ大ナリ實ヲ謂ハハ議會ノ發生ハ豫算ヲ議定スル目的ニ依ルト謂フモ過言ニアラス租稅ハ國民之ヲ負擔ス故ニ歳出カ如何ナル方法ニ於テ行ハルルカハ直接ニ國民ノ負擔輕重ニ關スル大問題ナリ之ヲ以テ豫算ヲ議會ノ協贊ニ繋ケ其同意セサル支出ヲ爲スコトヲ得サラシム是豫算カ政府ノ財政ニ關スル行爲ヲ監督スルノ用ニ具フルモノト謂フ所以ナリ

第二 豫算ノ種類

豫算ニハ(一)總豫算(二)特別會計豫算(三)追加豫算ノ三種アリ此三權ノ區別ハ憲法ニ定ムルモノニアラサレトモ會計法ニ於テ之ヲ認ム

(一) 總豫算

租稅其他國家一切ノ收納ヲ歳入トシ一切ノ經費ヲ歳出トシテ總豫算ニ編入ス總豫算ニ一切ノ收入支出ヲ編入スルヲ豫算統一主義ト謂フ

總豫算ハ歳入歳出共ニ經常臨時ノ二部ニ大別シ各部中ニ於テ款項ヲ區分スヘキモノナリ(憲法第六十四條第二項、會計法第八條第一項)

(二) 特別會計豫算

豫算統一主義ニ依リ國家ノ收入支出ハ總テ之ヲ總豫算ニ編入スルヲ原則トスレトモ事業ノ性質ニ依リテハ其事業ニ關スル收入支出ヲ特別會計トシ總豫算ノ外ニ特別豫算ヲ作ルヲ便宜トスル場合アリ是即チ特別會計豫算ヲ設クル所以ナリ特別會計豫算ハ總豫算ノ例外トモ見ルヘキモノニシテ法律ヲ以テ定ムルヲ例トス我國ニ於テハ現在特別會計ノ種類甚タ多ク作業特別會

計(鐵道專賣造幣局製鐵所印刷局等營造物特別會計(帝國大學文部省直轄學校等)殖民地特別會計朝鮮臺灣樺太等總テ五十有餘ノ特別會計ヲ有ス勿論特別會計モ國家ノ收入支出ナレハ歲入歲出ノ總額ヲ示スニハ之ト總豫算トヲ通算セサルヘカラス

(三) 追加豫算

豫算ハ統一主義ニ依リ一切ノ收入支出ヲ總豫算ニ編入スルヲ原則トスレトモ此原則ニ從フコト能ハサル場合アリ此原則ニ從ヘハ財政上甚タシキ不便ヲ生スル場合アリ是豫算統一主義ノ例外トシテ特別會計豫算及追加豫算ヲ認メタル所以ナリ追加豫算ハ總豫算及特別會計豫算ヲ編制シタル後豫算金額ニ不足ヲ生シ又ハ豫算外ニ新費目ノ必要ヲ生シタル場合ニ編制スル補充豫算ナリ然レ共追加豫算ハ之ヲ無制限ニ許セハ一國ノ財政ヲ紊亂スルノ虞レアリ故ニ一定ノ制限ヲ受ク即チ會計法第五條ニ曰ク「必要缺クヘカラサル經費及法律又ハ契約ニ基ク經費ニ不足ヲ生シタル場合」ニアラサレハ絶對ニ之ヲ提出スルコトヲ得サルモノトセリ政府當局ハ動モスレハ總豫算中ニ編

入スヘキモノナルニ拘ハラヌ殊更遲延シ追加豫算トスルコトアリ斯ノ如キハ會計法第五條ノ趣旨ニ反スルモノト謂ハサルヘカラス何トナレハ同條ノ示ス所ニ依レハ(イ)豫算編制ノ當時必要ナリシ經費(ロ)法律又ハ契約ニ依ラサル新事業ノ爲ノ費用ニ對シテ追加豫算ヲ提出スヘキコトヲ許シタルモノニアラサレハナリ

第三項 豫算制定ノ手續

第一 豫算案ノ編制

豫算ノ編制權ヲ有スルハ政府ナルモ大藏大臣其事務ヲ管理スルモノトス大藏大臣ハ歲入ノ景況ヲ調査シ各省ノ豫定經費要求書ニ基キ歲入歲出總豫算ヲ調制ス

大藏大臣カ豫算ヲ編制シテ之ヲ帝國議會ニ提出スル迄ノ順序ヲ簡單ニ述フレハ左ノ如シ

(イ) 大藏大臣ハ各省大臣ヲシテ前年五月三十一日迄ニ歲入概算書及歲出概算

書ヲ提出セシム概算書ハ何レモ經常ト臨時トニ大別シ更ニ之ヲ款項目ニ區分シ前年度ノ豫算ニ比シ増減アル理由ヲ説明スヘキモノトス

(ロ) 概算書ヲ受ケタルトキハ大藏大臣ハ之ヲ檢案シ歲入出ヲ對照調理シ歲入出總概算書ヲ調製シ之ヲ前年六月三十日迄ニ閣議ニ提出シ前年七月十五日迄ニ決定ス

(ハ) 閣議ヲ經タルトキハ各省大臣ハ内閣ニ於テ決定シタル各省所管經費ノ概算額以內ニ於テ節約ヲ旨トシ翌年度ノ各省豫算經費要求書ヲ調製シ前年九月三十日迄ニ之ヲ大藏大臣ニ送付ス

(ニ) 大藏大臣ハ各省豫算經費要求書ニ基キ總豫算ヲ編制シ内閣ニ提出シ決定ス斯クシテ大藏大臣ハ各省豫算經費要求書及其年三月三十一日迄ニ終リタル會計年度ノ歲入歲出現計書ヲ添付シ前年ノ帝國議會ノ始メニ之ヲ提出スルモノトス

第二 豫算ノ提出

豫算提出權ハ政府ニ專屬ス兩院ハ其權限ナシ憲法第三十八條ニ於テ兩議院ハ

……各法律案ヲ提出スルコトヲ得ト規定シテ兩議院ニ法律ノ發案權アルコトヲ明示スト雖モ豫算ニ付テハ斯カル明文ナキヲ以テ政府ヨリ其案ヲ提出スルコトヲ得ルニ止マリ議院ニハ全ク其發案權ナキモノトス法律案ノ提出ニ付テハ憲法ハ何等ノ制限スル所ナキヲ以テ兩院何レヲ先ニスルモ妨ケナシ然レ共豫算ハ先ニ衆議院ニ提出スヘキコトニ規定セリ(憲法第六十五條)此制度ハ我國ノミナラス殆ント總テノ國ニ於テ認メラルル所ナリト雖モ單ニ是沿革上ヨリ來リタル制度ニシテ理論上全ク無意味ノコトニ屬ス若シ強テ之ニ理由ヲ付スルナレハ衆議院ハ衆民ノ公選ニ依リテ成立セルモノナルヲ以テ國費負擔ニ關スル人民ノ苦痛ヲ感スルコト適切ナルト同時ニ議員大多數ノ經驗及實驗上ヨリ觀テ財政ニ關スル智識比較的ニ優レルヲ以テ是等ノ者ヲシテ先ツ豫算ヲ議セシムレハ比較的適當ナル査定ヲ得ルノ望ミ多キカ爲ナリト謂フノ外ナキナリ(同說伊藤博文氏憲法義解一二〇頁清水博士憲法篇一三八三頁)

豫算案提出ノ時期ニ關シテハ會計法第五條ニ於テ歲入歲出ノ總豫算ハ前年ノ帝國議會集會ノ始メニ於テ之ヲ提出スヘシト規定セリ故ニ前年ノ帝國議會ノ

集會ニ之ヲ提出セサルヘカラス又其集會ノ始メニ於テスルコトヲ要ス而シテ
 我會計法第五條ハ歲入歲出ノ總豫算案ノ提出ハ前年ノ帝國議會集會ニ於テス
 ヘキコトヲ命スルカ故ニ一議會ノ集會ニ於テニケ年度以上ノ豫算即チ翌々年
 度以上ノ豫算案ヲ提出議定スルコト能ハス何トナレハ其年度ハ翌々年度ニ對
 スルトキハ前々年度ニシテ前年度ニアラサルヲ以テ前年ノ集會ニ提出スヘシ
 ト謂フ本條ノ規定ニ抵觸スルヲ以テナリ

第三 豫算ノ議定

豫算案ハ兩院ノ議決ヲ經ルコトヲ要ス政府ヨリ豫算案ヲ衆議院ニ提出シタル
 トキハ(一)豫算委員ハ其院ニ於テ受取リタル日ヨリ二十一日以内ニ審査ヲ終リ
 議院ニ報告スヘシ(二)議院カ豫算案ヲ議決スルハ法律案ト異ナリ三讀會ヲ要セ
 ス豫算ニ付キ議院ノ會議ニ於テ修正ノ動議ヲ發スルハ三十人以上ノ贊成アル
 コトヲ要ス(三)衆議院ニ於テ豫算ヲ議決シタルトキハ之ヲ貴族院ニ移ス(四)貴族
 院カ衆議院ノ議決ニ同意シタルトキハ同院議長ヨリ國務大臣ヲ經テ之ヲ奏上
 スヘシ(五)貴族院ニ於テ之ヲ修正シタルトキハ衆議院ニ廻付ス(六)衆議院カ貴族

院ノ修正ニ同意セサルトキハ兩院協議會ヲ開キテ之ヲ決スヘシ

(註) 豫算案ニ對シ議會ノ修正權ヲ有スルコトハ議院法第四十一條ニ徴シテ明カナリ普、瓦(ワユルテンベルヒ)巴丁、白
 等ニ於テハ上院ハ豫算案ニ對シテ修正權ヲ有セザレモ我國ニ於テハ貴衆兩院共ニ之ヲ有スルハ明カナリ(嘗テ明
 治二十五年ニ於テ豫算案ノ協贊ニ付キニ院カ實質上ノ權限ヲ異ニスルヤ否ヤニ付キ貴衆兩院ノ間ニ爭議ヲ生シ其
 結果其區別ナキ旨ノ勅語ヲ賜フニ至レルコトアリ)但シ豫算中ニ款項ヲ新設シ或ハ豫算ノ款項ヲ轉換シ或ハ金額
 ヲ増加スルハ我國今日ノ實例ニテ認ムル所ナリト雖モ斯ノ如キハ發案權ヲ有セサル議會ノ爲シ得サル所ト信スル
 ナリ

何トナレハ政務ヲ執行スルハ政府ナリ然ルニ政府カ自ラ爲スコトヲ欲セサル事項又ハ其必要ヲ認メサル金額ヲ強
 テ局外ヨリ之ヲ變更増加スルカ如キハ議會自ラ政府ニ代リテ行政ノ計畫ヲ爲スコトナリ甚タ不都合トナル故ニ
 議會ノ修正權ハ款項ヲ變更セサル範圍ニ於テ削減ノミヲ爲スコトヲ得ルニ過キサルモノト信ス(同說市村博士、
 清水博士、美濃部博士)

野村學士(憲法大綱二一六頁)ハ政府提出ノ費額ヲ増加シ得ルモノト論セラル又金森學士(帝國憲法要綱二六八頁)
 ハ款項ヲ新設シ又ハ轉換シ若クハ金額ヲ増加スルモ不當ニアラスト論セラルルモ其當ヲ得サルコトハ前述ノ如シ

第四 豫算議定ノ制限

豫算ハ議會ノ協贊ヲ經ルヲ原則トスト雖モ而カモ豫定ノ議定ニ關シ議會カ何
 等ノ拘束ナクシテ其權限ヲ行使シ得ルモノトセハ其弊害ヤ計ルヘカラス

議會ノ豫算議定權ノ制限ハ左ノ諸點ニ存ス

(一) 皇室經費

皇室經費ハ皇室ノ費用ニ充ツル經費ニシテ國庫ノ負擔スルモノヲ謂フ皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ(四百五十萬圓)毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ將來増額ヲ要スル場合ヲ除ク外帝國議會ノ協贊ヲ要セス(憲法第六十六條)何トナレハ皇室ノ經費ニ對シ年々其金額ノ多少ヲ議スルカ如キハ皇室ノ尊嚴ニ關スル虞レアルヲ以テナリ固ヨリ豫算ニ於テハ皇室經費ヲ舉クルヲ例トスルモ是唯歲入歲出ノ均衡ヲ示スニ過キスシテ皇室經費カ議會ノ協贊ヲ要スルカ爲ニアラス(同說伊藤博文氏憲法義解一二頁)

(二) 憲法第六十七條ノ歲出

憲法上ノ大權ニ基ケル既定ノ歲出及法律ノ結果ニヨリ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歲出ハ政府ノ同意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得ス

憲法上ノ大權ニ基ケル歲出トハ憲法上ノ大權ノ發動ノ結果トシテ生スル國

庫ノ負擔ナリ例ヘハ文武官ノ俸給陸海軍々事費條約ニ依ル費用榮典授與ニ要スル費用等ノ如シ天皇ノ憲法上ノ大權行爲ノ結果トシテ必要ナルモノヲ謂フ此中既定ノ歲出ノミ議會カ之ヲ廢除削減スルコトヲ得ス既定ニアラサルモノハ固ヨリ廢除削減スルヲ得ヘシ既定トハ豫算議定ノトキニ於テ既ニ議會ノ協贊ヲ經テ現ニ支出シツツアルモノヲ謂フ

豫算ハ一年限リノ效力ヲ有スルモノナリ是ヲ以テ憲法上ノ大權ニ基ク歲出ヲ毎年議會ノ協贊ニ繫ケ議會ハ前年度ニ於テ既ニ協贊シタルニモ拘ハラヌ今年度ニ於テハ自由ニ之ヲ否決シ得ルモノトセハ國家ノ永續ハ之ヲ期スヘカラス是ヲ以テ憲法上ノ大權ニ基ケル歲出ニシテ既ニ議會ノ協贊シタルモノハ之ヲ既定ノ歲出トシテ將來廢除削減ヲ許ササルモノナリ然レ共政府ニ於テ同意ヲ爲スニ於テハ之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得然ラハ政府ハ此歲出ニ對シ如何ナル限度ニ於テ廢除削減ニ同意スルヲ得ルカト謂フニ大權命令ノ執行力ヲ消滅セシメサルノ範圍内ニ於テ與フヘキモノトス若シ夫レ政府カ此限度ヲ超エテ歲出ノ廢除削減ニ同意ヲ表シ爲ニ大權

命令ノ執行力ヲ消滅セシメンカ是即チ豫算ヲ以テ命令ノ權域ヲ侵犯スルコトトナリ命令權ノ獨立ヲ害スルニ至ルヘケレハナリ

(註) 既定ノ歳出トハ其年度ニ屬スル歳出ヲ意味スルモノニシテ前年度ノ歳出ヲ意味シタルモノニアラスト論スルモノアルモ(清水博士憲法篇一四一三頁、上杉博士憲法講義)余ハ之ニ反對ナリ何トナレハ我憲法第六十四條ニ依ルトキハ凡テ歳出入ハ議會ノ協贊ヲ經サルヘカラサルヲ以テ未タ其協贊ヲ經ス君主ノ裁可ナキモノハ之ヲ既定歳出ト謂フヲ得ス從テ豫算案提出ノ當時ニ於テ其年度ニ屬スル確定ノ歳出アルヘキ理ナシ故ニ既定ノ歳出トハ前年度ノ歳出ヲ意味シタルモノト解スルヲ以テ正當ナリト信ス(同說市村博士帝國憲法論九四九頁、副島博士日本帝國憲法論六〇七頁)

法律ノ結果ニ依ル歳出トハ法律規定ノ結果其支出ノ定マレル歳出ヲ謂フ茲ニ法律ト謂フハ議會ノ協贊ヲ經テ制定セル形式の意義ニ於ケル法律ヲ指ス法律ノ結果ニ依ル歳出中ニハ

- (イ) 法律ニ於テ直接ニ支出ノ目的ヲ定メタル支出
 - (ロ) 法律ヲ施行スル結果當然ニ必要ヲ生スル支出
- ノ二種ヲ包含ス例ヘハ裁判所帝國議會會計検査院ノ經費、恩給扶助料徴兵費、囚徒費ノ如シ

又法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出トハ政府カ契約又ハ其他ノ原因ニ因リ個人又ハ團體ニ對シテ支拂フヘキ經費ヲ謂フ例ヘハ航路其他ノ補助金、外國人ノ手當、公債ノ利子、法律上ノ賠償、訴訟費用ノ如シ茲ニ法律ト稱スルハ實質的法律ニシテ議會ノ協贊ヲ經テ制定セラレタル法律タルト其他ノ法規タルトヲ問ハス之ヲ含ムモノト解スルヲ通説トス

(ハ) 繼續費

豫算ハ一會計年度毎ニ編制スルモノナレトモ治水費、港灣修築費、軍備費等大規模ノ工事ノ如キ數年間ニ互リテ繼續スヘキ事業ハ若シ半途ニシテ議會ノ協贊ヲ得サルカ如キアラハ事業ヲ半途ニ於テ廢止スヘキ危險アリ故ニ斯カの場合ニハ事業全體ノ經費ヲ最初ノ年ニ議決シ翌年度ヨリハ別ニ議會ノ協贊ヲ經ス前年度ニ議決セシ金額ヲ漸次支出シテ支拂ニ充ツルヲ例トス之ヲ繼續費ト謂フ

繼續費ハ豫算議定權ノ原則ニ對スル例外ナレハ議會ニ於テ一旦議決シタル以上ハ次年度ニ於テ之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得サルモノナリ

第五 豫算ノ裁可

豫算ハ帝國議會ノ協贊ヲ經テ天皇之ヲ定メ一般ニ公布スルニ依リテ成立スルモノナリ其裁可ニ付テハ憲法ニ何等ノ明文ヲ置カスト雖モ天皇ノ裁可ヲ要スルハ當然ノコトナリ憲法第六十四條第一項ニ議會ノ協贊ト謂ヘルハ間接ニ裁可ヲ必要トスル趣旨ヲ指示スルモノト謂フヘシ

天皇ノ裁可ニ依リテ成立シタル豫算ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布セララル上諭ニハ帝國議會ノ協贊ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ主任ノ國務大臣ト共ニ之ニ副署スルモノナリ(公式令第九條)

次ニ公式令第九條ニハ其時期ヲ限定セスト雖モ豫算ハ性質ニ於テ一會計年度ノ見積ナルヲ以テ該會計年度開始前ニ裁可ノ上公布セラレサルヘカラサルモノト信ス

又豫算ノ裁可公布ノ性質ハ全ク法律ノ夫レト同シク天皇ハ議會ノ議決ニ依リ裁可ノ拘束ヲ受クルコトナク且ツ豫算ハ公布ニ依リ茲ニ完成スルモノトス

(註) 我國ニ於テハ從來豫算ハ裁可公布セラルル例ナルモ豫算ハ裁可ヲ必要トスルモノナルヲ否ヤニ付テハ學說一致セ

ス即チ我カ憲法ニ法律ハ裁可スト謂ヒ豫算ハ協贊ヲ經ヘシトアリ裁可ノコトヲ明言セス之ヲ以テ或學者ハ豫算ハ議會ノ議決ノミニテ當然ニ成立シ裁可ヲ俟ツテ效力ヲ生スルモノニアラスト論ス然レ共豫算ハ君主カ行政各部ニ對シ財政ノ標準ヲ示ス爲ニ制定シタルモノニシテ行政各部ニ向ツテ之ヲ準據スヘシト謂フ命令ヲ爲シ得ルハ大權ノ外ナシ議會ノ議決カ當然ニ行政官ノ遵奉スヘキ訓令ナリト謂フコトヲ得ス豫算ヲ定ムルモノハ君主ナリ議會ハ之ニ協贊シ之ヲ議定スルノミニナリ故ニ豫算ト雖モ法律ト同シク裁可ニヨリ無効力ヲ生スルモノト論決セサルヘカラス加之論者ノ主張セル如ク憲法ニ豫算ノ裁可ノ明文ナキヲ以テ之ニ反對スルモノトセハ憲法ニ勅令裁可ノ明文ナキニ拘ハラス天皇勅令ニ裁可シテ政ヲ怪シム者ナキヲ以テ之ニ答ヘント欲スルナリ市村博士ハ嘗テ豫算ノ成立ニ裁可ヲ必要トセサルコトヲ主張セラレタルモ(憲法要論六八五頁以下)其後前説ヲ捨テ積極説ニ改メラレタリ(帝國憲法論九一四頁)

第四項 豫算ニ依ラサル支出ヲ爲シ得ヘキ場合(緊急財政處分)

既ニ述ヘタル如ク歳入歳出ノ豫算ヲ定メ又豫算外國庫負擔契約ヲ爲サントスルニハ帝國議會ノ協贊ヲ經ルコトヲ要ス然レ共緊急ノ場合ニハ一々議會ノ協贊ヲ俟ツヲ得難キ場合アルヘシ茲ニ於テ乎憲法ハ公共ノ安全ヲ保持スル爲緊急ノ必要アル場合ニ於テ内外ノ情形ニ因リ政府ハ帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルト

キハ勅令ニ依リ財政上必要ノ處分ヲ爲スコトヲ得トノ旨ヲ定ム(憲法第七十條)是所謂緊急財政處分ナリ其條件左ノ如シ

(イ) 公共ノ安全ヲ保持スル爲ナルコト

公共ノ安全ヲ保持ストハ消極ノ目的ノ爲ニスルコトヲ意味シ積極的ニ公共ノ利益ヲ増進スル爲ニスルコトヲ許ササルノ義ナリ災害地ノ住民カ饑餓ニ瀕セル場合ニ於テ之ヲ救フカ爲ニ豫算外ノ支出ヲナスハ此條件ニ當ルモ物價ヲ騰貴セシメテ一部人民ノ利益ヲ増進セシムルハ積極ノ目的ノ爲ニスルモノナルカ故ニ緊急財政處分ノ範圍ニ屬セス

(ロ) 緊急ノ需用アル場合ナルコト

緊急ノ需用トハ公共ノ安全ヲ保持スルコトカ一日モ忽ニスルコト能ハサル情態ニアルコトヲ意味ス緊急財政處分ハ例外ナルカ故ニ緊急已ムコトヲ得サル場合ノ外ハ之ヲ行ハシメサルノ意ナリ

(ハ) 内外ノ情形ニ因リ帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルコト

憲法ハ帝國議會ヲ召集スルコトヲ得ル場合ニ於テハ緊急財政處分ヲ許サス蓋

シ議會ヲ召集スルコトヲ得ル以上之ヲ召集シテ追加豫算ノ協贊ヲ求ムルカ若クハ憲法第六十三條ノ形ニ於テ議會ノ協贊ヲ經ル餘地アレハナリ

(註)

帝國憲法第八條ニハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其災厄ヲ避クル爲ニ緊急ノ必要アル場合ニハ法律ニ代ルヘキ勅令ヲ發スルコトヲ得ルモノトセリ緊急ニ處スル規定タル點ニ於テ憲法第七十條ノ緊急財政處分ト精神ヲ同シウスルモノナリ然レ共憲法第八條ハ法律ニ代ル命令ナルカ故ニ法規ヲ制定スルコトヲ目的トスルモノニシテ唯特定事件ノ處理ヲ許シタルノミナリ而シテ此第七十條ノ勅令モ亦憲法第八條ノ勅令ト同シク樞密院ノ諮詢ヲ經ルコトヲ要スルモノニシテ其勅令ヲ公布スルニハ樞密院ノ諮詢ヲ經タル旨ヲ記載セサルヘカラス(公布式第七條第三項)

緊急財政處分ハ財政上ノ一變例ナリ政府カ財政ヲ爲スニハ必ス豫算ニ依ラサルヘカラサルヲ原則トスレトモ帝國議會ヲ召集スルコト能ハサル事情アリテ豫算ヲ編制スルコトヲ得サル場合ニ公安ヲ維持スル必要アレハ豫算ニ依ラスシテ適當ナル財政處分ヲ爲スコトヲ得ルモノトス斯カル場合ニモ尙豫算ニ依ラサレハ財政ヲ行フコト能ハストセハ國民ヲシテ如何ナル不幸ニ沈マシムルコトアルヤモ計リ難ケレハナリ而シテ此緊急財政處分ヲ行ヒタルトキハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ノ承諾ヲ求メサルヘカラス然レ共政府カ緊急ノ場合ニ勅令ニ依リテ財政上ノ必要處分ヲ爲スハ憲法ノ命スル所ニシテ不法ノ處分ニアラサルヲ以テ其外

部ニ對スル效果ハ毫モ議會ノ協贊ヲ經タル豫算ニ依リテ行フト異ナルコトナシ
議會ニ提出シテ其承諾ヲ得サルコトアリトスルモ既往ニ於ケル財政處分ノ效力
ニハ何等ノ影響ヲモ及ホササルモノトス

第五項 豫備費

以上述フルカ如ク緊急財政處分ハ最モ嚴重ナル條件ノ下ニ於テ初メテ之ヲ爲ス
コトヲ得ヘシ故ニ行政官タル者ハ豫算ノ範圍内ニ於テ經費ヲ支出シ豫算ニ定メ
タル目的ノ外ニ使用シ又ハ各款項ノ金額ヲ彼是流用スルヲ許サス然リト雖モ物
價ノ變動其他ノ事情ノ爲豫定ノ定額ニ不足ヲ生セシトキ又ハ豫算ニ掲載セサル
費目ヲ要スルコトアルヲ以テ我憲法ハ此等ノ場合ヲ豫想シ同法第六十九條ニ於
テ豫備費ヲ設クヘキコトヲ規定セリ而シテ此規定ハ單ニ豫備費ヲ豫算ニ設クヘ
キコトヲ命令スルノミニアラスシテ豫算外及豫算超過ノ支出ハ必ス此豫備費ヨ
リ支出スヘキコトヲ命シタルノ精神ナリ豫備費ハ總豫算ノ中ニ之ヲ掲ケ豫メ議
會ノ協贊ヲ經ルモノナリ而シテ豫備費ハ之ヲ第一豫備金ト第二豫備金トニ分ツ

第一豫備金ハ避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フモノトシ第二豫備金ハ豫算外ニ
生シタル必要ノ費用ニ充ツルモノトス(會計法第七條)豫備費ハ議會ノ協贊ヲ經タ
ルモノナルカ故ニ其中ヨリスル支出ハ政府自由ニ之ヲ爲スコトヲ得ルモノナレ
トモ如何ナル費用ニ支出セシカハ年度經過後ニアラサレハ之ヲ知ルコトヲ得ス
故ニ會計法第八條ニ於テハ豫備金ヲ以テ支出シタルモノハ年度經過後帝國議會
ニ提出シ其承諾ヲ求ムルコトヲ要スルモノトセリ(會計法第八條)

(註) 美濃部博士ハ豫備費ハ豫算トシテ議會ノ協贊ヲ經ルヘキモノニアラスト主張セラル而シテ其理由ハ(イ)豫備費ノ
支出カ豫算外ノ支出ナルコトヲ認メナカラ而カモ豫備金ハ豫算中ノ一部ナリト爲スハ矛盾ナリ(ロ)若シ議會カ豫
メ之ニ協贊シタルモノナリトセハ其支出カ事後ニ於テ其承諾ヲ要スヘキ理由ナシト論セラルモ(法學協會雜誌第
三三卷第六號)余ハ此說ニ反對ス

豫備金ハ大藏大臣之ヲ管理スルモノニシテ豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途及豫
備金ヲ以テ支辨スル費途ノ金額ハ他ノ費途ニ流用スルコトヲ得サルモノトス豫
備金支出ノ手續ハ會計規則第十六條乃至第二十四條ニ規定ス

(註) 豫備金支出ニ對シテ事後承諾ヲ與フルニ當リ議會ハ其案全體ニ對シテ諾否ヲ決スヘキモノナリヤ若クハ其中ノ各
第四編 統治權ノ作用 第一章 行政 會計 三三一

項ニ付キ諾否ヲ決スヘキモノナリヤ否ヤニ關シテハ解釋ニアリ

第一ハ其案全體ニ對シテ諾否ヲ決スヘキモノナリ故ニ若シ一件ニテモ承諾ヲ與フヘカラスト認ムル事項アルトキハ全部ニ向ツテ承諾ヲ與フヘキモノニアラスト謂フ解釋アリ

第二ハ其案中ノ各項ニ付キ諾否ヲ決スヘキモノナリ憲法第六十四條ノ明文ヨリ觀ルモ豫備金ノ支出ハ各項ニ付キテ承諾ヲ與フヘキ性質ノモノナリト謂フ解釋アリ

我國ニ於テハ從來第一ノ解釋ニヨリシモ明治三十八年第二ノ解釋ニ改メタリ

而シテ政府カ議會ニ對シ豫備金支出ノ事後承諾ヲ求ムルハ唯議會ヲシテ豫算超過ノ支出又ハ豫算外ノ支出ヲ可トスルカ不可トスルカノ意見ヲ述ヘシムルニ過キサルモノナルヲ以テ假令豫算超過ノ支出豫算外ノ支出ヲ不當ト認ムルモ單ニ不承諾ノ議決ヲ爲スノ他ニ責任ヲ負ハシムルノ規定ナシ從テ不承諾ノ決議ヲ爲ストモ豫備金支出力其效力ヲ失フニアラサルナリ(同說清水博士憲法篇一四三頁)

第六項 責任支出論

國家ノ歲出ハ豫算ニ遵據シテ之ヲ行フモノニシテ避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補ヒ又ハ豫算外ニ生シタル必要ノ經費ニ充ツル爲ニハ先ツ其爲特ニ設ケラレタル豫備費ニ依ルヘク之ニ依リ難キ一定ノ場合ニハ即チ追加豫算トシテ豫算ヲ編制スヘク更ニ何レニモ依リ難キ緊急ノ需用ニ對シテハ憲法第七十條ノ緊急財政

處分ヲ爲スノ方途ニ出ツルヲ其原則トス然レ共豫備費ニハ金額ニ於テ一定ノ限度アリ追加豫算ニハ議會ノ協贊ヲ經ルノ煩アリ緊急財政處分ニハ特ニ目的時期其他ニ付キ嚴格ナル制限アリ茲ニ於テ乎政府ハ明治二十四年以來引續キ其責任ヲ以テ歲計剩餘金ヲ支出シ財政ノ運用ヲ計リツツアリ之ヲ責任支出ト稱ス即チ責任支出トハ豫算超過若クハ豫算外ニ生シタル支出アルトキ豫備費ヲ以テスルモ尙不足アル場合ニ於テ政府カ追加豫算ノ方法ニモ依ラス又憲法第七十條ノ財政處分ニモ依ラスシテ漫然國家ノ剩餘金ヲ支出シ後日帝國議會ノ承諾ヲ求ムルモノヲ謂フ

責任支出(剩餘金支出)ハ憲法違反ナリヤ否ヤニ付テハ學者間頗ル議論多シ適憲論ヲ主張スル學者ハ曰ク憲法第六十四條第二項ニ「豫算ノ款項ニ超過シ又ハ豫算外ニ生シタル支出アルトキハ後日帝國議會ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス」トアルハ必スシモ憲法第六十九條ノ豫備費ノ支出ノミヲ指スモノニアラサルカ故ニ後日議會ノ承諾ヲ求ムルコトヲ條件トシテ責任支出ヲ爲スコトハ憲法違反ニアラスト(伊藤博文氏憲法義解一二六頁、穗積博士憲法提要八八二頁、美濃部博士大正四年六月法

學協會雜誌野村學士憲法大綱二三〇頁然レ共余ハ純理論トシテハ責任支出ハ明カニ憲法違反ナリト信ス何トナレハ憲法第六十四條第二項ノ規定ハ責任支出ノ權ヲ政府ニ與フルモノニアラスト信ス豫算超過又ハ豫算外ノ支出ニ付テハ憲法第六十九條ニ定ムル豫備費ヨリ之ヲ支出スヘキモノニシテ若シ豫備費ニシテ盡クレハ臨時議會ヲ召集スルカ又ハ憲法第七十條ノ緊急財政處分ニ依ルノ外ナシ憲法第六十四條第二項ハ憲法第六十九條ノ豫備費ヨリ支出セルモノニ付テ後日議會ノ承諾ヲ求ムルコトヲ規定シタルニ過キサレハナリ(同說市村博士帝國憲法論九六三頁佐々木博士京都法學會雜誌大正四年七月號清水博士法學新報大正四年七月號同博士著憲法篇一四二八頁尙會計法第二十條ニモ「各年度ニ於テ歲計ニ剩餘アルトキハ其翌年度ノ歲入ニ繰入ルヘシ」トアリ故ニ剩餘金ヲ直ニ支出ノ財源トスルハ會計法モ亦認メサル所ナリ

然レ共政治ノ實際ニ付テ觀ルトキハ國家ノ財政ハ豫算ナキノ故ヲ以テ一日モ之ヲ忽ニスヘカラス備豫費追加豫算及緊急財政處分ノ制度ノミニテハ未タ以テ總テノ場合ニ於ケル財政ノ運用ヲ完全ナラシムル所以ニアラス故ニ政府カ責任ヲ

以テ剩餘金ヲ豫算外又ハ豫算超過ノ支出ニ充當スルコトハ國民ニ直接ノ負擔ヲ加フルモノニアラサルヲ以テ實際上止ムヲ得サルコトナルト信ス

第七項 豫算ノ效力

抑モ豫算ノ制定ニ付キ議會ノ協贊ヲ必要トスル所以ハ支出ノ濫費ヲ伴フ苛政ヲ防止セントスルニアリ我國ニ於テハ普魯西ノ例ニ倣ヒ歲出ヲ以テ豫算ノ要點トシ其結果トシテ歲入ニ關シテハ全ク豫算ニ拘束セララルコトナシ即チ憲法第六十二條ハ租稅及稅率ニ關スルコトハ法律ヲ以テ定ムヘキモノトセルヲ以テ法律ノ存在スル限リハ豫算ノ如何ニ拘ハラス其法律ニ從テ租稅ヲ徵收スルコトヲ得租稅ノ外手數料使用料國債官業收入官有財產收入罰金科料官有物拂下代金又ハ其他ノ雜收入等何レモ法律命令ノ命スル儘ニ豫算ノ有無ニ拘ハラス之ニ從テ收入ヲナシ得ルモノナリ假令豫算ノ成立セサル場合ニ於テモ行政官廳ハ租稅其他ノ收納ヲナシ得ルモノニシテ其實額カ豫算ニ超過スルモ又之ニ反シテ不足スルモ何等ノ責任ナシ之ニ反シテ歲出ニ於テハ行政官廳ニ對シテ拘束力ヲ有ス即チ

- (1) 豫算超過ノ支出又ハ豫算外ノ支出ハ之ヲナスコトヲ得ス若シ已ムヲ得サル場合ニハ豫備費ヲ以テシ尙不足ナルトキハ追加豫算ヲ編制スルカ又ハ憲法第七十條ニ依リ勅令ヲ以テ緊急財政處分ヲナスノ外全ク支出ノ方法ナシ
- (2) 豫算ニ定メタル目的以外ノ支出ヲナスコトヲ得ス從テ豫算ノ款項ヲ彼此流用スルコトヲ得ス
- (3) 豫算ハ其年度ノ支出ヲ定メタルモノナルヲ以テ其金額ハ之ヲ前年度若クハ翌年度ノ支出ニ充當スルコトヲ得サルヲ原則トス
行政官廳ハ國家ノ財政事務ヲ處理スルニ當リ右ノ諸點ニ於テ豫算ニ拘束セラルルモノナルモ豫算ニ定メタル金額ハ必ス之ヲ支出セサルヘカラサルノ義務ヲ負フモノニアラス故ニ豫算記載ノ支出金額ニ剩餘ヲ生セシムルハ毫モ支障ナキノミナラス其支出金額ノ見積アル事業ヲ全然爲ササルモ妨ケナシ支出ハ豫算ニ從ヒテ爲ササルヘカラサルノ義務アルモ豫算ノ支出ハ之ヲ爲ササルヘカラサルノ義務ナキナリラバンド氏カ政府ハ豫算ニ依リ決シテ支出ノ義務ヲ課セラルルコトナシト言ヒタルハ蓋シ其當ヲ得タルモノト謂フヘシ

第八項 豫算不成立ノ場合

豫算ハ議會ノ議定ヲ經裁可ニ依リテ成立スルモノナルヲ以テ帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラサルトキ若クハ裁可ナキトキハ豫算ハ成立セス故ニ憲法ハ此權ノ場合ヲ豫想シ豫算不成立ノトキハ政府ハ前年度ノ豫算ヲ施行スルコトトセリ(憲法第七十一條)故ニ我國ノ現行制度ハ瑞西西班牙等ノ諸國ト相似タリ而シテ如何ナル場合ニ豫算ノ不成立ヲ來タスカ其原因ヲ列擧スレハ左ノ如シ

- (イ) 議會カ召集ニ應セザリシトキ
- (ロ) 議會ニ於テ議了スルニ至ラスシテ會期ヲ終リシトキ
- (ハ) 議了スルニ至ラスシテ衆議院カ解散ヲ命セラレタルトキ
- (ニ) 議會カ政府ノ提出シタル豫算案ヲ否決シタルトキ
- (ホ) 貴衆兩院ノ決議カ一致セザリシトキ
- (ヘ) 天皇ノ裁可ナカリシトキ

(ト) 憲法第六十七條ノ支出ニ付キ議會ノ廢除削減ノ決議ニ對シテ政府ノ同意
 ナク議會モ亦議決ヲ改メサリシトキ
 豫算ノ不成立ハ以上列舉シタルカ如キ種々ノ原因ニ因リテ生スルモ其最モ多キ
 ハ議會解散ニ依リ豫算ノ確定ヲ見ルニ至ラサル場合トス

(註) 豫算不成立ノ場合ニ於テ前年度ノ臨時費ハ之ヲ本年度ニ於テ支出スルコトヲ得ルヤ 或學者ハ臨時費ハ全額之ヲ
 支出スルコトヲ得スト主張ス然レ共余ハ此說ニ反對ス何トナレハハツセン憲法第六十九條ノ如ク「豫算成立セサ
 ルトキハ臨時ノ經費及既ニ其目的ヲ達シタル經費ヲ除キ六ヶ月間ハ前年度ノ豫算ヲ施行スルコトヲ得」トノ規定
 アル國ニ於テハ之ヲ支出スルコトヲ得サルハ勿論ナレ共我國ニ於テハ斯ノ如キ制限ナキニヨリ前年度ノ臨時費モ
 本年度ニ於テ支出スルコトヲ妨ケサルナリ併シナカラ豫算ハ其目的ニ反シテ支出スルコトヲ得サルニヨリ實際上
 ノ問題トシテハ前年度ノ臨時費ニシテ本年度ニ支出スルコトヲ得ルモノハ甚タ少ナキコトトナル(同說清水博士
 憲法篇一四四三頁、副島博士日本帝國憲法論六四五頁)

豫算不成立ノ場合ニ前年度ノ豫算ヲ施行スヘキ明文ヲ設ケタルハ外國ニ於テ議
 會ト政府ト衝突ノ結果豫算不成立ニ終リタル際ニ處スル規定ヲ設ケサリシ爲國
 務ノ施行ニ付キ政府カ甚シキ困難ニ陥リタルノ例ニ鑑ミ規定ヲ設ケタルモノナ
 リ斯ノ如キ規定ハ瑞典憲法第九條第三項ニモ之ヲ見ル但シ稀ナル例外ニ屬ス

第九項 豫算ノ施行

豫算案カ議會ノ決議ヲ經タルトキハ政府ハ上奏裁可ヲ得テ茲ニ豫算トシテ公布
 セラレ政府ハ此公布豫算ニ依リテ新年度ノ計畫ヲ實行ス其豫算施行ノ手續ハ大
 略左ノ如シ

各省大臣即チ支出官ハ中央及地方ニアル委任支出官ニ對シ支拂豫算ヲ達示ス此
 支拂豫算ノ内容ハ款項ニ區分ス又之ニ支拂豫算明細書ヲ添付ス此明細書ハ主ト
 シテ目節ヲ示シ委任支出官ハ之ニ依リテ初メテ各目ノ支拂命令ヲ發シ得ル費目
 金額ヲ知ルヲ得

又各省大臣ハ委任支出官ニ令示シタル支拂豫算ノ謄寫ヲ大藏大臣及會計検査院
 長ニ送付ス大藏大臣ハ更ニ之ヲ日本銀行ニ轉送シ日本銀行ハ一々各委任支出官
 ノ出納區域ニ該當スル日本銀行支店若クハ代理店ニ其寫ヲ送付シ同時ニ新年度
 ニ對スル支拂準備金ヲ各支店又ハ代理店ニ送達ス會計検査院長カ各省大臣ヨリ
 受取リタル支拂豫算ノ謄寫ハ他日支出計算書等ヲ調査監督スル材料トス

支拂豫算ノ達示ヲ受ケタル各委任支出官ハ之ニ基キテ之ニ關スル帳簿書類ヲ準備シ支拂請求者ノ要求ニ應シテ支拂命令ヲ發スル用意ヲ爲シ日本銀行本支店若クハ代理店ハ現金帳簿ヲ備ヘテ何時ニテモ支拂命令ニ對シ現金ヲ支拂フ準備ヲ爲ス

第十項 決算

決算トハ豫算ニ對スル實際ノ收支ノ結果ニシテ豫算ト相俟ツテ財政整理上極メテ重要ナリ議會ノ豫算議定カ如何ニ注意周到ナルモ豫算ハ豫定ノ計畫ニ過キス豫定ノ計畫ハ必スシモ豫定通りニ進行スルモノニアラス故ニ豫算ヲ以テ政府ノ濫費ヲ防止スルト共ニ其決算ヲ審査スルコトハ財政監督上最モ緊要ナルコトナリ故ニ帝國憲法ハ議會ニ對シテ決算審査權ヲ行フ
決算ヲ調制スルモノハ大藏大臣ニシテ翌年度十月末ニ大藏省ニ備ヘタル歲入歲出主計簿ヲ締切リ各省大臣亦翌年度十一月マテニ其經費ノ決算報告書ヲ調制シテ之ヲ大藏大臣ニ送付ス

大藏大臣ハ之ニヨリ通常翌々年度七八月頃マテニ決算ヲ調制シ閣議ニ提出シ九月頃之ヲ會計検査院ニ送付ス會計検査院ハ其検査確定ノ後報告書ヲ作成ス政府ハ検査院ノ検査報告ト共ニ其翌年二月頃之ヲ帝國議會ニ提出スルヲ常トス議會ハ之カ提出ヲ受ケタルトキハ衆議院貴族院各別ニ決算委員ニ附託シ委員會ハ會計検査院ノ検査報告ト國務大臣及政府委員ノ説明トニヨリ之ヲ審査シ其結果ヲ本會議ニ報告ス本會議ニ於テ決算ニ不法不正ノ點ヲ發見スルトキハ國務大臣ノ責任ヲ問フ爲上奏シ又ハ決議案ヲ提出シテ議會ノ意思ヲ明カニス
然レ共議會ノ意見ハ過去ノ財政ニ對スル批判ニシテ收支ノ法律上ノ效果ニ影響ヲ與フルモノニアラサルハ勿論ナリ決算ニ對シテハ斯ク二重ノ審査權ヲ認メタリ即チ政府ハ第一ニ會計検査院ノ審査ヲ受ケ第二ニ帝國議會ノ審査ヲ受ケサルヘカラス斯ノ如ク決算ニ二重ノ審査權ヲ認メタルハ動モスレハ錯誤ニ陥リ易キ會計検査ノ正確ヲ期シ財政ノ監督ヲ嚴重ナラシメンカ爲ナリ

(註) 憲法第七十二條ニハ唯「之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ」トアルノミナルヲ以テ政府ハ唯検査報告ヲ議會ニ提出スルノミニテ可ナリ議會ハ之ヲ審査スル權ナシト説ク者アリ然レ共此ハ餘リニ字義ニ因ハレタル解釋ナリト信ス憲法ニ

ハ論者ノ主張スル如ク唯帝國議會ニ提出スヘシトアリテ議會ノ承諾ヲ求ムヘシトハ規定セス然レ共其意味ハ決シテ單ニ議會ニ報告セヨト謂フノミニアラス議會ノ審査ニ付シ其承諾ヲ求ムヘキモノナリ若シ然ラストセハ憲法ハ實質上ノ效力ナキ提出ヲ規定シタルモノト謂ハサルヲ得サレハナリ(同說美濃部博士憲法講話縮刷二六七頁、副島博士日本帝國憲法論六四七頁)

第二章 立法

第一節 立法權ノ意義

立法權トハ法律ナル形式ヲ備ヘタル法規ヲ制定スル權力ニシテ議會ノ協贊ヲ經テ君主之ヲ行フ統治權ノ一種ナリ
故ニ立法權ハ獨立シタル特種ノ權力ニアラスシテ統治權ノ一ノ作用タルニ過キス又君主カ立法權ヲ行使スルニハ必ス議會ノ協贊ヲ要スルカ故ニ憲法第三十七條(立法ハ一見恰カモ君主ト議會トノ合意ナルカ如キモ決シテ然ラス合意ハ私法上平等關係ニ於ケル意思ノ合致ヲ謂フモノニシテ此觀念ヲ以テ君主ト議會トノ公法的權力關係ヲ説明スルヲ得ス君主カ立法權ヲ行使スルニ當リ議會ノ協贊ヲ經ルハ君主カ統治機關タル議會ノ意見ヲ聞キ其議決ヲ嘉納シテ立法スルモノニ

シテ君主カ議會ト對等ノ地位ニ立チ協同シテ立法スルモノニアラサルナリ
故ニ議會カ立法ニ參與ストハ其法律案ニ對スル可否ノ意思ヲ表白スルノ意ナリ然レ共議會ノ表白シタル意思ヲ君主カ嘉納スルト否トハ君主ノ自由權内ニアルカ故ニ議會ノ參與ハ君主ヲ強制スルノ力ナシ唯議會ノ參與ハ立法上ノ必要條件タルニ過キサルノミ故ニ君主ト雖モ議會ノ協贊ヲ經スシテ立法スルヲ得サルハ言フ迄モナシ

第二節 法律事項

之ヲ定ムルニ必ス法律ヲ以テスヘキ旨ヲ憲法ニ於テ定メタル事項ハ之ヲ憲法上ノ立法事項ト謂フ他ノ形式ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得サルナリ而シテ憲法上ノ立法事項ニ屬スルモノヲ列舉スレハ左ノ如シ

- 一 戒嚴ノ要件及效力(第十四條)
- 二 臣民タルノ要件(第十八條)
- 三 兵役ノ義務(第二十條)

- 四 納税ノ義務(第二十一條)
- 五 居住移轉ノ自由(第二十二條)
- 六 逮捕監禁審問處罰ニ關スル自由(第二十三條)
- 七 住所ノ自由(第二十五條)
- 八 信書ノ祕密(第二十六條)
- 九 所有權ノ自由(第二十七條)
- 十 言論著作印行集會結社ノ自由(第二十九條)
- 十一 衆議院議員選舉法(第三十五條)
- 十二 議院法(第五十一條)
- 十三 司法裁判ノ手續(第五十七條第一項)
- 十四 裁判所ノ構成(第五十七條第二項)
- 十五 裁判官タルノ資格(第五十八條第一項)
- 十六 裁判官ノ懲戒ノ條規(第五十八條第三項)
- 十七 裁判ノ公開ヲ停ムル或場合(第五十九條)

- 十八 特別裁判所ノ官轄(第六十條)
- 十九 行政裁判所ノ組織權限(第六十一條)
- 二十 租税ノ賦課及税率ノ變更(第六十二條)
- 二十一 會計検査院ノ組織及職權(第七十三條)

第三節 法律ノ制定及消滅

法律ノ制定セラレテ效力ヲ有スルニ至ル迄ノ手續ニハ種々ノ楷梯アリ法律案ノ提出、議定、裁可及法律ノ公布是ナリ而シテ公布ニ依リ法ハ當然效力ヲ生スルニアラス一定ノ施行期間ヲ經過シタルトキヨリ其效力ヲ生ス今之ヲ分說セン

第一 法律ノ制定

(一) 法律案ノ提出

法律案ノ提出トハ帝國議會ノ議決ニ付セシムルカ爲法律ノ案文ヲ議會ニ提出スルヲ謂フ

我國ノ憲法ニ依レハ法律案ノ提出權ハ政府及貴衆兩院之ヲ有ス(憲法第三十

八條政府ノ發案ハ通常主務省ニ於テ立案起草シ法制局ノ審査ヲ受ケ内閣閣議ノ議決ヲ經タル後勅裁ヲ仰キ内閣總理大臣ヨリ之ヲ兩院ノ一ニ提出スルモノトス

貴衆兩院ノ一ヨリ提出スル場合ニハ先ツ其院ニ於テ可決シタル後他ノ院ニ廻付スルモノトス其院ノ議題トスルニハ二十名以上ノ贊成者アルコトヲ要ス(議院法第二十九條)然レ共政府ノ發案ト兩院ノ發案トノ間ニ一ノ差異アリ即チ政府及貴衆兩院ハ法律ノ發案ヲ爲スニ付キ憲法第三十九條ノ制限ヲ受クルコトハ共ニ一ナリト雖モ政府ハ一旦發案シタル議案ヲ他院ニ廻付セラレサル間ハ何時ニテモ修正シ又ハ撤回シ得ルニ拘ハラズ貴衆兩院ハ一旦發案シタル以上ハ自由ニ之ヲ修正又ハ撤回スルコトヲ得サルモノナリ

(註) 一院ニ於テ議決シ他院ニ廻付セラレタル後ニ於テモ政府ハ修正又ハ撤回シ得ヘキヤ否ヤニ付テハ學者間議論アリト雖モ一院ニ於テ既ニ議決シ他院ニ廻付セラレタル以上ハ最早政府ノ提出案ハ形ヲ變シタルモノニシテ之カ撤回修正ヲナスカ如キハ其議決ヲ無意義ナラシムルノ結果ヲ生スヘク撤回修正ノ超旨ヲ超越スルモノト謂ハサルヘカラス加フルニ議院法第三十條ノ規定ヲ觀ルモ政府ノ提出シタル議案ヲ云々トアリ而カモ提出ハ議會ノ一院ニ對シ爲アルモノナレハ他院ニ廻付後ニ於ケル撤回修正ハ同條ノ認メサル所ト解セサルヘカラス

尙發案ニ關シテハ政府ハ同時ニ同一ノ法律案ヲ兩議院ニ提出スルコトヲ得ルモノナリヤ否ヤノ疑問アリト雖モ斯ノ如キコトハ爲シ得サルモノト斷定スヘキモノナリ若シ之ヲ許ストセハ一院ニ於テ否決シタルニモ拘ハラズ尙他院ニ於テ審理ヲ繼續スルカ如キ議事ノ進行上不當ナル結果ヲ生スレハナリ

二院制ノ目的カ一院ニテ議決シタルモノヲ更ニ他院ニ於テ議決シ議事ヲ慎重ナラシムル點ヨリ觀ルモ同時ニ兩院ニ提出スルハ正當ニアラス加之議院法第五十三條ニ「豫算ヲ除ク外政府ノ議案ヲ付スルハ兩議院ノ内何レヲ先ニスルモ便宜ニ依ル」トノ規定アルヨリ觀ルモ明カナリ即チ法律案ハ必ス何レカノ一院ヲ選ンテ提出セサルヘカラスシテ同時ニ兩院ニ提出シ得サルコトヲ間接ニ表示シタルモノト解釋シ得ヘシ(同說清水博士憲法篇一三〇〇頁)兩院ノ一ニ於テ一旦否決セラレタル法律案ハ同會期中再ヒ提出スルコトヲ許サス(憲法第三十九條)兩院制度ヲ採用セル我國ニ於テハ貴衆兩院ノ一カ議案ヲ否決スレハ他カ之ヲ可決スルモ法律トシテ成立スルコトナシ故ニ一院ニ

テ否決シタル議案ヲ再議スルハ徒ニ議事ノ進行ヲ妨ケ種々ノ弊害ヲ生スルヲ以テ再議ヲ禁シ議院ノ議決ヲ尊重セシメタリ

議會カ可決シタル後未タ天皇ノ裁可ナキ法律案ヲ再ヒ同一會期中ニ提出スルコトヲ得ルヤ否ヤニ關シテハ異論ナキニアラス或學者バ憲法第三十九條ハ否決シタル議案ヲ同一會期中ニ於テ提出スルコトヲ禁シタルモノニシテ可決シタル議案ヲ再ヒ提出スルコトヲ禁シタルモノニアラサルヲ以テ之ヲ再議スルモ不當ニアラスト主張ス然レ共余ハ此說ハ徒ニ字義ニ拘泥スル愚論ナリト信ス何トナレハ未タ裁可ナキ議案ハ決シテ消滅シタルモノニアラス前案ノ消滅セサルニ同一ノ法律案ヲ同一會期中ニ議スルカ如キハ不合理ナリ故ニ憲法第三十九條ニ反スルモノニアラサレトモ之ヲ否決スヘキモノト信ス

(二) 法律案ノ協贊

法律案ノ協贊トハ提出セラレタル法律案ヲ審議シ其内容ヲ確定シ之カ制定ニ同意スル帝國議會ノ意思表示ナリ協贊ハ性質ニ於テ同意タルニ止マリ法

律自體ヲ制定スルモノニアラスト雖モ制定セラルヘキ法律ノ内容ハ之ニ依リ確定スルモノニシテ天皇ト雖モ議決ヲ經タル法律案ノ内容ヲ變更シテ裁可シ又ハ其一部ヲ取捨シテ裁可シ得ヘキニアラス

法律案ノ審査議定ハ貴衆兩院ノ職權ナリ兩院ニ於テ各三讀會ヲ經其議決相一致スルニ依リテ提案ノ採否ヲ決ス(佛、白、和、西班牙、葡萄牙ハ二讀會制ヲ採用ス)法律案ハ議員三分ノ一以上出席シ其過半數ヲ以テ之ヲ決ス

(註) 茲ニ問題トナルハ政府提案ニ付キ甲院ニ於テ修正議決ヲ爲シタル場合其廻付ヲ受ケタル乙院ハ該修正案ヲ原案トシテ論議スヘキヤ又ハ政府ノ提出シタルモノヲ原案トシテ論議スヘキヤノ點ナレ共余ハ前說ニ贊同ス蓋シ政府ノ提出ハ甲院ニナサレタルモノニシテ乙院カ廻付ヲ受ケル場合ニハ最早ヤ該案ハ甲院ノ意思ニ依リ變更セラレ居ルモノニシテ議院法第五十三條及第五十四條ノ趣旨ヨリ觀ルモ斯ク解スルヲ妥當ナリト信ス勿論各院ノ議決ハ全ク自由ナレハ乙院ニ於テ甲院ヨリ修正廻付セラレタル議案ヲ更ニ修正シテ政府提案ノ如ク復活セシムルカ如キハ乙院ノ修正權ノ範圍内ニ屬スルモノニシテ固ヨリ違法ニアラサレハ言フ俟タス

第一讀會(質問)

第一讀會ハ議案ヲ各議員ニ配付シタル後少ナク共二日ヲ經テ之ヲ開クヘシ但シ緊急ノ事件ニ付テハ此限ニアラス

第一讀會ニ於テ議案ヲ朗讀シタル後國務大臣政府委員又ハ發議者ハ趣旨ヲ辯明スルコトヲ得ヘシ但シ議長ハ便宜朗讀ヲ省略セシムルコトヲ得第一讀會ヲ經タル政府提出議案又ハ他院提出議案ハ之ヲ委員ニ附託ス議院ハ委員ノ報告ヲ待ツテ其法律案全體ニ付テ其可否ヲ審議ス若シ可決セラレタルトキハ第二讀會ニ付スルコトトナリ否決セラレタルトキハ廢案トナル

第二讀會(逐條審議)

法律案ニ付テ逐條朗讀シテ審議ヲ爲ス即チ原案ノ條項ノ可否ヲ決シ或ハ修正加除ヲ爲ス

第二讀會ハ第一讀會ヲ經タル後少ナクトモ二日ヲ經テ之ヲ開クヘシ但シ議長ハ議院ニ諮ヒ時日ヲ短縮シ又ハ第一讀會ト同日ニ之ヲ開クコトヲ得

第三讀會(通覽)

第二讀會ニ於テ議決シタル法律案全體ニ付テノ可否ヲ審議ス而シテ之ヲ否決シタルトキハ廢案トナリ可決シタルトキハ其院ノ議決ヲ經タルモノ

トス第二讀會ヨリ第三讀會ニ移ル期日等ノ關係ハ第一讀會第二讀會ノ其ト同シ

但シ政府ノ要求若クハ議員十人以上ノ要求ニヨリ議院ニ於テ出席議員三分ノ二以上ノ多數ヲ以テ可決シタルトキハ讀會ヲ省略スルコトヲ得(議院法第二十七條乃至第三十二條)

議事日程ハ政府ヨリ提出シタル議案ヲ先ニスヘシ但シ他ノ議事緊急ノ場合ニ於テ政府ノ同意ヲ得タルトキハ此限リニアラス
總テ議案ハ最後ニ議決シタル議院ノ議長ヨリ國務大臣ヲ經由シテ之ヲ奏上スヘシ

只茲ニ注意ヲ要スルハ議會ノ議決ノ效果カ君主國ト民主國トニ依リテ異ナルコトナリ君主國ニ於テハ單ニ法律案ノ實質ノ確定ニ過キス君主ノ裁可ナケレハ國民ヲ拘束スル力ヲ生スルモノニアラス然ルニ民主國ニ於テハ議會ノ議決ニ依リテ法律其モノノ完成トナル言フ迄モナク民主國ハ國民ヲ以テ統治權ノ主體トスルモノニシテ國民ヲ代表スルモノハ議會ナレ

ハ議會ノ決議ニ依リテ法律ハ完成スレハナリ佛國及北米合衆國ノ大統領
ハ一旦議決シタル法律案ニ對シ再議ヲ求ムルコトヲ得レトモ再議請求權
ハ君主ノ裁可ト性質ヲ異ニスルハ言フ迄モナシ

(三) 裁可

兩院ニ於テ議決セラレタル法律案カ法律トシテ實質上ノ效力ヲ生スルニハ
更ニ天皇ノ裁可ヲ經サルヘカラス
裁可トハ天皇カ議會ノ議定ヲ經タル法律案ヲ嘉納シテ之ヲ法律ト爲スノ意
思ヲ表示シ給フノ謂ナリ裁可ノ手續ハ帝國議會ノ議決ニ依リ決定シタル法
律案ノ原本ヲ作り之ニ前文ヲ加ヘテ淨書シ上奏ヲ爲シタル場合ニ於テ裁可
スヘキモノト認メラルルトキハ天皇御名ヲ親署シ給ヒ内大臣御璽ヲ鈐シ内
閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署シ又ハ他ノ國務大臣若クハ主任ノ國務
大臣ト共ニ副署スルモノトス勿論天皇ハ議會ノ議定シタル法律案ニ拘束セ
ラルルモノニアラサレハ之ヲ裁可スルト否トハ天皇ノ自由タルコト前述セ
ル如シ

而シテ兩院ノ議決ヲ經テ奏上シタル法律案ヲ天皇カ裁可セララルノ御意思
アルトキハ次ノ會期迄ニ公布セラルヘシ(議院法第三十二條)從テ次ノ會期迄
ニ公布ナキトキハ裁可ノ御意思ナキモノト知ルヘシ

(註一) 憲法第六條ニハ法律ヲ裁可シトアリ故ニ一見裁可前法律案カ法律トナレルカ如キ觀アルモ同條ニ法律トアルハ
即チ法律案ト解スヘキモノニシテ致テ裁可前法律ノ成立アルコトヲ前提トスルノ趣旨ニハアラス要スルニ法文ノ
缺點ト謂ハサルヘカラス

(註二) 天皇ハ法律案ヲ裁可シテ未タ公布セサル前ニ裁可ノ非ナルコトヲ悟リシトキハ隨意ニ之ヲ取消スコトヲ得ルヤ
此問題ニ對シテハ積極消極ノ二說アリ積極說ヲ主張スル學者ハ「公布前ニハ法律ハ未タ羈束力ヲ生セサルヲ以テ
之ヲ取消スコトヲ得」ト論ス(アンシユツツ氏、ゲ、マイヤー氏、シユルツエー氏)然レ共余ハ此說ニ反對ス何ト
ナレハ前述セル如ク法律ハ裁可ニヨリテ成立スルモノナルニヨリ天皇ハ一旦裁可ヲ與ヘタル以上ハ之ヲ取消スコ
トヲ得ス若シ之ヲ取消サンストキハ必ス法律變更ノ手續ニ依ラサルヘカラスト信スレハナリ(同說清水博士
憲法論一三三頁、副島博士日本帝國憲法論三五三頁、市村博士帝國憲法論七六一頁)

(註三) 法律ノ前詞ハ協贊ヲ要スルヤ否ヤ法律ノ前詞トハ法律ノ前ニアル「朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル何々法律ヲ裁可
シ茲ニ之ヲ公布セシム」トアルカ如キモノナリ法律ノ前詞ハ法律ノ一部ナリヤ若シ法律ノ一部ナリトセハ必ス議
會ノ協贊ヲ經サルヘカラス副島博士ハ法律ノ前詞ヲ以テ法律ノ一部ナリトシ議會ノ協贊ヲ要スト主張セラル(日
本帝國憲法論三七〇頁)然レ共余ハ此說ニ反對ス何トナレハ博士ノ說ハ憲法ノ明文ニ反スルヲ以テナリ我帝國憲
法第六條ニ依レハ法律ノ裁可及公布ノ命令ハ天皇ノ憲法上ノ大權ニ屬スルカ故ニ之ニ對シテ議會ノ協贊ヲ求ムヘ

キ理由ナケレハナリ此故ニ法律ノ前詞ニシテ單ニ「朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル何々法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム」ト云フカ如ク專ラ天皇ノ大權ノ行使ニ關スルモノナルトキハ必スシモ議會ノ協贊ヲ要スヘキモノニアラスト信ス然レ共之ニ反シ法律ノ前詞ニ於テ該法律ノ施行期ヲ定ムルカ又ハ解釋ヲ爲スカ如キ法規命令ヲ包含スル場合ニ於テハ必ス議會ノ協贊ヲ經サルヘカラス從來斯ノ如キ前詞ヲ加ヘタル例ハナキモ將來若シ斯ノ如キ前詞ヲ置ク場合アリトモハ必ス議會ノ協贊ヲ經ヘキモノナリト信ス(同說市村博士帝國憲法論七五八頁)

(註四) 君主ノ裁可權ニ關スル諸外國ノ立法例ハ等シカラス英、米、佛、諸國等ノ諸國ニ於テハ君主又ハ大統領ニ法律ノ裁可權ナク唯之ヲ拒否スル權ヲ有スルノミナリ而カモ其拒否權モ殆ント有名無實ノ觀ヲ呈シ英國ノ如キハ前後二百年間ニ未タ一回モ之ヲ行使シタルコトナク諸國ニテハ唯二回之ヲ行使シタルノミニ過キサリナリ米、佛ニ於テハ大統領カ法律ノ公布ヲ拒否シタルトキニハ議會ニ再議ヲ求ムル例ナレトモ議會ニ於テ再ヒ之ヲ決議シタルトキニハ必ス公布セサルヘカラサルモノトス

(四) 公布

憲法第六條ニ依リ法律ノ公布ヲ命スルハ天皇ニシテ其公布トハ既ニ完成シタル法律ノ施行ノ要件ト爲ルモノナリ即チ公布セラレサルトキハ完成シタル法律モ實際ニ施行セラルルコトナキナリ然ルニ若シ法律ハ裁可ニ依リテ成ルモノナリト論スル者アラハ是大ナル誤リナリ
公布ハ單ニ執行上ノ要件ニ止マリテ法律ノ成立上ノ要件ニアラス從テ其結

果トシテ公布ニ誤リアリタルトキハ裁可ノ原文ニ依リテ之ヲ訂正シ得ルモノニシテ法律ノ改正ヲ必要トスルモノニアラサルナリ蓋シ公布ニ依リテ法律完成スルニアラサレハナリ(同說エリネツク氏法律命令論三一九頁、三二八頁)シユルツエー氏(普國國法論第二卷一七二號)一木博士(法令豫算論一一五頁、一二二頁)伊藤博文(憲法義解九頁)穗積博士(憲法提要八三九頁—八四六頁)美濃部博士(憲法講話二二七頁)清水博士(憲法篇六〇七頁)同博士(法學協會雜誌第二卷第二號一六八頁)市村博士(憲法要論五九五頁)同博士(行政法原理六五頁)同博士(帝國憲法論七四三頁)副島博士(日本帝國憲法論三五三頁)鶴澤博士(法學通論三四〇頁)上杉博士(法學協會雜誌第二卷第三號)吾人ノ說ニ反對シテ法律ハ公布ヲ以テ完成スルモノニシテ裁可ニ依リテ完成スルモノニアラスト説明セラル然レ共此說ノ誤レルハ前述ノ如シ
而シテ公布ノ方法ハ憲法上制限ナキニ依リ如何ニ定ムルモ自由ナリト雖モ我現行法ノ制度ハ多數ノ國ニ倣ヒ官報ニ掲載スルヲ以テ公布ノ式ト爲ス公布ノ時期ニ付テハ前述セル如ク議院法第三十二條ニ明文アリ即チ「兩議院

ノ議決ヲ經テ奏上シタル議案ニシテ裁可セララルルモノハ次ノ會期迄ニ公布セララルヘシト從テ公布ハ次ノ議會カ通常會タルト臨時會タルトヲ問ハス開會セララルル迄ニ公布セララルルヲ要シ此時期迄ニ裁可公布セララレサレハ議會ノ協賛ハ最早其效力ヲ失フモノト觀ルヘキナリ次ニ公布ノ日ハ現實ニ官報ニ掲載セララレタル日ヲ指スモノト謂フヘク天皇カ公布ヲ命セラレタル日又ハ官報ニ記載セラレタル日附ヲ指スモノニアラス

第二 法律ノ消滅

法律ノ消滅原因ハ分ツテ二トナス一ハ法ノ廢止ニシテ即チ其效力ヲ絶對的ニ失ハシムル場合ヲ謂ヒ他ハ法ノ變更ニシテ即チ新法ヲ制定シテ舊法ノ一部又ハ全部ヲ消滅セシムル場合ナリ

- (イ) 直接ニ消滅ヲ明示スル場合 例ヘハ何々法律ハ昭和何年何月何日ヲ以テ之ヲ廢止スルト規定セル場合ノ如シ
- (ロ) 效力ヲ有スヘキ期限ニ定メアルトキ其期限ノ到來シタル場合 有効期限ヲ定メタルトキハ其期限ノ到來ニ因リテ當然其效力ヲ失フ

- (ハ) 同一事項ニ付キ新法實施セラレタル場合 此場合ハ假令明文ヲ設ケスト雖モ當然舊法ハ消滅ス何トナレハ新法ハ舊法ニ優ルヘキヲ以テナリ
- (ニ) 規定ノ目的タル事項カ絶對ニ消滅シタル場合 例ヘハ戰爭ニ關スル法律ノ如キハ其最モ著シキモノナリ
- (ホ) 經過法ノ場合 即チ新法ト舊法トノ關係ヲ調和スル爲制定セラレタル法ハ新法ノ實施ト同時ニ當然消滅スルモノトス

第三 法律ノ效力

法律ノ效力トハ即チ國法ノ拘束力ヲ謂フ國法ハ如何ナル時如何ナル處如何ナル人ニ對シテ拘束力ヲ有スヘキカ其適用セララルヘキ範圍ヲ明確ニスルノ必要アリ

- (一) 時ニ關スル法ノ效力
 - 時ニ關スル法ノ效力ニ付テハ主要ナル二個ノ原則アリ
 - (甲) 法ハ實施ノ日ヨリ效力ヲ生ス
 - 法ハ議定ニ依リテ其實質確定シ裁可ニ依テ完成シ公布ニ依リテ拘束力ヲ

發スルモノナリト雖モ元ト之ヲ公布スルハ臣民ニ知ラシメントスルノ目的ニ出テタルモノニシテ公布ノ即日ヨリ之ヲ行ハントスルカ如キハ臣民ヲ陷ルルノ虞レナキニアラス故ニ通常一定ノ施行期間ヲ設ケ其施行期間ノ到來ヲ待ツテ實施セラル而シテ其施行期間ハ分ツテ二トス通常施行期間及特別施行期間はナリ前者ハ別段ノ定メナキ場合ニ對スル施行期間ニシテ後者ハ特定ノ法令ノ爲特ニ定メラレタル施行期間ナリトス而シテ通常施行期間ハ公布ノ日ヨリ起算シテ滿二十日ヲ經タル日トス特別施行期間ハ特ニ之ト異ナリタル施行期間ヲ定メタルモノナレハ必要ニ依リ即時之ヲ實施スル場合アリ又通常施行期間ヨリ長キコトアルハ言ヲ俟タス

(乙) 法ノ效力ハ既往ニ遡及セス

法ノ適用ハ實施ノトキニ始マルヲ以テ其實施以後ニ成立スル法律要件タル事項ニ適用セラレ其實施以前ニ完成セル法律要件ニハ適用ナキヲ原則トス之ヲ法ノ不遡及ノ原則ト謂フ從テ此不遡及ノ原則ノ適用上左ノ結果

ヲ生ス

(イ) 舊法ノ下ニ完成シタル法律要件ノ法律效果ハ新法施行後ト雖モ依然舊法ニ依リテ決定ス

(ロ) 法律行爲カ其成立當時ノ舊法ニ定メタル方式ニ適スルトキハ其後其行爲ノ效力條件成立シ(例ヘバ遺言者ノ死亡ノ如シ)法律效果ノ發生スル當時ノ新法ニ定ムル方式ニ合セサルモ舊法ニ依リ效力ヲ生ス

然レ共此原則ハ法令解釋上ノ原則タルニ過キサルモノニシテ立法上絕對ニ遡及效アル法令ヲ設クルヲ得スト謂フニアラス故ニ立法者ハ時勢ノ要求ニ應シテ適當ニ既往ノ事實ニ適用シ得ル法律ヲ制定スルコトヲ得然レ共立法者カ濫リニ此種ノ法律ヲ制定センカ所謂既得權ヲ侵害スルノ虞レアリ

(三) 處ニ關スル法ノ效力

處ニ關スル法ノ效力ニ二主義アリ一ヲ屬人主義ト謂ヒ他ヲ屬地主義ト稱ス屬人主義トハ法ハ人ニ隨伴ストノ主義ニシテ屬地主義トハ之ニ反シ一國ノ法ノ效力ハ其領土内ニ絕對ニ行ハレ國外ニ決シテ施行セストノ主義ナリ古

代ニアリテハ屬人主義行ハレシト雖モ今日ニ於テハ原則トシテ屬地主義ヲ採用ス從テ處ニ關スル法ノ效力トシテ一國ノ法ハ其領土、領海及領空ニ於テ一般ニ行ハルルヲ原則トス然レ共右ノ原則ニ對シテハ次ノ特例アリ

(イ) 一地方ニ對スル特別法ハ全國一般ニ行ハレス

(ロ) 國內ニ於テモ國法ノ效力ヲ及ホササル場所アリ

(A) 他國ノ大使館及公使館内

(B) 領海ニ在ル他國ノ軍艦及公船内

(ハ) 國外ニ於テモ國法ノ效力ヲ及ホス場所アリ

(A) 在外大使館及公使館内

(B) 他國ノ領海内ニ在ル自國ノ軍艦、公船及公海ニ在ル船舶内

(C) 戰時占領ノ外國領土

(D) 領事裁判權ノ行ハルル外國領土

領事裁判權トハ外國ニ於ケル自國民ニ對シ自國領事ヲシテ民事ノミヲ裁判セシムル條約上ノ權利ナリ現今我國ハ支那及暹羅ニ於テ領事裁判

權ヲ有ス(歐羅巴諸國ハ日本ニ對シ安政五年ヨリ明治三十二年七月マテ此領事裁判權ヲ有シタリ)

(三) 人ニ對スル法ノ效力

國法ハ屬地主義ノ原則ニ依ルヲ以テ國內ニ在ル總テノ人ニ行ハルヘキモノナルモ之ヲ極端ニ適用スルトキハ種々ノ不便アルヲ以テ國際慣例又ハ法律ノ性質ニヨリ左ノ例外ヲ認ム

(イ) 特別法ハ或種類ノ人ニ對シテノミ行ハル例ヘハ陸海軍ノ刑法ハ軍人ノミニ行ハレ一定地域ノ住民ニ對スル法ハ其住民ノミカ適用ヲ受クルノ類ナリ

(ロ) 國內ニ於テ國法ノ效力ヲ及ホササル人

(A) 自國ノ君主

(B) 外國ノ元首、大統領、外交官、其家族及從者並ニ軍隊

(註) 治外法權ヲ有スル者ノ在任中ノ行爲ニ付キ科刑處分ヲ爲スコトヲ得ルヤ否ヤニ付テハ學說一致セス一説ニ依レハ治外法權者ハ駐在國ノ裁判權ニ服セサルニ止マリ刑法上不可侵權ヲ有スルニアラス故ニ一旦其身分ヲ失フトキハ

在任中ノ犯罪ニ付キ處罰セラルヘキモノトス（ビンディング氏、ヘーリング氏、フラング氏等）他ノ一説ニ依レハ獨リ裁判權ニ服セサルニ止マラス尙刑法上ニ於テモ不可侵權ヲ有スルモノナルカ故ニ之ヲ消極的ニ決スヘシト
說ク我大審院ノ判例ハ前説ヲ採用ス

(C) 領事裁判權ヲ有スル外國人

(ハ) 國外ニ於テ國法ノ效力ヲ及ホス人

(A) 人ノ身分及能力(成年ノ時期
英佛米伊ハ二十一歳、西丁諾葡ハ二十五歳、日瑞ハ二十歳、埃普ハ二十四歳、蘭ハ二十三歳)

(B) 臣民ノ公義務

(C) 治外法權又ハ領事裁判權ヲ有スル人

(D) 本國ノ公安ニ關スル外國犯罪(皇室罪、謀反罪、貨幣偽造罪ノ類)

第五編 領土及臣民

第一章 領土

第一節 領土ノ性質

古代人口稀少ニシテ人類カ一定ノ居所ヲ定メス水草ヲ逐フテ移轉シタル時代ニハ未タ領土ノ觀念モ生セザリシカ人口ノ増加スルニ從ヒ領土ハ人類團體ノ生存上最モ重ンセララルニ至レリ

近世ノ國家カ土地ヲ離レテ之ヲ觀念シ得サルハ勿論ノコトニシテ一定ノ地域ノ存在ハ實ニ國家構成ノ絕對條件ナリ斯ノ如キ國家ノ構成要素タル地域ヲ領域ト謂ヒ領域タル土地ヲ領土ト稱シ領域タル水面ヲ領海ト稱シ領域タル空間ヲ領空ト稱ス

我領土ハ現在ノ面積約四萬三千方里アリ其中ニ臺灣樺太及朝鮮ノ新領土アリ外ニ關東州ノ租借地アリ南洋群島ノ委任統治區域アリ新領土ニハ當然國法ノ施行

セラルヘキモノナルモ内地ト大ニ事情異ナル所アリテ當然施行シ難キニ因リ特別段ノ法律ヲ以テ特別ノ取扱ヲ爲スコトトナシ居レリ

第一 臺灣

臺灣ハ明治二十八年五月十日ノ日清講和條約ニ依リ我領土ニ歸セシモノニシテ本島附屬島嶼及澎湖列島ヲ含ム本島ニハ總督府ヲ置キ法律ハ勅令ヲ以テ指定シタルモノノミヲ施行シ且ツ總督ヲシテ法律ニ代ルヘキ律令ヲ發スルコトヲ得セシム

第二 樺太

樺太ハ明治三十八年十月十六日ノ日露講和條約ニ依リ我カ領土ニ歸セシモノニシテ薩哈連ノ北緯五十度以南及附近一切ノ島嶼ヲ含ム茲ニ樺太應ヲ置キ施行ヲ要スル法律ハ勅令ヲ以テ指定シ且ツ特定ノ法律事項ハ勅令ヲ以テ規定スルコトトナシ居レリ

第三 朝鮮

朝鮮ハ明治四十三年八月二十二日ノ日韓併合條約ニ依リ帝國ノ一部トナリタ

ルモノニシテ今ハ之ニ總督府ヲ置キ法律ハ勅令ヲ以テ指定シタルモノノミヲ施行シ且ツ總督ヲシテ法律ニ代ルヘキ制令ヲ發セシム

第四 關東州(租借地)

關東州 西曆一八九八年三月バプロフ條約ニ依リ露國カ清國ヨリ二十五年ノ期限ニテ租借セルモノヲ明治三十八年十月ポーツマス條約及明治三十九年一月北京條約ニ依リテ我國カ之ヲ承繼シ更ニ大正四年五月支那共和國トノ條約ニ依リ其租借期限ヲ九十九年ニ延長セルモノナリ(西曆一九九七年ヲ以テ滿期トナル)(英國ノ威海衛及九龍佛國ノ廣州灣並ニ元ト獨逸ノ膠州灣ニ於ケル租借期モ共ニ九十九ケ年ノ期限ヲ有ス)

而シテ之ニ關東廳ヲ置キ我統治權ヲ行フサレト此地ハ我領土ニアラサルヲ以テ憲法モ法令モ當然初メヨリ施行セラレス從テ法律ヲ以テ特例ヲ定ムルノ要ナシ故ニ獨立ノ勅令ヲ以テ特別ノ規定ヲ設ク

(註) 領土ノ租借ハ其實質的效果ニ於テハ殆ント領土ノ割讓ト異ナル所ナキモ左ノ諸點ニ於テ領土ノ割讓ト異ナル

(イ) 領土ノ割讓ハ永久的ナルモ租借ニハ一定ノ期限アリ

(ロ)租借ノ場合ハ租貸國ノ領土權ハ失ハレタルモノニアラス尙潛在的效力ヲ有シ唯租借權ノ爲ニ其效果カ停止セ
ラレタルニ過キス故ニ租借權カ消滅スレハ直ニ回復ス然ルニ領土ノ割讓ハ全然領土權ヲ失フモノナリ

(ハ)租借ノ場合ハ國籍ノ變更ヲ伴ハサルモ領土ノ割讓ノ場合ハ然ラス

第五 南洋群島(委任統治區域)

南洋群島ハ歐洲大戰ノ結果對獨平和條約ニ基キ我帝國ノ委任統治ニ歸シタル
モノニシテ南洋應ヲ置キ我統治權ヲ行フト雖モ固ヨリ我領土ニアラサルカ故
ニ我憲法モ法令モ當然施行セラレス總テ勅令ヲ以テ特別ノ規定ヲ設ク

(註) 委任統治ハ國際聯盟規約ノ成立ニ依リテ始メテ認メラレタル法律上ノ新ナル形式ナリ對獨平和條約ニ依リ獨逸ハ
其總テノ海外屬地ヲ主タル聯盟及聯合國ニ讓渡シタルモ主タル聯盟及聯合國ハ之ヲ何ノ國ノ領土トモナサスシテ
其統治ハ之ヲ特定國ニ委任シ國際聯盟ノ名ニ於テ之ヲ統治セシムル主義ヲ採リ赤道以北ノ南洋群島ノ統治ハ其協
定ニ依リテ我帝國ニ委任シタルモノナリ而シテ國際聯盟規約ニ依レハ統治ノ委任ノ内容ニABCノ三種アリテ我
國ニ委任セラレタル南洋群島ハC式ニ依ルコトトセリ即チC式ノ委任ヲ受ケタル國ハ其地域ヲ「委任國領土」ノ構
成部分トシテ其國法ノ下ニ施政ヲ行フレコトニ定メアリ從テ南洋群島ハ日本カ自國領土ノ構成部分トシテ統治ス
ルモノナルヲ以テ其實質ニ於テハ完全ナル日本ノ領土ト異ナラサルモ法律上ノ性質ニ於テハ之ヲ我帝國ノ領土ト
稱スルコトヲ得ス

第二節 領土變更

第一款 領土變更ノ手續

領土ハ之ヲ分割スルコトヲ得スト稱ヘタル時代アルモ今日ニテハ必要ニ應シ領
土モ分割シ得ルモノニシテ法理上ノ分割ノモノニアラスト爲スニ至レリ而シテ
其領土ヲ分割讓與シ或ハ領土ヲ他ヨリ取得スルニ付テハ其手續各國必スシモ同
一ニアラス今之ヲ大別スレハ左ノ三ト爲スコトヲ得

第一 領土ヲ變更スルニ憲法ノ變更ヲ爲スモノ

憲法ノ改正ヲ要スルハ憲法ニ領土ノ範圍ヲ明カニ定メタル國ニ於テ採用
セル制度ニシテ獨逸(戰前)瑞西ノ如キ是ナリ

第二 領土ヲ變更スルニ法律ノ發布ヲ要スルモノ

領土ヲ變更スルニ法律ノ發布ヲ要ストセルハ憲法ニ於テ領土ノ變更ハ法
律ノ發布ヲ必要トスル旨ヲ明記セル國ニ於テ採用セル制度ニシテ佛蘭西
普魯西、白耳義ノ如キ是ナリ

第三 領土ヲ變更スルニ議會ノ協贊ヲ要スルモノ

領土ヲ變更スルニ議會ノ協贊ヲ必要トセルハ英國ニシテ右ハ憲法ノ明文ニ依ルニアラスシテ從來ノ慣例ニ基クモノナリ

然ラハ我國ハ如何我カ憲法ノ明文ニ領土變更ノ手續ヲ規定シタルモノナク又領土ノ範圍ヲ法律ヲ以テ明カニ定メサルヲ以テ我國ニ於テハ領土變更ニ關シテ右ノ手續ヲ必要トスルモノニアラスト斷定スルコトヲ得ヘシ即チ我國ニ於テハ天皇單獨ニ其自由意思ヲ以テ他ヨリ新領土ヲ取得シ得ルノミナラス他ニ其領土ヲ割讓スルコトヲモ爲シ得ルモノト認ムヘキナリ

第二款 領土變更ノ效果

領土ヲ變更スレハ如何ナル效果ヲ生スルカ左ニ之ヲ分說セン

第一 統治權範圍ノ變更

領土ヲ變更スレハ統治權ノ範圍ニ變更ヲ來スモノナリ即チ新領土ヲ取得スレハ統治權ノ範圍擴大シ領土ヲ割讓スレハ統治權ノ範圍縮少ス然レ共領土ノ割

讓ハ統治權ノ割讓ニハアラサルナリ恰カモ國民ノ一部ヲ喪失スルコトカ統治權ノ一部ヲ喪失スルニアラサルカ如シ是領土ノ割讓カ私法上ニ於ケル土地ノ讓與ト異ナル所以ナリ

第二 領土變更ノ國籍ニ及ホス效果

領土變更ト共ニ國籍ハ必ス變更スルモノト考ヘタル時代ハ十八世紀ノ終リマテ繼續セリ是蓋シ土地ト人民トハ相附著シテ離ルヘカラサルモノナリトノ封建時代ノ思想ヨリ傳來シタルモノナリ然ルニ十九世紀ニ至リ領土變更ノ當然ノ結果トシテ國籍ノ變更ヲ來タスハ不當ナルコトヲ認メ領土ノ變更ヲ爲ストキハ其變更ノ領土内ニ在留スル人民ニ國籍ノ選擇權ヲ與フルコトト爲セリ我カ千島樺太ノ交換條約及明治二十八年ノ馬關條約ニ於テモ亦此國籍ノ選擇權ヲ規定セリ日清講和條約第五條ニ「日本國へ割讓セラレタル地方ノ住民ニシテ右割讓セラレタル地方ノ外ニ住居セント欲スル者ハ自由ニ其所有不動産ヲ賣却シテ退去スルコトヲ得ヘシ其爲本條約批准交換ノ日ヨリ二ケ年間ヲ猶豫スヘシ但シ右年限ノ滿チタルトキハ未タ該地方ヲ去ラサル住民ヲ日本國ノ都

合ニヨリ日本臣民ト看做スコトアヘシト規定シ從テ割讓地ノ住民ハ當然ニ日本ノ國籍ヲ取得セサルモノトセリ然レ共日露講和條約第十條ニ於テハ特別ノ規定ヲ設ケ樺太カ日本ニ割讓セラレタル後ニ於テモ其他ニ住所ヲ有スル露國臣民ハ絶對ニ日本ノ國籍ヲ取得セサルモノトセリ故ニ今日ハ領土變更ノ結果トシテ當然其國籍ノ變更ヲ生セサルモノト爲セリ

第三 領土變更ノ法令ニ及ホス效果

(一) 領土増加ノ場合

(イ) 法令ニ施行區域ヲ明定シタル場合 此場合ニ於テハ此等ノ法律命令ハ新領土ニ對シ其效力ヲ及ホサス若シ新領土ニ對シ其法令ノ效力ヲ及ホサントスルトキハ特別ノ明文ヲ要スルモノトス

(ロ) 法令ニ施行區域ヲ明定セサル場合 施行區域ノ明記ナキ法令ハ新領土ニ對シテモ當然其效力ヲ及ホスモノトス何トナレハ施行區域ノ明記ナキハ全國ニ其效力ヲ及ホスコトヲ前提トシテ發布シタルモノニシテ新領土モ亦領土ノ中ニ屬スレハナリ

(二) 領土減少ノ場合

此場合ニ於テハ法律ニ特ニ施行區域ノ明記アルト否トヲ問ハス他ニ割讓セラレタル領土ニ對シテハ爾後其法令ノ效力ヲ及ホササルモノトス

第二章 臣 民

第一節 臣民ノ意義

臣民トハ國家ノ存立目的ノ範圍内ニ於テ其統治權ニ當然服從スヘキ義務ヲ負フ者ヲ謂フ當然トハ特別ノ原因ニ依ラスト謂フ意ナリ外國人無國籍人ノ如キモ亦自國ノ領土ノ上ニ在ル間ハ其國ノ統治權ニ服從スヘキモノナレ共此等ハ何レモ領土ノ上ニ住居スル事實ニ基キテ統治權ニ服從スル義務ヲ負フニ過キス然レ共臣民カ其從屬國ニ對スル服從ノ關係ハ之ト異ナリ別段ノ例外ナキ限り當然ニ存在ス此結果臣民ハ外國ニ在ル間ニ於テモ尙本國ノ統治權ニ服從スル義務ヲ負フ日本臣民タルノ要件ハ後ニ之ヲ説明スヘシ而シテ國籍ヲ有スル者ハ戶籍法ニ依リテ戶籍簿ニ登録セララルモノトス

(註) 種積博士憲法提要三四三頁ハ臣民ハ國家ニ對シテ絕對無限ニ服従スヘキ義務ヲ負フモノト論セラルル然レ共余輩ハ之ニ對シテ大ニ異論アリ元來國家ハ國民共同生存ノ目的ヲ達センカ爲存立スルモノニシテ國家ハ其目的ノ範圍内ニ於テ權力ヲ有ス故ニ此目的外ニ向テ國家ハ權力ヲ行使スルノ餘地ナシ既ニ國家ノ權力ハ斯ノ如キ範圍ニ限局セラレタルモノタル以上ハ之ヲ以テ國家ノ權力ハ絕對無限ノモノト謂フヲ得ス從テ臣民ノ國家ニ對スル服従義務モ國家ノ目的ノ範圍内ニ限局セララルルモノニシテ此範圍外ニ於テ臣民ハ國家ニ服従セサルヘカラルル理由ナシ故ニ臣民ノ服従義務ハ其本來ノ性質上ヨリ論スレハ無限ノモノト謂フヲ得サルナリ(一木博士國法學講義、副島博士日本帝國憲法論七〇六頁)但シ市村博士ハ此議論ハ用語上ノ争ヒニ過キスト主張セラル(帝國憲法論三八一頁)

第二節 臣民籍(國籍)ノ取得

第一 臣民籍(國籍)ノ性質

臣民カ國家ニ永久從屬スル關係ヲ臣民籍(國籍)ト謂フ臣民籍ハ之ヲ臣民分限トモ謂フ臣民籍ノ性質ニ關シテハ(イ)權利說(ロ)義務說(ハ)身分說ノ三說アリ

(イ) 權利說 國籍ハ權利ノ一種ニシテ種々ノ權利是ヨリ生スルモノナリト謂フ說ナリマルチツ等之ヲ主張ス

(ロ) 義務說 國籍ハ臣民ノ包括的義務ナリト謂フ說ナリボルンハツク等之ヲ

主張ス

(ハ) 身分說 國籍ハ權利又ハ義務ニアラス權利義務ハ國籍ヲ有スル結果之ニ伴ヒテ生スルモノニシテ國籍其モノニアラス國籍其モノハ身分ナリト謂フ說ナリ今日ノ通說トス(同說市村博士帝國憲法論三八三頁)

第二 臣民籍(國籍)ノ取得

臣民籍ノ取得トハ國法ニ依リテ國民タルノ資格ヲ取得スル義ニシテ國籍法ハ左ノ如ク之ヲ規定セリ即チ其資格ヲ取得スルニハ出生ニ依リテ之ヲ得ル場合ト法律ノ手續ニ依リテ之ヲ取得スル場合トノ二アリ前者ヲ生來ノ國籍取得ト謂ヒ後者ヲ非生來ノ國籍取得ト稱ス

(A) 生來ノ國籍取得

出生ニ因リテ國籍ヲ定ムルニ付テハ二主義アリ其一ヲ血統主義ト謂ヒ他ヲ領土主義ト稱ス血統主義トハ父母ノ血統ニヨリ其子ノ國籍ヲ定ムルモノニシテ獨逸(戰前)奧太利(戰前)ハ之ニ依ル領土主義トハ出生シタル領土ノ所屬ニヨリテ國籍ヲ定ムルモノ是ナリ(南米諸國ハ之ヲ採用ス)以上二者ノ中血統主

義ハ人情ニ適合スルモノナルニヨリ我國ニ於テハ原則トシテ之ヲ採用セリ然レ共此主義ニノミ依ルトキハ無籍ノ人民ヲ生スルノ虞レアリ茲ニ於テ乎併セテ領土主義ヲモ採用シ偶々血統主義ニ據ル能ハサルモノアラハ之ニ領土主義ヲ適用スヘキモノトセリ

(註) 米國ニ於テハ其國ニ於テ生レタル者ハ其人種ノ如何ヲ問ハス當然米國ノ市民ト爲ス是所謂領土主義ノ法ナリ然ルニ我國ニ於テハ所謂血統主義ニシテ何レノ國ニ生レルモ苟クモ帝國臣民ノ子孫ナラハ之ヲ帝國ノ國籍ニ編入スルヲ以テ法トナセリ其結果米國ニ生レタル日本人ハ米國ノ市民タルト同時ニ日本帝國臣民タルノ奇現象ヲ生シ其長シテ徵兵適齡ニ及フヤ米國市民タル日本人ノ子モ亦我カ兵役ニ服セサルヘカラサルニ至リ茲ニ二重國籍問題トシテ種々ノ紛糾ヲ生シタリ歷代ノ政府ハ何故ニヤ久シク之カ解決ヲ怠タリシヲ以テ其紛糾ハ米國生レノ日本人ノ徵兵適齡者ヲ増加スル毎ニ益々甚シクナリ行ケリ依テ第四十九議會ニ於テ國籍法ヲ改正シ「勅令ヲ以テ指定スル外國ニ於テ生レタルニ因リテ其國ノ國籍ヲ取得シタル者ハ自ラ日本ノ國籍ヲ留保スルノ意思ヲ表示スルニアラサルハ其出生ノ時ニ過リテ日本ノ國籍ヲ失フ」旨ヲ規定セリ之ニ依リテ在來ニ重國籍ニ苦シミタル青年子弟ハ其苦悶ヲ免レ今後斯ル問題ノ爲ニ苦シムヘキ運命ニアリシ多クノ同胞青年ヲ救ヘリ

- (イ) 凡ソ出生ノ時其父カ日本人ナルトキハ其子ハ之ヲ日本人トス其出生前ニ死亡シタル父カ日本人ナリシトキモ亦同シ
- (ロ) 父カ知レサル場合又ハ國籍ヲ有セサル場合ニ於テ母カ日本人ナルトキ

ハ其子ハ之ヲ日本人トス

- (ハ) 日本ニ於テ生レタル子ノ父母カ共ニ知レサルトキ又ハ國籍ヲ有セサルトキハ其子ハ之ヲ日本人トス

(B) 非生來ノ國籍取得

生來ニアラサル國籍取得ノ場合ヲ舉クレハ左ノ如シ

(一) 親族法上ノ關係ニ因ルモノ

(イ) 婚姻及縁組

即チ日本人ノ妻、入夫又ハ養子トナリタル者ヲ日本人トス(入夫ノ制ハ我國獨特ノモノナリ從テ夫カ妻ノ國籍ヲ取得スル例ハ外國ニナシ又外國ニ於テハ瑞西ノソルツルン州ヲ除クノ外養子縁組ヲ以テ國籍取得ノ原因ト認メス)而シテ外國人カ日本人ノ夫又ハ養子ト爲ル要件ニ付テハ明治三十一年法律第二十一號ニ之ヲ規定ス即チ

- 一 品行方正ナルコト
- 二 引續キ一年以上日本ニ住所又ハ居所ヲ有スルコト

三 内務大臣ノ許可ヲ經ルコト
ヲ要ス

(ロ) 認知

又日本人タル父又ハ母ニ依リテ其子ナルコトヲ認知セラレタル者モ亦日本人トス認知ニヨリ我國籍ヲ取得スルニハ左ノ要件ヲ必要トス即チ

- 一 認知セラレル者ハ其本法ニ依リ未成年ナルコト
- 二 外國人ノ妻ニアラサルコト
- 三 父母ノ中先ニ認知シタル者カ日本人タルコト
- 四 父母同時ニ認知シタル場合ニハ父カ日本人タルコト

(註) 我國籍法ハ常ニ外國人ナル文字ヲ用ヒテ日本人ニアラサル者ト云フ文字ヲ用ヒサリシハ不當ナリ前述ノ如ク國籍

法第五條及第六條ニ外國人ハ妻入夫養子又ハ認知ニ因リテ日本人トナルコトヲ規定シ外國人ト云フ文字ヲ用ヒタルカ故ニ日本人ニモアラサス外國人ニモアラサル無國籍人ハ斯ノ如キ關係ニ於テ日本人トナルヤ否ヤノ疑問ヲ生ムヘキ餘地ヲ與フ何トナレハ外國人ト云フ以上ハ日本國ニアラサル他ノ特定ノ國ニ屬スル國民ナルコトヲ示スモノニシテ日本人ニアラサルト云フ文字ノ如ク廣ク外國人及無國籍人ヲ包含セサレハナリ

(三) 歸化ニ因ルモノ

歸化トハ日本臣民ニアラサル者ノ願出ニ基キ國籍ヲ付與スル行政上ノ處分ニシテ法律ニ定メタル條件ヲ具フルモノニ對シ内務大臣之ヲ許可ス
歸化ノ性質ニ關シテハ二種アリ契約稅及一方行爲說是ナリ

(イ) 契約說

歸化ハ官吏ノ任命又ハ鐵道ノ特許ト同シク公法上ノ契約ナリト唱フル說ナリ我國ニ於テハ美濃部博士之ヲ主張セラルル然レ共余ハ此說ニ贊セス何トナレハ契約トハ民法上ノ觀念ニシテ公法ノ範圍ニ於テ契約ヲ認ムルハ其當ヲ得ス殊ニ歸化ハ政府ト歸化出願者トノ對等ノ合意ニ依リテ之ヲ取得スルモノニアラスシテ内務大臣カ權力的ニ許可ヲ與フルニ依リテ始メテ取得スルモノナルニヨリ契約ト稱スルコトヲ得スト信ス

(ロ) 一方的行爲說

歸化ハ普通一般ノ許可又ハ認可ト均シク一方的行爲ナリ即チ出願者ノ意思ヲ條件トシテ發スル處分命令ナリト謂フ說ナリ我國ニテハ清水博士之ヲ主張セラル余ハ此說ヲ妥當ナリト信ス

而シテ歸化ヲ許ス條件ハ次ノ如シ

- 一 引續キ五年以上日本ニ住所ヲ有スルコト
 - 二 滿二十歳以上ニシテ本國法ニ依リ能力ヲ有スルコト
 - 三 品行方正ナルコト
 - 四 獨立ノ生計ヲ爲スニ足ルヘキ資産及技能ヲ有スルコト
 - 五 我國籍ヲ與フルモ國籍ノ重複ヲ爲ササルコト
- 以上ノ要件ヲ具備シテ歸化スルヲ普通ノ歸化ト稱ス例外トシテ此等ノ要件ノ一部ヲ欠缺セル場合ニ於テモ歸化ヲ許サルルコトアリ之ヲ特別歸化ト稱ス(詳細ハ國籍法第九條第十條第十一條參照)而シテ歸化ヲ許シタルトキハ官報ニテ通常之ヲ公告スト雖モ其效力發生時期ハ告示ノ日ニアラスシテ許可ヲ與ヘタル時ナリ尙本國ニ反對ノ規定ナキ限りハ歸化ノ效力ハ其妻及未成年ノ子ニ及フモノトス

(三) 領土變更ノ結果ニ因ルモノ

領土變更ニ伴フ國籍ノ取得ニ付テハ憲法ニ何等ノ規定ナク國籍法ニモ之ニ

關スル條文ナシ然レ共領土ノ變更カ國籍ノ變更ヲ生スルコト既ニ述ヘタルカ如シ然ラハ憲法ニモ國籍法ニモ明文ナクシテ國籍變更ヲ生スル理由如何是天皇ノ大權ト國際法上ノ原則ニ基クモノナリトス

(1) 領土割讓ノ場合

割讓地ノ住民(第三國ノ人民ヲ包含セス)ハ當然新ナル國ノ國籍ヲ取得スルヤ否ヤニ付テハ特別ノ條約ニ定ムルコトトセリ即チ

(A) 特別ノ條約アル場合

其條約ノ定ムル所ニ依ル

(B) 特別ノ條約ナキ場合

原則トシテ新國ノ主權ニ服從スヘキモノトス
割讓地ノ人民ハ舊本國ヲ愛シ新政府ニ服從スルヲ喜ハサルコト人情ノ常ナルカ故ニ近來ハ領土割讓ノ際ニハ國籍選擇約款ヲ定メ新政府ノ支配ヲ受クルコトヲ潔シトセサル者ハ相當ノ期間内ニ財産ヲ處分シテ立退カシムルヲ例トス

(2) 領土併合ノ場合

併合セラレタル領土ノ住民(第三國ノ人民ヲ包含セス)ハ併合國ノ臣民トナルモノトス併合當時其領土内ニ居住セス外國ニ在ル者ニテモ當然併合國ノ臣民ト爲ルモノトス

第三節 臣民籍(國籍)ノ回復及喪失

第一款 臣民籍(國籍)ノ回復

日本臣民ニシテ一旦國籍ヲ喪失シタル者カ再ヒ之ヲ取得スル場合ハ之ヲ國籍ノ回復ト謂ヒ歸化ニ比スレハ其條件輕易ナリ即チ

(一) 婚姻ニ因リテ日本ノ國籍ヲ失ヒタル者カ婚姻解消ノ後日本ニ住所ヲ有スルトキ

(二) 外國ニ歸化シタル者及之ニ隨伴シテ外國ノ國籍ヲ取得シタル者カ日本ニ住所ヲ有スルトキ

(三) 日本ノ國籍ノ離脱ヲ爲シタル者カ日本ニ住所ヲ有スルトキ

右ノ三者ハ何レモ内務大臣ノ許可ヲ得テ日本ノ國籍ヲ回復スルコトヲ得

第二款 臣民籍(國籍)ノ喪失

國籍喪失ノ原因ハ(イ)婚姻(ロ)離婚及離縁(ハ)認知(ニ)歸化(ホ)國籍離脱トス

(A) 親族法上ノ關係ニ因ルモノ

(イ) 日本人タル女カ外國人ト婚姻シタルトキ

(ロ) 婚姻又ハ養子縁組ニ因リテ日本ノ國籍ヲ取得シタル者カ離婚又ハ離縁ノ場合ニ於テ其外國ノ國籍ヲ有スヘキトキ

(ハ) 日本人タル子カ認知ニ因リ外國ノ國籍ヲ取得シタルトキ

(B) 歸化

自己ノ志望ニヨリ外國ノ國籍ヲ取得シタル者ハ日本ノ國籍ヲ失フ

(C) 國籍離脱

外國ニ於テ生レタルニ因リテ其國ノ國籍ヲ取得シタル日本人カ其國ニ住所ヲ有スルトキハ内務大臣ノ許可ヲ得テ日本ノ國籍ノ離脱ヲ爲スコトヲ得

國籍喪失ノ原因ハ前掲ノ如クナレ共多少ノ制限アリ即チ

(一) 滿十七年以上ノ男子ハ既ニ陸海軍現役ニ服シタルトキ又ハ之ニ服スル義務ナキトキニアラサレハ國籍ヲ失ハス

(二) 現ニ文武ノ官職ヲ帶フル者ハ官職ヲ失ヒタル後ニアラサレハ國籍ヲ失ハス諸外國ニハ以上ノ外ニ尙種々ノ國籍喪失原因ヲ掲クルモノアリ例ヘハ和蘭、白耳義、瑞典、諾威等ニ於テハ永ク外國ニ滞在スルコトヲ以テ國籍喪失ノ一原因トセリ

第四節 臣民籍(國籍)ノ衝突

各國ノ國籍法ハ必スシモ其主義ヲ同シウセサルヲ以テ往々ニシテ同一人ニシテ二個以上ノ國籍ヲ有シ又ハ之ト反對ニ何レノ國籍ヲモ有セサル場合アリ而シテ同一人カ二個以上ノ國籍ヲ併有スル場合ヲ國籍ノ積極的衝突ト謂ヒ何レノ國籍ヲモ有セサル場合ヲ國籍ノ消極的衝突ト稱ス

(一) 積極的衝突ノ場合ニ於テ其カ日本ノ國籍ナルトキハ其者ハ日本ノ國法上

ニ於テハ之ヲ日本臣民ト看做ス從テ他ノ日本臣民ト何等ノ差異ナシ

(二) 消極的衝突ノ場合ニ於テハ嘗テ日本人タリシ者ト雖モ全ク外國人トシテ取扱ハレ日本臣民トシテ取扱ハルコトナシ

第五節 臣民ノ階級

日本臣民タルノ資格ハ何人モ平等ナリ然レ共其社會上ノ地位ハ歷史上ノ原因ニ因リテ同シカラス茲ニ於テ乎臣民ノ階級ナルモノヲ生ス現今我國ニ存スル臣民ノ階級ハ華族、士族、平民ノ三階級トス此中士族、平民ハ唯稱呼ノ相違ノミニシテ普通民ナリ今日ノ法制ニ於テハ士族ハ法律上何等ノ特權ヲ有スルコトナシ士族ノ名稱ハ唯其祖先カ武士又ハ之ト同等ノ類族ナリシコトヲ表彰スル歷史上ノ遺物タルノ外榮譽ノ表彰トシテモ何等ノ價值ナキモノトス若シ士族カ有效ニ榮譽ノ表彰タランカ平民ヲ陞セテ士族トナス國家ノ行爲モ亦存セサルヘカラス然レ共斯カル制度ハ今日既ニ存セス故ニ敢テ之ヲ廢止スルノ必要ナキモ亦之ヲ存續スヘキ必要モナシ戶籍取扱ノ事務ヲ簡便ニセン爲ニハ寧ロ之ヲ廢止スルニ如カサ

ルヘシ唯華族ハ皇室ノ藩屏トシテ特別ノ待遇保護及監督ヲ受クルノ差アルノミ
法律ノ前ニ於テハ何等ノ差別アルコトナシ

第一 華族

(一) 華族タル資格

爵ヲ受ケタル者ヲ華族トス爵ニ公、侯、伯、子、男ノ五等アリ有爵者ノ家族モ亦華
族ノ族稱ヲ受ク華族ノ名稱ハ明治二年ニ始メテ公卿諸侯ノ名ヲ廢シテ之ヲ
設ク授爵ノ大權カ天皇ニ屬スルコトハ憲法第十五條、華族令第三條ノ明記ス
ル所ナリ

茲ニ注意ヲ要スルハ授爵ト叙位トハ同シカラス叙位ハ個人ニ對スルモノナ
レハ子孫ニ之ヲ傳フルヲ得ス授爵ハ家ニ對スルモノナルヲ以テ世襲ナリ家
督相續人タル男子ニ之ヲ襲カシム

(二) 華族ノ特權

(イ) 貴族院議員タル權(貴族院令第三十四條)

(ロ) 世襲財産ヲ設クルノ權(華族世襲財産法)

(ハ) 家範ヲ定ムルノ權(華族令第八條)

(ニ) 勅許ヲ得タル華族ハ皇族ト婚嫁スルコトヲ得(皇室典範第三十九條)

(三) 華族ニ特別ナル義務

(イ) 其身分上ノ關係ニ付キ特ニ宮内大臣ノ嚴重ナル監督ニ服スル義務

(ロ) 其品位ヲ保ツ義務

(ハ) 世襲財産ヲ維持スル義務

(四) 華族ノ懲戒

華族ノ懲戒ニハ(一)華族令ニ依ル懲戒(二)華族戒飭令ニ依ル戒飭ノニアリ

(イ) 華族令ニ依ル懲戒ハ禮遇停止及禁止、族稱ノ除去、爵位返上ヲ主ナルモノ
トス(華族令第二十條乃至第二十六條)

(ロ) 華族戒飭令ニ依ル戒飭ハ華族令ノ懲戒ニ該ラサル輕微ナル失行ニ對シ
テ之ヲ行フモノナリ戒飭ニハ(一)譴責(二)訓戒ノニアリ

(一) 譴責ハ失行ヲ糾シ且ツ將來ヲ戒飭スルモノナリ

(二) 訓戒ハ過去ニ照シテ主トシテ將來ヲ戒飭スルモノナリ